松山市文化財調査報告書 204

（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東垣生八反地遺跡

－６次調査－

２０２２

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ひがしはぶはったんじ

東垣生八反地遺跡

－６次調査－

２０２２

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１．調査地から松山空港を望む（南東より）

巻頭図版２．４・５区水田址検出状況（南より）

巻頭図版３．施釉陶器

巻頭図版４．おろし皿（古瀬戸）

序　言

本書は、松山市が実施する（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書です。調査地が所在する松山市東垣生町は松山市内西部に位置し、町内には水田地帯が広がり、住宅地や商業施設が点在しています。

本調査では、室町時代の水田址や平安時代から鎌倉時代の集落址を発見しました。このうち、水田址からは幅３ｍを超える大型の畦畔が複数見つかりました。これら畦畔の検出は、当時の水田形状や規模などを解明するうえで貴重な成果といえます。

一方、集落址では掘立柱建物址や溝、土坑、井戸址等が見つかりました。特に土坑からは平安時代後期、11 世紀代に製作された土器がまとまって出土しており、当時の土器様相が知れる重要な資料を得ることができました。

このような成果をあげることができましたのも、市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

本書が文化財保護や教育文化の振興、さらには埋蔵文化財の調査・研究の一助となれば幸いです。

令和４年２月

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

例　　言

1．本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが令和２年２月から８月までの間に実施した松山市東垣生町650番1、651番1、652番1、653番1、663番、664番、654番1、651番５の各一部における（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書掲載の遺構は、呼称名を略号化して記述した。
溝：SD、掘立柱建物：掘立、土坑：SK、井戸：SE、柱穴：SP

3．本書で使用した標高値は海抜標高を示し、方位はすべて世界測地系2000を基準とした方眼北である。

4．国土座標軸測量（4級基準点測量・4級水準測量）は、令和元年度に株式会社エクセル調査設計に業務を委託し、令和２年度には国際航業株式会社松山営業所に業務を委託した。写真撮影は株式会社南海放送サービスに業務を委託し、ドローンによる２回の撮影を行った。また、写真測量（対標点設置・写真撮影・画像処理）では国際航業株式会社に業務を委託した。

5．本書掲載の基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版－標準土色帖』（2004年版）に準拠した。

6．本書掲載の遺構図は水本　完児、宮脇　和人が作成し、遺物の実測・製図及び遺構図の製図作業は宮内　慎一の指示のもと、山下　満佐子、平岡　直美、山之内　聖子、篠原　綾、寺尾　いずみ、二宮　八咲、渡部　美佐緒が行った。

7．発掘調査時の遺構写真撮影は、水本、宮脇と大西　朋子が行った。遺物写真撮影及び写真図版の作成は、大西が担当した。

8．本書の執筆と編集は、水本と宮内が担当し、浄書は平岡が担当した。

9．本書で使用した遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第１章　はじめに…… 1

第１節　調査に至る経緯…… 1

第２節　調査・刊行組織…… 3

第２章　遺跡の概要…… 4

第１節　遺跡の立地 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の概要…… 7

第１節　調査の経緯…… 7

第２節　層　位…… 8

第３節　遺構と遺物…… 10

１．１区の調査 …… 11

２．２区の調査 …… 16

３．３区の調査 …… 47

４．４区の調査 …… 51

５．５区の調査 …… 57

第４章　自然科学分析…… 95

第５章　調査の成果と課題…… 101

挿 図 目 次

第１章　はじめに
第 1 図　調査地及び周辺遺跡分布図（縮尺 1：5,000）……2

第２章　遺跡の概要
第 2 図　松山平野の地形分布図（縮尺 1：200,000）……5
第 3 図　周辺遺跡分布図（縮尺 1：40,000）……6

第３章　調査の概要
第 4 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）……8
第 5 図　土層柱状図（縮尺 1：40）……9
第 6 図　畦畔 101 測量図（縮尺 1：100）……12
第 7 図　1 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図（縮尺 1：100）……13
第 8 図　1 区水田層・トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1：3）……15
第 9 図　2 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図（縮尺 1：100）……17
第 10 図　畦畔 201・202 断面図（縮尺 1：80）……19
第 11 図　畦畔 203 測量図（縮尺 1：100）
第 12 図　水田 1 埋土出土遺物実測図（縮尺 1：3）……21
第 13 図　第 7 層（灰色砂）出土遺物実測図（縮尺 1：3）……22
第 14 図　水田 2 埋土出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）
第 15 図　水田 2 埋土出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）……23
第 16 図　水田 2 足跡・畦畔 201 出土遺物実測図（縮尺 1：3）
第 17 図　SD201 断面図（縮尺 1：40）……24
第 18 図　SD201 出土遺物実測図（縮尺 1：3）
第 19 図　2 区遺構配置図（縮尺 1：150）……25
第 20 図　掘立 201 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：80、1：3）……26
第 21 図　掘立 202 測量図（縮尺 1：80）……27
第 22 図　掘立 202 出土遺物実測図（縮尺 1：3）……28
第 23 図　SK201・204 測量図（縮尺 1：30）
第 24 図　SK201 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）……29
第 25 図　SK201 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）……30
第 26 図　SK204 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）……31
第 27 図　SK204 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）……32
第 28 図　SK202・209 測量図（縮尺 1：30）……33
第 29 図　SK202 出土遺物実測図（縮尺 1：3）……34

第 30 図　SK209 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 35
第 31 図　SK203 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）
第 32 図　SK205 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）…… 36
第 33 図　SK206 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）…… 37
第 34 図　SK207 測量図（縮尺 1：30）
第 35 図　SK207 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 38
第 36 図　SK208 測量図（縮尺 1：30）
第 37 図　SK208 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 39
第 38 図　SE201 測量図（縮尺 1：50）…… 40
第 39 図　SE201 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 41
第 40 図　SE202 測量図（縮尺 1：50）…… 42
第 41 図　SE202 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 43
第 42 図　2 区柱穴出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 44
第 43 図　2 区包含層出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）…… 45
第 44 図　2 区包含層出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）…… 46
第 45 図　2 区地点不明出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 47
第 46 図　畦畔 301 断面図（縮尺 1：80）…… 48
第 47 図　畦畔 302・SD301 測量図（縮尺 1：100）
第 48 図　3 区足跡等検出状況図、西壁土層図（縮尺 1：100）…… 49
第 49 図　SD302 測量図（縮尺 1：100）…… 51
第 50 図　畦畔 401 断面図（縮尺 1：80）…… 52
第 51 図　畦畔 402・403 測量図（縮尺 1：100）
第 52 図　4 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図（縮尺 1：100）…… 53
第 53 図　4 区水田層出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 56
第 54 図　畦畔 501・502・503 断面図（縮尺 1：80）…… 58
第 55 図　5 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図（縮尺 1：100）…… 59
第 56 図　畦畔 504・505 測量図（縮尺 1：100）…… 61
第 57 図　5 区水田層出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 62
第 58 図　5 区遺構配置図（縮尺 1：150）…… 63
第 59 図　SD501・502 断面図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）…… 64
第 60 図　SK501・502 測量図（縮尺 1：30）…… 65
第 61 図　SK503 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）…… 66
第 62 図　5 区柱穴出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 67
第 63 図　5 区包含層・地点不明出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 68

第 4 章　自然科学分析

第 64 図　暦年較正結果…… 98
第 65 図　東垣生八反地遺跡 6 次調査出土の木材・種実…… 100

第５章　調査の成果と課題
第 66 図　畦畔検出状況図（縮尺 1：1,000）……102

表 目 次

第１章　はじめに
表 1　東垣生八反地遺跡　調査一覧……3

第３章　調査の概要
表 2　検出遺構・出土遺物一覧……11
表 3　溝一覧……69
表 4　掘立柱建物址一覧
表 5　土坑一覧
表 6　井戸址一覧……70
表 7　柱穴一覧
表 8　1 区水田層出土遺物観察表（土製品）……79
表 9　1 区トレンチ出土遺物観察表（土製品）……80
表 10　2 区水田 1 埋土出土遺物観察表（土製品）
表 11　2 区第 7 層（灰色砂）出土遺物観察表（土製品）……81
表 12　2 区水田 2 埋土出土遺物観察表（土製品）
表 13　2 区水田 2 足跡出土遺物観察表（土製品）……82
表 14　2 区畦畔 201 出土遺物観察表（土製品）
表 15　SD201 出土遺物観察表（土製品）
表 16　掘立 201 出土遺物観察表（土製品）……83
表 17　掘立 202 出土遺物観察表（土製品）
表 18　SK201 出土遺物観察表（土製品）
表 19　SK204 出土遺物観察表（土製品）……84
表 20　SK204 出土遺物観察表（鉄製品）……85
表 21　SK202 出土遺物観察表（土製品）
表 22　SK209 出土遺物観察表（土製品）……86
表 23　SK203 出土遺物観察表（土製品）
表 24　SK205 出土遺物観察表（土製品）
表 25　SK206 出土遺物観察表（土製品）……87
表 26　SK207 出土遺物観察表（土製品）
表 27　SK208 出土遺物観察表（土製品）
表 28　SE201 出土遺物観察表（土製品）……88

表 29　SE201 出土遺物観察表（鉄製品）……89
表 30　SE202 出土遺物観察表（土製品）
表 31　2 区柱穴出土遺物観察表（土製品）……90
表 32　2 区包含層出土遺物観察表（土製品）
表 33　2 区包含層出土遺物観察表（石製品）……91
表 34　2 区地点不明出土遺物観察表（土製品）
表 35　4 区水田層出土遺物観察表（土製品）……92
表 36　5 区水田層出土遺物観察表（土製品）
表 37　SD501 出土遺物観察表（土製品）……93
表 38　SD502 出土遺物観察表（土製品）
表 39　SK503 出土遺物観察表（土製品）
表 40　SK503 出土遺物観察表（石製品）
表 41　5 区柱穴出土遺物観察表（土製品）
表 42　5 区柱穴出土遺物観察表（石製品）……94
表 43　5 区包含層出土遺物観察表（土製品）
表 44　5 区地点不明出土遺物観察表（土製品）

第 4 章　自然科学分析
表 45　樹種同定結果……96
表 46　微細物分析・種実同定結果……97
表 47　放射性炭素年代測定結果

写真図版目次

巻頭図版 1.　調査地から松山空港を望む（南東より）
巻頭図版 2.　4・5 区水田址検出状況（南より）
巻頭図版 3.　施釉陶器
巻頭図版 4.　おろし皿（古瀬戸）
図版 1　1.　1 区水田址検出状況①（西より）
図版 2　1.　1 区水田址検出状況②（南西より）
　　2.　1 区北壁土層（南より）
図版 3　1.　1 区畦畔 101 検出状況（北西より）
　　2.　1 区出土遺物（水田層：1 ～ 3・5・6、トレンチ：9）
図版 4　1.　2 区水田址検出状況①（北東より）
　　2.　2 区水田址検出状況②（東より）
図版 5　1.　2 区水田 1 検出状況（南より）

2. 2 区東壁土層（西より）
図版 6　1. 2 区畦畔 201、水田 2 検出状況（西より）
2. 2 区畦畔 203 検出状況（南西より）
図版 7　1. 2 区集落址検出状況（西より）
2. 2 区集落址完掘状況（北より）
図版 8　1. 2 区 SD201 検出状況（北西より）
2. 2 区掘立 202 完掘状況（北より）
図版 9　1. 2 区掘立 202（SP2051）柱材検出状況（南より）
2. 2 区 SK201・204 遺物出土状況（南より）
図版 10　1. 2 区 SK201・204 完掘状況（南より）
2. 2 区 SK202・209 検出状況（南より）
図版 11　1. 2 区 SK202・209 断面（東より）
2. 2 区 SK202 敷石検出状況①（東より）
図版 12　1. 2 区 SK202 敷石検出状況②（北より）
2. 2 区 SK203 検出状況（南より）
図版 13　1. 2 区 SK205 遺物出土状況（西より）
2. 2 区 SK207 遺物出土状況（西より）
図版 14　1. 2 区 SK208 遺物出土状況（南より）
2. 2 区 SE201 検出状況（西より）
図版 15　1. 2 区 SE201 断面（東より）
2. 2 区 SE201 半截状況（北東より）
図版 16　1. 2 区 SE201 掘り方検出状況（南東より）
2. 2 区 SE201 杭・板材出土状況（西より）
図版 17　1. 2 区 SE202 完掘状況（西より）
2. 2 区 SE202 断面（北西より）
図版 18　1. 2 区出土遺物（水田 1 埋土：14 ～ 16・18・22・23・26、水田 2 埋土：33 ～ 36・41・42、畦畔 201：50）
図版 19　1. 2 区出土遺物（SD201：54・58 ～ 62、掘立 201：64・68・69・71・72）
図版 20　1. SK201 出土遺物
図版 21　1. SK204 出土遺物①
図版 22　1. 2 区出土遺物（SK204 ②：118 ～ 120、SK202：121・124・126 ～ 129、SK209：130・134）
図版 23　1. 2 区出土遺物（SK203：137、SK205：138・139、SK207：144・146 ～ 149）
図版 24　1. 2 区出土遺物（SK208：152 ～ 159、SE201 ①：161・165・168）
図版 25　1. 2 区出土遺物（SE201 ②：169・174 ～ 177・179・184、SE202 ①：190・193）
図版 26　1. 2 区出土遺物（SE202 ②：195・196・200、SP2064：209、SP2140：212、SP2053：214、包含層①：217・220・222・228）
図版 27　1. 2 区出土遺物（包含層②：230・231・233・234・236、地点不明：237・238・241）
図版 28　1. 出土遺物（掘立 202 SP2051：A、SE201：B ～ E）

図版 29　1. 3 区水田址検出状況（北より）
図版 30　1. 3 区畦畔 301 検出状況（南東より）
　　2. 3 区畦畔 302、SD301 検出状況（南より）
図版 31　1. 4・5 区水田址検出状況（南東より）
　　2. 4 区畦畔 401 検出状況（東より）
図版 32　1. 4 区畦畔 402 検出状況（北より）
　　2. 4 区畦畔 403 検出状況（北東より）
図版 33　1. 4 区北壁土層（南東より）
　　2. 4 区作業風景（南西より）
図版 34　1. 4 区水田層出土遺物
　　2. 5 区水田址検出状況（北東より）
図版 35　1. 5 区畦畔 501 検出状況（南東より）
　　2. 5 区西壁土層（北東より）
図版 36　1. 5 区集落址検出状況（東より）
　　2. 5 区集落址完掘状況（東より）
図版 37　1. 5 区出土遺物（水田址：256・258・260、SD501：269・270、SP5011：276、SP5095：279、SP5022：280）
図版 38　1. 5 区出土遺物（SP5081：281・282、SP5063：284、包含層：286 ～ 288、トレンチ：289 ～ 291、地点不明：292・294）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

2019（令和元）年３月25日、松山市教育委員会事務局保健体育課（以下、保健体育課という。）より、松山市東垣生町650番１外（以下、申請地という。）における（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。

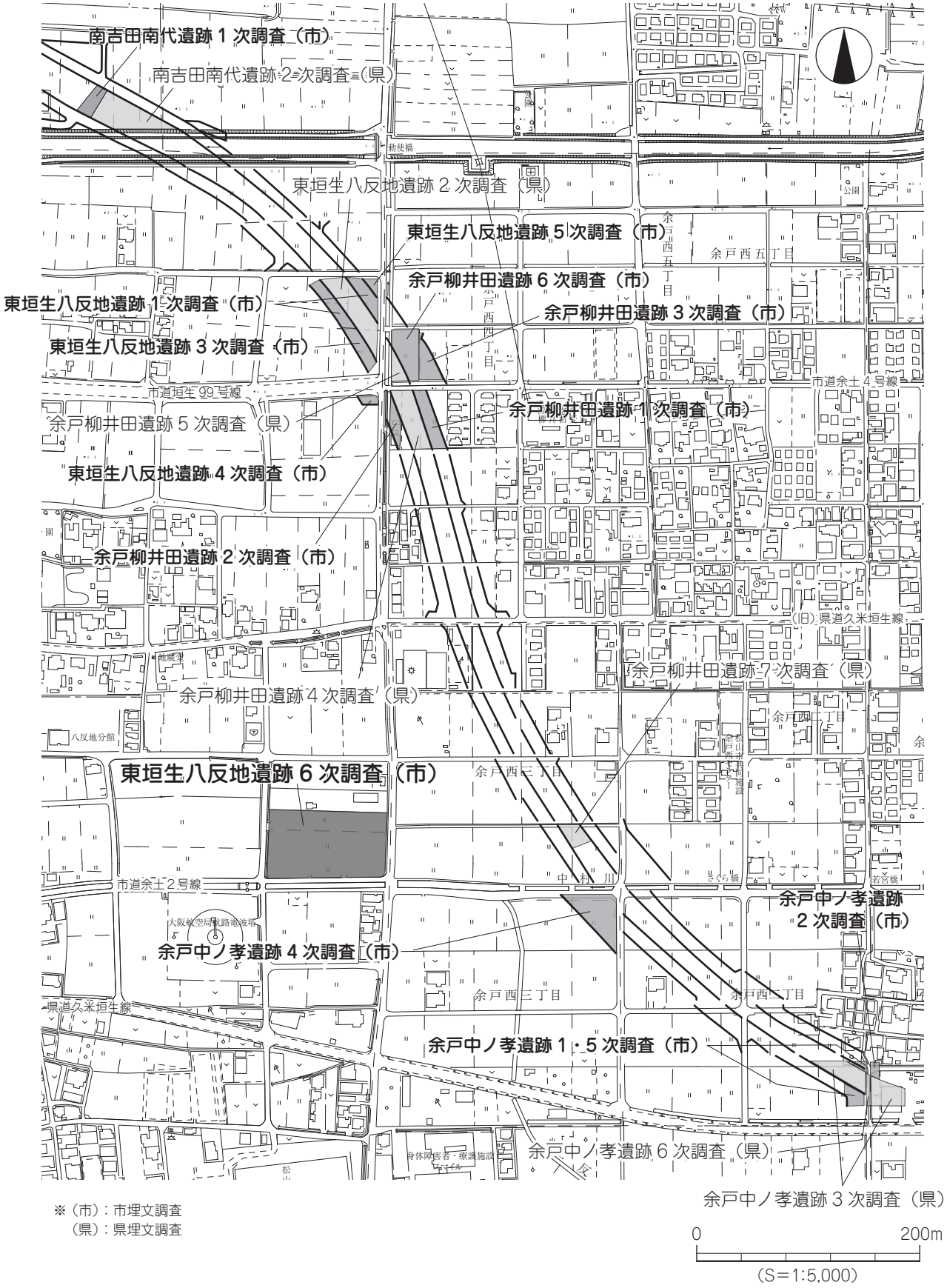
申請地が所在する松山市東垣生町周辺では、平成26年度から28年度にかけて、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター（以下、県埋文という。）と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、市埋文という。）により、松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施された(第１図)。調査では弥生時代後期から終末期及び古墳時代の竪穴建物をはじめ、平安時代から鎌倉時代の集落址（掘立柱建物址・溝・土坑・井戸址・土壙墓・柱穴）や室町時代の水田址、畠址が検出されている。遺物は、弥生時代前期から室町時代までの土器類（弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器・陶磁器）や石器、鉄器、木器、動物遺存体などが数多く発見されている。

これらのことから、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、市埋文は試掘調査を実施することになった。試掘調査は、2019（令和元）年５月27日（月）から同年５月31日（金）にかけて実施した。20本の試掘調査用トレンチを掘削し、遺構・遺物の確認作業を行った結果、溝や土坑、柱穴のほか、水田耕作に伴う足跡を検出した。遺物は土師器や須恵器、陶磁器等の破片が出土した。

この結果を受け、保健体育課と文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、学校給食共同調理場整備事業により破壊される遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査については保健体育課と市埋文との間で数回の協議が行なわれ、2019（令和元）年12月16日付で、発掘調査に関する委託契約が締結された。

発掘調査は申請地内における古代から中世の集落様相解明を主目的とし、市埋文が主体となり、文化財課の協力のもと、2020（令和２）年２月３日より開始した。なお、発掘調査は調査名を『東垣生八反地（ひがしはぶはったんじ）遺跡６次調査』として実施した。これまでに、東垣生八反地遺跡として県埋文と市埋文により５度の調査が実施されており、平安時代から鎌倉時代の集落址や室町時代の生産址などが確認されている。各調査の詳細は、表１に記す。

調査場所：松山市東垣生町650番１、651番１、652番１、653番１、663番、664番、654番１、651番５の各一部
調査面積：2,088㎡
調査期間：2020（令和２）年２月３日（月）～ 同年８月７日（金）
整理期間：2021（令和３）年６月１日（火）～ 同年12月28日（火）
調査主体：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター



※（市）：市埋文調査
（県）：県埋文調査

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図

表１　東垣生八反地遺跡　調査一覧

調 査 名	調査年度	調査面積（㎡）	検出遺構	時　代	調査主体
東垣生八反地（１次）	H27	874	掘立柱建物・溝・土坑・土壙墓・井戸・水田址	鎌倉～室町	市埋文
東垣生八反地（２次）	H28	1,278	溝・土坑・水田址	平安～室町	県埋文
東垣生八反地（３次）	H28	236	溝・土坑・柱穴・水田址	鎌倉～室町	市埋文
東垣生八反地（４次）	H28	177	溝・土坑・井戸・柱穴	鎌倉～室町	市埋文
東垣生八反地（５次）	R1	124.22	溝・柱穴・水田址	鎌倉～室町	市埋文

第２節　調査・刊行組織

発掘調査は令和２年２月３日（月）より開始し、同年８月７日（金）に終了した。調査に伴う整理作業は、発掘調査と併行して行った。なお、報告書刊行に伴う整理作業は、保健体育課と市埋文との間で、令和３年度に報告書の印刷及び発送に関する委託契約を締結した。作業は令和３年６月１日（火）より開始し、同年 12 月 28 日（火）にて終了した。作業は主に出土品の復元・実測、及び土層図・遺構図の作成と作成図面のデジタルトレースを行ったほか、報告書掲載遺物の写真撮影及び図版作成を行い、編集作業を終えた。整理作業終了後には、報告書の印刷・刊行及び全国の関係機関へ報告書の発送を行った。

〔平成 31・令和元年度　調査組織〕（平成 31 年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	大野　昌孝
施設管理部	部　長	片上　俊哉
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
	主　任	水本　完児（調査担当）
	主　任	宮内　慎一（調査担当）
	補助員	宮脇　和人（調査担当）

〔令和２年度　調査組織〕（令和２年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	杉野　公典
施設管理部	部　長	杉野　公典
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一

主　任　水本　完児（調査担当）
嘱　託　宮内　慎一（調査担当）
宮脇　和人（調査担当）
大西　朋子（写真担当）

〔令和３年度整理・刊行組織〕（令和３年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	杉野　公典
施設管理部	部　長	杉野　公典
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
	主　査	吉岡　和哉
	主　任	水本　完児（整理担当）
	嘱　託	宮内　慎一（整理担当）
		宮脇　和人（整理担当）
		大西　朋子（写真担当）

第２章　遺跡の概要

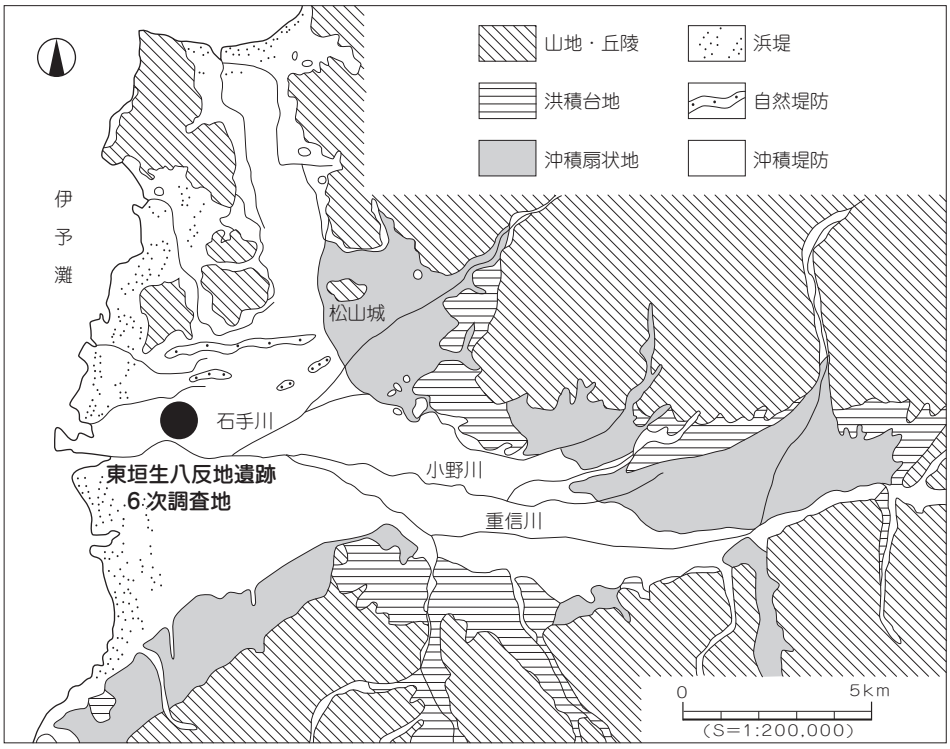
第１節　遺跡の立地

松山平野は四国北西部に位置する愛媛県下最大の平野であり、平野西部には瀬戸内海の斎灘や伊予灘、平野北部には高縄半島、平野東部は四国山地に囲まれている。平野内は一級河川の重信川や石手川など、大小の河川で形成された扇状地堆積物と沖積低地や浜堤などで形成されている。表層の地質は重信川右岸が領家花崗岩帯に属し、中生代に嵌入した古期領家花崗岩類で形成されるのに対して、左岸は重信川と中央構造線の間に後期白亜紀に形成された海成堆積層である和泉層群と、南辺には変成岩帯である三波川帯が帯状に分布している。

東垣生八反地遺跡６次調査地は平野西部にあり、松山空港（滑走路）西端から南東 2kmの地点、海抜標高 4.0 ～ 4.1 mに立地している。調査地の絶対位置は、北緯 33° 48′ 49″、東経 132° 43′ 7″である。調査地周辺は静粛な水田地帯が広がり、調査地西方には新興住宅地が所在する（第２図）。

第２節　歴史的環境

ここでは、調査地周辺の遺跡について、主に松山外環状道路（空港線）整備に伴う発掘調査を中心に概観する（第３図）。



第２図　松山平野の地形分布図

弥生時代

調査地東方、標高約７ｍに位置する余戸払川遺跡では弥生時代前期末から中期初頭、中期、後期後半の建物址や溝、土坑で構成される集落址が発見されている。また、余土中学校構内遺跡からは前期から後期にかけての溝や土坑、柱穴を検出している。特に、溝からは石器の未成品が多数出土しており、調査地近隣では石器製作が行われていたものと推測されている。このほか、調査地東方約 200 ｍの地点にある余戸中ノ孝遺跡３次調査では弥生時代後期から終末期の竪穴建物や溝が検出されている。なお、調査地北西部、約 1㎞にある南吉田南代遺跡１次・２次調査からは弥生時代前期から終末期までの遺物が包含層中から出土しているほか、同２次調査では弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土坑が検出され、完形品を含む土器が出土している。

古墳時代

前述した余戸中ノ孝遺跡３次調査や同５次調査からは古墳時代中期の竪穴建物が検出され、市場系須恵器が出土した５世紀前半頃の竪穴建物が発見されている。また、３次調査では６世紀代のカマドを付設する建物址のほか掘立柱建物址も検出されている。前述した南吉田南代遺跡からは、包含層中より古墳時代後期の遺物が出土している。

古　代

飛鳥時代や奈良時代の遺跡は検出されておらず、平安時代になり調査地周辺に遺跡が散在している。調査地北方約 500 ｍの地点にある余戸柳井田遺跡６次調査では平安時代後期、11 世紀頃に使用された土師器や須恵器が出土した溝を検出し、同調査地近隣の東垣生八反地遺跡２次調査からは平安時代

の遺物が数多く出土している。

中　世

鎌倉時代で余戸中ノ孝遺跡や余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡において、建物址や溝、土坑のほかに土壙墓や井戸址が発見されている。このうち、余戸中ノ孝遺跡１次調査からは溝を伴った土壙墓が検出され、墓坑内からは、ほぼ完全な姿の人骨が出土している。また、井戸址は６基検出されており、井戸枠には曲物が使用されていた。検出した遺構は鎌倉時代後期、13 世紀後半頃の遺構である。

生産址では水田耕作に伴う畦畔や溝、足跡のほか余戸柳井田遺跡５次調査からは畠耕作に伴う畝状遺構などが発見されている。

【参考文献】

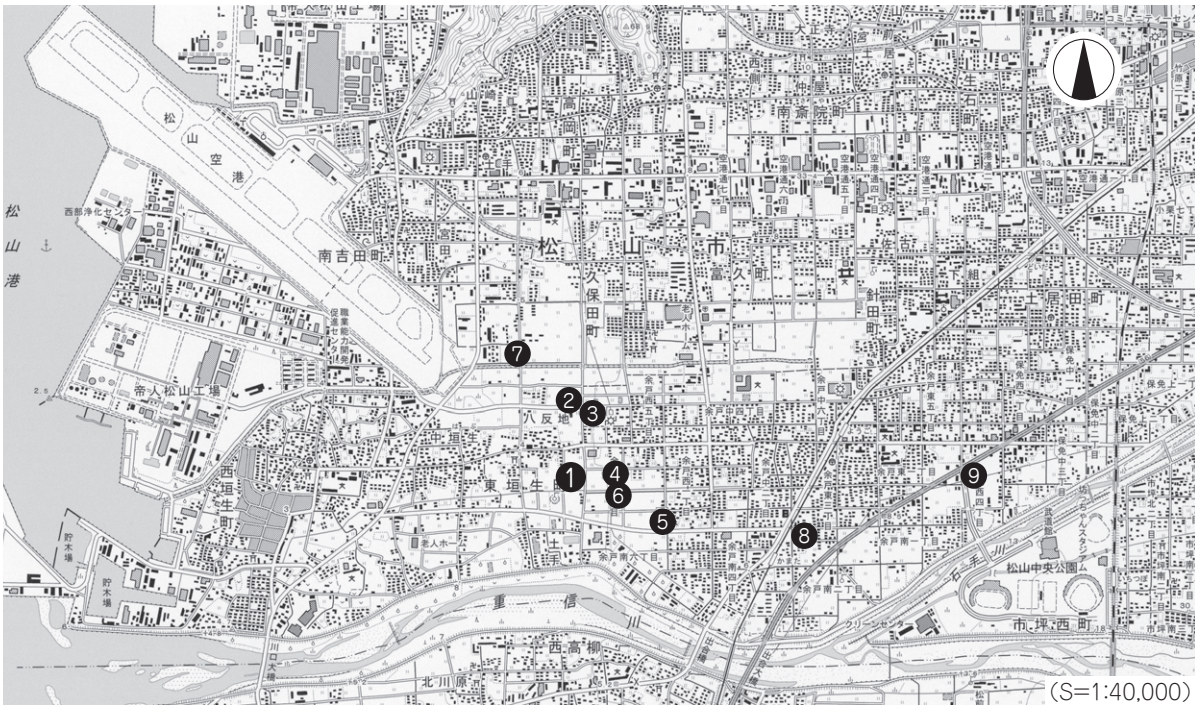
宮内 慎一 他　2019　『松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　余戸中ノ孝遺跡１・２・４・５次調査　余戸柳井田遺跡１・２・３・６次調査　東垣生八反地遺跡１・３・４次調査　南吉田南代遺跡１次調査』松山市文化財調査報告書 第 196 集

水本　完児　2020　『東垣生八反地遺跡－５次調査－』松山市文化財調査報告書 第 198 集

三好　裕之 他　2018　『余戸中の孝遺跡３・６次』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書 第 193 集

三好　裕之 他　2021　『余戸払川遺跡１・２次　余戸中の孝遺跡７次　余戸柳井田遺跡４・５次　余戸柳井田遺跡７次　東垣生八反地遺跡２次　南吉田南代遺跡２次』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書 第 202 集

河野　史知　2016　「余土中学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報 28』



❶ 東垣生八反地遺跡6次調査　❷ 東垣生八反地遺跡1·2·3·4·5次調査　❸ 余戸柳井田遺跡1·2·3·4·5·6次調査
❹ 余戸柳井田遺跡7次調査　❺ 余戸中ノ孝遺跡1·2·3·5·6次調査　❻ 余戸中ノ孝遺跡4次調査
❼ 南吉田南代遺跡1·2次調査　❽ 余戸払川遺跡　❾ 余土中学校構内遺跡

第３図　周辺遺跡分布図

第３章　調査の概要

第１節　調査の経緯

調査地が所在する松山市東垣生町は松山平野西部に位置し、町内には民家や商業施設のほかに水田地帯が広がっている。調査地の北東約 2㎞の地点には松山空港があり、調査地上空は旅客機の離着陸ルートとなっている。

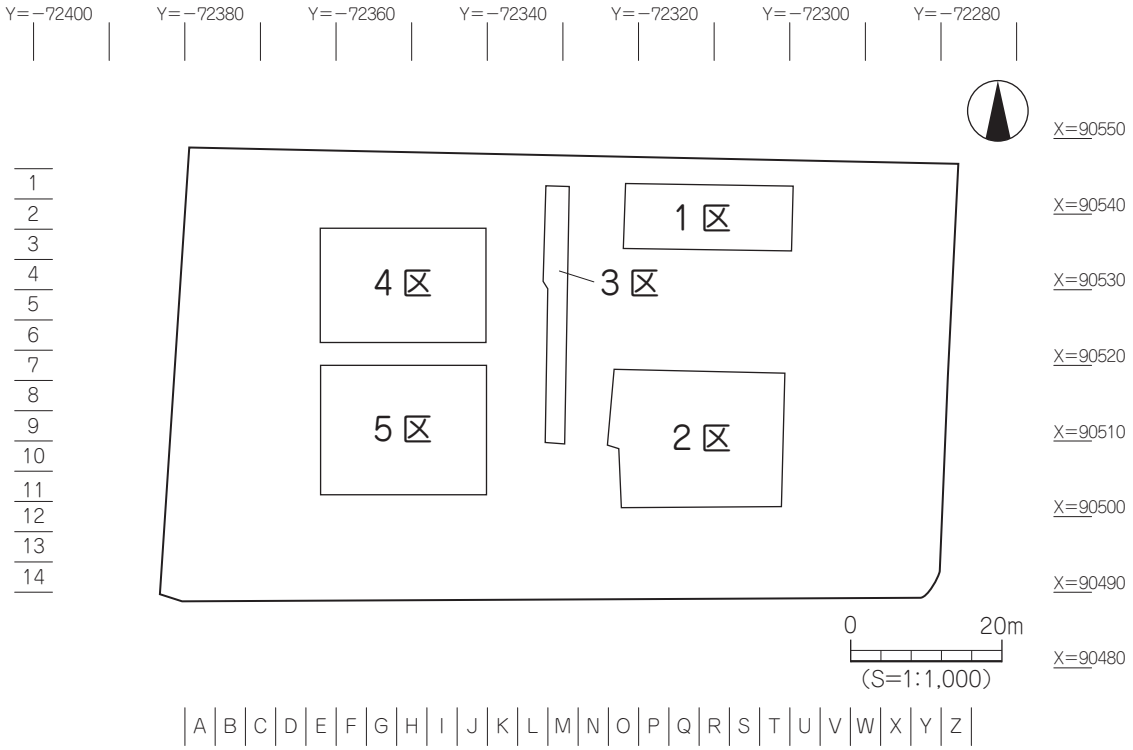
発掘調査は、建物の建設に先立って行う擁壁工事と併行して実施した。そのため、調査事務所の設置や駐車場用地は調査地西隣にある松山市の所有地（松山市東垣生町 648 － 1）を借用した。

調査は、令和２年２月３日（月）より開始した。工事進行との都合により、調査は調査地内を５つの地区(1～5区)に分区して実施した。まず､調査対象地東半部にある１区から３区の調査に着手した。重機（バックホー･不整地運搬車）を使用して、調査面積の最も広い２区から順に１区、３区と進め、表土の掘削と運搬作業を行った。表土掘削後は順次、作業員による調査壁面の精査と遺構検出作業を実施した。調査終了後は１区と３区は埋め戻し、６月より調査対象地西半部にある４区と５区の調査を進めた。なお、調査中には委託業者による４級基準点の打設、及びドローンによる空中写真撮影や測量が行われた。以下、調査工程を略記する。

令和２年２月４日（火）より２区から順に重機による表土掘削を行い、その結果、1･2･3区からは地表下約 80㎝の地点にて水田址を検出した。水田址からは、畦畔や鋤址のほか無数の足跡（人･牛）が見つかった。調査は２区の平面精査と測量、写真撮影等を行い、その後、１区・３区の調査を実施する予定であったが､降雨と周辺からの湧水の影響により､1区と３区は調査区の壁面が崩落し､再度、重機を使用して掘削作業を行った。これにより、当初の予定より作業が遅れることになり、水田址の調査終了は３月末となった。なお、事前に実施した試掘調査の結果より、２区は水田面下に集落址が存在しており、４月初旬より重機を使用して水田層及び包含層の掘削をし、集落址を検出した。２区からは建物址や溝、土坑のほかに 200 基余りの柱穴を検出した。各遺構の掘削や測量、写真撮影を行い、５月末に２区の調査を終了した。なお、遺構完掘時には高所作業車を使って写真撮影を行った。

令和２年６月には、調査地西半部にある４区と５区の調査に取り掛かった。重機を使用して表土の掘削・運搬作業を行い、１区から３区で検出した水田址と同様の水田址を検出した。両地区からは畦畔や鋤址、足跡を検出したが、調査期間の都合上、これらの測量はドローンの使用による空中写真測量を行った。水田址の調査終了後、試掘調査の結果より５区には２区と同様、集落址が存在しており、重機を使用して水田層や包含層の掘削をし、集落址を検出した。ただし、５区は地下水の水位が高く、遺構検出面は常時、滞水状態となったことや、７月の長雨の影響により、遺構の掘削や測量作業は困難を極めた。なお、当初、予定していた市民対象の現地説明会はコロナウイルス対策のため中止し、保健体育課及び東垣生地区の関係者のみを対象とした説明会を７月 20 日（月）と 21 日（火）に開催した。同年７月 31 日（金)、５区の測量を終了し、８月３日（月）より重機を使用して４区と５区の埋め戻しを行った。８月７日（金)、調査事務所の撤去や発掘用具の撤収を行い､屋外作業を終了した。

８月 11 日（火）からは、埋蔵文化財センターにて出土品の整理や図面・写真類の整理、及び調査



第４図　調査区位置図

成果をまとめた調査概要報告書の作成を行った。前述のとおり、令和３年度には本格的な報告書刊行に伴う整理作業を実施した。

第２節　層　位（第５図）

調査地は、調査以前は水田や畑として利用されていた。現況の標高は、4.0 ～ 4.1 mである。調査地の基本層位は、以下の 13 層（第１～ 13 層）である。第１層から第５層は水田耕作に伴う耕土であり、第８層は発掘調査で検出した室町時代以降の水田層である。なお、第 11 層上面が調査における最終遺構検出面であり、第 12 層以下は重機の使用による深掘にて確認した土層である。

第 1 層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1)〕で、層厚は４～ 20cmである。

第 2 層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で全調査区にあり、層厚は２～ 20cmである。

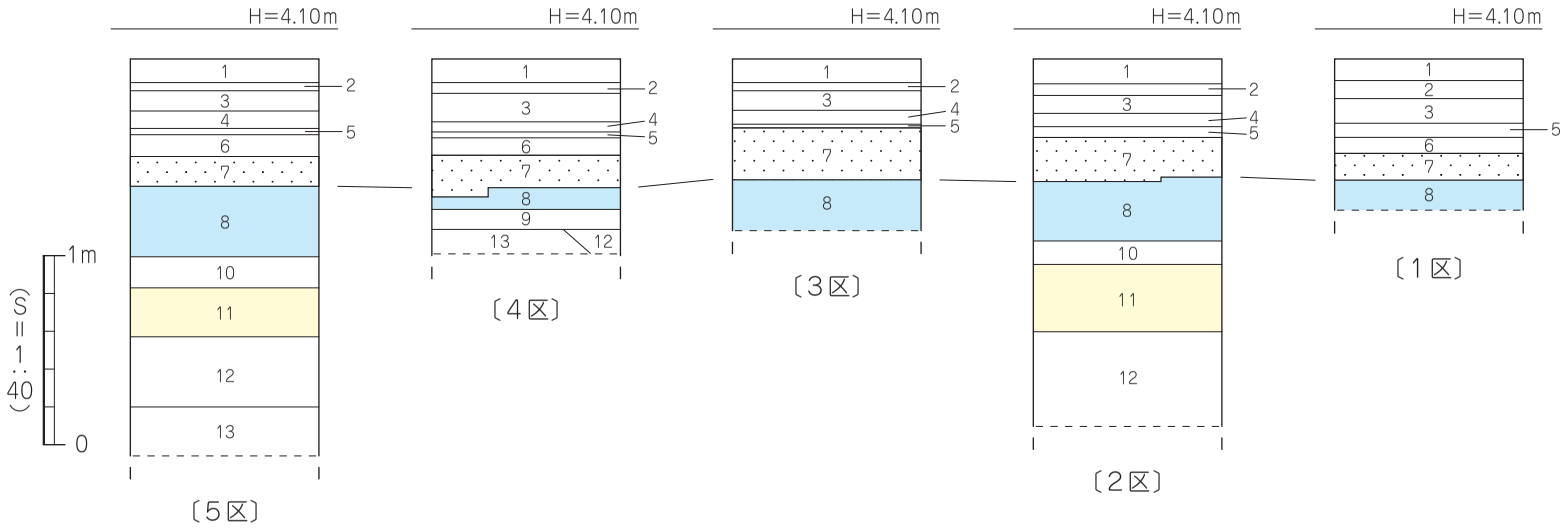
第 3 層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で全調査区にあり、層厚は３～ 24cmである。

第 4 層：灰色土（5Y 6/1）で１区を除く地区にあり、層厚は２～ 20cmである。

第 5 層：黄褐色土（10YR 5/6）で全調査区にあり、層厚は２～ 12cmである。

第 6 層：灰黄褐色土（10YR 5/2）で１・４・５区にあり、層厚は４～ 22cmである。

第 7 層：灰色砂（10Y 5/1）や灰白色粗砂（10Y 7/1)、褐色砂（10YR 4/6）など、河川の氾濫等により運ばれた河川氾濫堆積物である。全調査区にみられ、調査で検出した足跡や鋤址



1　オリーブ灰色土（5GY 5/1）
2　灰オリーブ色土（5Y 6/2）
3　オリーブ黄色土（5Y 6/4）
4　灰色土（5Y 6/1）
5　黄褐色土（10YR 5/6）
6　灰黄褐色土（10YR 5/2）
7　灰色砂（10Y 5/1）・灰白色粗砂（10Y 7/1）・褐色砂（10YR 4/6）の互層
8　灰色粘質土（10Y 5/1）〔水田層〕
9　灰色砂（10Y 6/1）
10　褐灰色土（10YR 4/1）
11　にぶい黄色土（2.5Y 6/4）
12　褐色砂（10YR 4/6）
13　灰色粗砂（7.5Y 6/1）

第５図　土層柱状図

は本層で埋没している。層厚は3～30cmである。本層中からは、主に室町時代の土師器片や陶磁器片が少量出土した。

第 8 層：灰色粘質土（10Y 5/1）で、水田土壌である。本層上面の標高を測量すると、3.2～3.3 mとなり、層厚は5～52cmである。本層中からは、室町時代の土師器片や須恵器片のほかに鉄器が出土した。

第 9 層：灰色砂（10Y 6/1）で4区のみで検出され、層厚は6～18cmである。

第10層：褐灰色土（10YR 4/1）で、2区と5区にて検出され、層厚は6～18cmである。本層中からは、古墳時代から鎌倉時代までの土師器や須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、陶磁器、石器などが数多く出土した。

第11層：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）で、2区と5区にて検出され、層厚は26cm以上である。本層上面の標高は、約2.8 mである。なお、本層上面が調査における最終の遺構検出面である。検出した遺構は、掘立柱建物址や溝、土坑、柱穴、井戸址である。

第12層：褐色砂（10YR 4/6）で、2・4・5区の深掘調査により確認した。第7層と同様、河川の氾濫等による河川堆積物と思われ、層厚は48cm以上である。本層中からは、遺物の出土は見られなかった。

第13層：灰色粗砂（7.5Y 6/1）で、4区と5区の深掘調査により確認した。現地表面下2.5 mの地点、標高1.6 mまで掘削を行ったが、それ以上は壁面の崩落により確認することはできなかった。なお、層厚は、30cm以上である。

出土遺物や検出層位から、第11層は平安時代、第10層は鎌倉時代までに堆積した土層と考えられる。第11層上面では集落関連遺構を確認したが、遺構の遺存状況等から、本来は第10層以上の土層から掘削された遺構の可能性が高い。なお、調査にあたり調査地内を4 m四方のグリッドに分けた（第4図）。グリッドは、検出した遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

さて、本稿では検出した遺構は略号を使用して以下のように掲載している。建物址や溝、土坑、井戸址は遺構番号を3ケタとし、百の位には地区名（1～5区）をつけて表記している。なお、柱穴は遺構番号を4ケタとし、千の位に地区名をつけている。

例）SK208･･･2区検出の8番土坑、SP5025･･･5区検出の25番柱穴

第3節　遺構と遺物

調査では、水田址と集落址を確認した。水田址は1区から5区までの全ての地区で検出され、集落址は2区と5区で検出した。水田址は主に第8層上面で検出され、畦畔や溝、鋤跡のほか無数の足跡を確認した。また、集落址は第11層上面にて掘立柱建物址2棟、溝2条、土坑12基、井戸址2基、柱穴305基を検出した。なお、水田址は室町時代以降、集落址は平安時代後期から鎌倉時代までのものである。遺物は土師器（古墳時代～中世）、須恵器（古墳時代～中世）、瓦器（飛鳥～室町時代）、施釉陶器（平安時代）、国産陶磁器〔常滑焼・亀山焼・古瀬戸・十瓶焼〕（鎌倉～室町時代）、輸入陶磁器〔白磁・青磁〕（平安～鎌倉時代）のほかに鉄器や木器、動物遺存体などが出土した。ここでは、地区毎に報告する（表2）。

表２　検出遺構・出土遺物一覧

地 区	古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安～鎌倉時代		室町時代以降	
1 区						水田址（小畦畔・鋤址・足跡）	▲
2 区	▲	▲	▲	掘立：2 棟 土坑：9 基 井戸：2 基 柱穴：209 基	▲	水田址（大畦畔・小畦畔・溝 1 条・鋤址・足跡）	▲
3 区						水田址（大畦畔・小畦畔・溝 2 条・足跡）	▲
4 区						水田址（大畦畔・小畦畔・鋤址・足跡）	▲
5 区	▲		▲	溝　：2 条 土坑：3 基 柱穴：96 基	▲	水田址（大畦畔・小畦畔・足跡）	▲

（※　▲：遺物）

１．１区の調査

１区は調査対象地北東部、O1 ～ U3 区に位置する。東西方向に長い長方形状をなし、調査面積は約 210㎡である。１区では地表下約 80cmの地点（標高約 3.2 m）にある第８層上面にて、水田耕作に伴う畦畔や鋤址、足跡を検出した（第７図、図版１・2）。調査開始時には検出面に湧水が著しく、そのため調査壁沿いに排水用のトレンチを掘削した後、遺構の検出や掘削を進めた。

（１）層　位（第７図、図版 2）

１区で確認した土層は、以下の７層（第１～ 3･5 ～８層）である。このうち、第８層は水田土壌である。なお、第５層下面では２条の流路（Ⓐ層・Ⓑ層）を検出している。

第１層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1）〕で、層厚は８～ 15cmである。

第２層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で１区全域にあり、層厚は８～ 20cmである。

第３層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で１区北半部にて部分的にみられ、層厚は４～ 12cmである。

第５層：黄褐色土（10YR 5/6）で１区全域にて部分的にみられ、層厚は２～ 8cmである。

第６層：灰黄褐色土（10YR 5/2）で１区東半部にみられ、層厚は６～ 20cmである。

第７層：灰色砂（10Y 5/1）を基調とし、灰白色粗砂（10Y 7/1）や褐色砂（10YR 4/6）で構成される。１区全域にみられ、層厚は 10 ～ 30cmである。

第８層：灰色粘質土（10Y 5/1）で１区全域にみられ、層厚は 20cm以上である。本層は水田土壌であり、本層上面にて畦畔や鋤址、足跡を検出した。これらの遺構はすべて、第７層で埋没している。なお、本層は地下水の影響等により一部グライ化し、色調が青灰色をなす箇所が

数箇所でみられた。

Ⓐ層：1区北東部、第5層下面にて検出した。検出状況より、北西－南東方向に流れる流路の一部と推測される。灰白色砂（2.5Y 8/1）を埋土とし、径1～3cm大の礫が混入する。

Ⓑ層：1区北西部、第5層下面で検出した。北東－南西方向に流れる流路の一部と推測され、灰白色砂（2.5Y 8/1）を埋土とし、径0.5～1cm大の小礫が混入する。

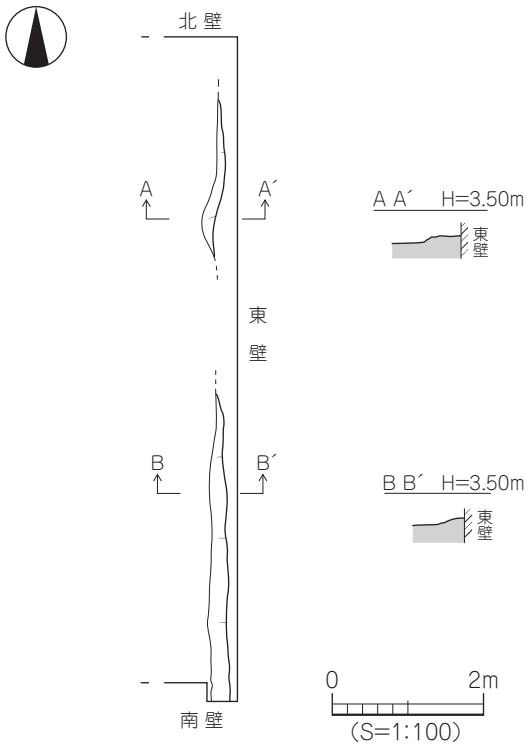
（2）遺構と遺物

1区では、水田址を確認した。検出した遺構は畦畔1条、鋤址5条及び足跡5,407ケである（第7図、図版1・2）。

1）畦　畔

畦畔101（第6図、図版3）

1区東壁沿い、U1～U3区で検出した畦畔で、北側と南側部分は調査区外に続く。検出長8.0m、検出幅0.20～0.38m、検出高は6～10cmである。畦畔101は、水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて構築されている。



第6図　畦畔101測量図

2）鋤　址

1区中央部付近、P2～S2区にて東西方向に向けて掘削されている。調査では、5条の鋤址を検出した。検出幅0.10～0.16m、深さは3～6cmである。鋤址は、すべて第7層（灰色砂）で埋没している。鋤址内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

3）足　跡

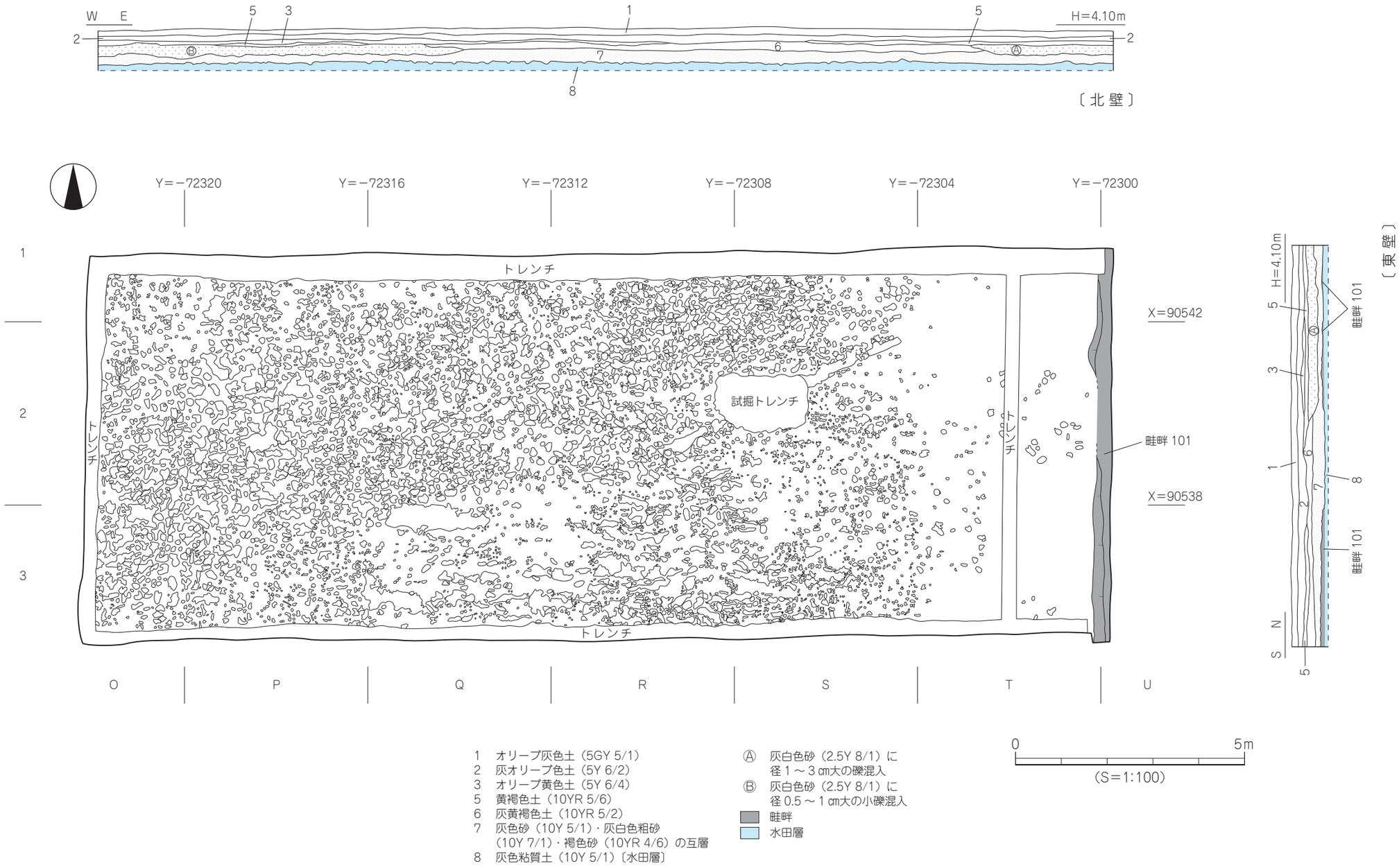
1区では、東部域を除く地域で足跡を検出した。足跡には牛と人があり、牛は862ケ、人は4,545ケあり、足跡総数は5,407ケである。これらの足跡は、すべて第7層（灰色砂）で埋没している。足跡の規模は長さ8～20cm、幅3～6cm、深さは2～10cmである。なお、足跡は部分的な掘削であり、全掘はしていない。足跡からは土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

4）出土遺物

鋤跡や足跡内からは時期特定しうる遺物の出土はないが、前述したトレンチや発掘調査前に実施した試掘調査からは主に室町時代に使用された土師器土釜の口縁部片や脚部片などが少量出土している。これらの状況より、水田址は室町時代もしくは、それ以降に構築されたものと考えられる。

ⅰ）水田層出土遺物（第8図、図版3）

1～3は土師器土釜。1・2は口縁部片で、口唇部に断面三角形状の粘土紐を貼付ける。3は三足付



1　オリーブ灰色土（5GY 5/1）
2　灰オリーブ色土（5Y 6/2）
3　オリーブ黄色土（5Y 6/4）
5　黄褐色土（10YR 5/6）
6　灰黄褐色土（10YR 5/2）
7　灰色砂（10Y 5/1）・灰白色粗砂（10Y 7/1）・褐色砂（10YR 4/6）の互層
8　灰色粘質土（10Y 5/1）〔水田層〕

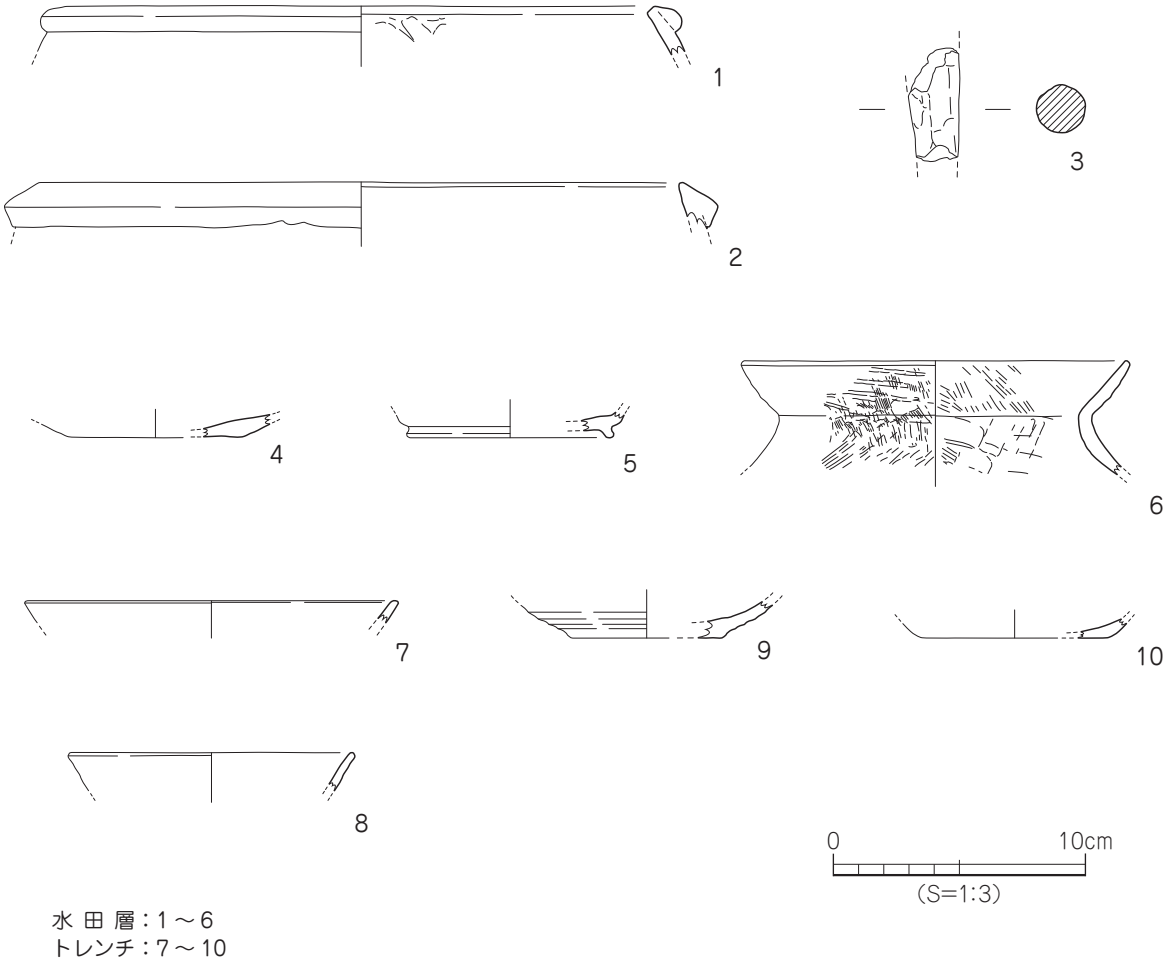
Ⓐ　灰白色砂（2.5Y 8/1）に径 1 ～ 3 ㎝大の礫混入
Ⓑ　灰白色砂（2.5Y 8/1）に径 0.5 ～ 1 ㎝大の小礫混入
畦畔
水田層

第７図　１区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図

土釜の脚部片で、断面形態は円形をなす。1～3の色調は、褐色である。4は土師器の坏。小片で、底部の切り離しは摩滅の為、不明である。色調は、内外面共に灰白色である。5は土師器の椀で、断面方形状の高台を貼付ける。色調は、灰黄色をなす。6は土師器の甕。口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。胴部外面にはハケメ調整後、ナデを加える。色調は、灰褐色である。

ⅱ）試掘トレンチ出土遺物（第8図、図版3）

7～10は試掘調査時、1区に設定したトレンチ内から出土した遺物である。7～10は土師器。7・8は坏の口縁部片、9・10は底部片である。9の底部外面には回転糸切り痕が残り、色調は7・9が灰白色、8は浅黄橙色、10は橙色である。



第8図　1区水田層・トレンチ出土遺物実測図

２．２区の調査

２区は調査対象地南東部、O7 ～ T12 区に位置する。東西方向にやや長い長方形状をなし、調査面積は、約 418㎡である。２区からは、水田址と集落址を検出した。

（１）層　位（第９図、図版５）

２区で確認した土層は、以下の９層（第１～５・７・８・10 ～ 12 層）である。このうち、第８層は水田土壌であり、第 11 層以下は深掘により確認した土層である。

第 1 層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1）〕で、層厚は６～ 20cmである。

第 2 層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で２区全域にあり、層厚は４～ 18cmである。

第 3 層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で２区全域にあり、層厚は４～ 15cmである。

第 4 層：灰色土（5Y 6/1）で２区ほぼ全域にあり、層厚は２～ 10cmである。

第 5 層：黄褐色土（10YR 5/6）で２区全域にて部分的にみられ、層厚は３～ 6cmである。

第 7 層：灰色砂（10Y 5/1）を基調とし、灰白色粗砂（10Y 7/1）や褐色砂（10YR 4/6）で構成される。２区全域にみられ、層厚は３～ 16cmである。

第 8 層：微弱な土色・土質の違いにより、２層に分層される。本層は地下水の影響等により一部グライ化し、色調が青灰色をなす箇所が数箇所でみられた。

第８－①層：灰色粘質土（10Y 5/1）で２区全域にあり、層厚は３～ 13cmである。本層上面にて、畦畔や足跡を検出した。

第８－②層：灰色粘質土（10Y 6/1）で、土壌内にマンガン粒子を多量に含む。２区全域にあり、層厚は 17 ～ 35cmである。

第 10 層：褐灰色土（10YR 4/1）で２区全域にあり、層厚は６～ 18cmである。本層中からは土師器や須恵器、灰釉陶器、瓦のほかに砥石などが出土している。

第 11 層：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）で２区全域にあり、最大厚は 26cmである。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。本層上面からは掘立柱建物址や溝、土坑、井戸址、柱穴を検出した。

第 12 層：褐色砂（10YR 4/6）で、最大厚は 48cmである。本層中からは湧水が激しく、井戸址や柱穴等、遺構基底部が本層まで及ぶものが多数みられた。

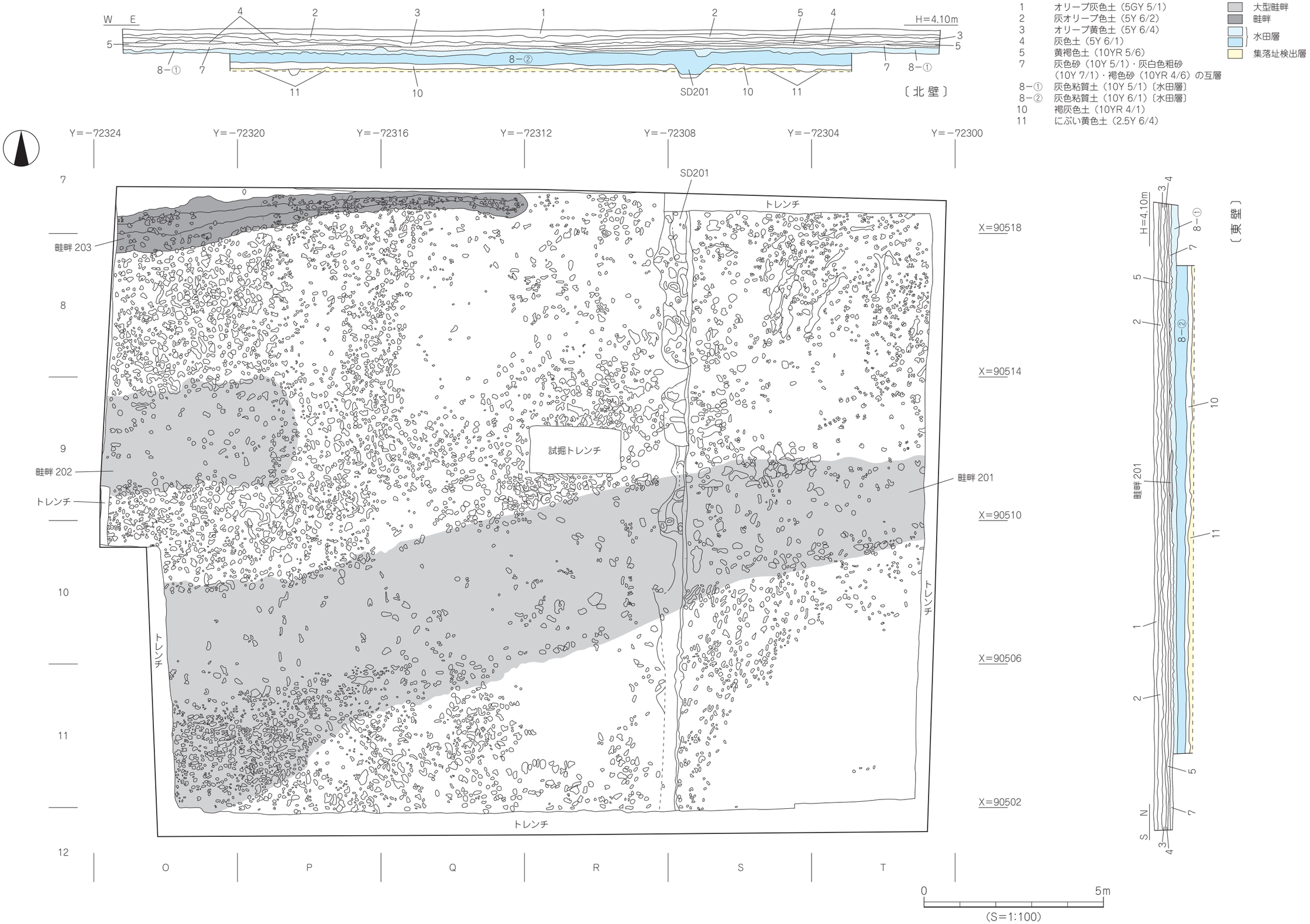
（２）遺構と遺物

２区では、水田址と集落址を確認した。水田址からは畦畔３条、鋤址 15 条、溝１条、足跡 3,184 ケを検出した。また、集落址では掘立柱建物２棟、土坑９基、井戸址２基、柱穴 209 基を検出した。

遺物は水田土壌や水田を覆う第７層中から土師器や須恵器、瓦器、陶磁器が出土し、集落遺構や第 11 層中などからは土師器や須恵器、施釉陶器、陶磁器のほかに石器や木器が出土している。

１）水田址の調査（第９図、図版４・５）

２区では、地表下約 80cmの地点（標高 3.3 m）にて水田址を検出した。なお、２区東側水田面は西側の水田面より約 10cm高くなっており、便宜上、東側を水田１、西側を水田２とし発掘調査を進めた。水田１からは、足跡や鋤址を検出した。これらの遺構は全て第７層の砂で埋没している。なお、水田１土壌や水田２土壌内、及び水田１を覆う砂層からは土師器や須恵器、瓦器、陶磁器等の小片が出土



第９図　２区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図

している。また、調査壁の土層観察により、水田１の西端には水路と思われる溝を検出したが、平面調査は実施していない。

一方、水田２からは畦畔や足跡、溝を検出している。

① 畦　畔

２区からは、規模の異なる畦畔を検出した。

畦畔 201･202（第 10 図、図版 6）

畦畔 201 は２区中央部付近、O10 ～ T9 区で検出した東西方向にのびる大型の畦畔で、検出長 22.0 m、検出幅 2.4 ～ 4.1 m、高さは 10 ～ 20 cmである。畦畔は灰白色砂質土（10Y 7/1）や灰色微砂（5Y 6/1）を使用し、水田土壌である第８－①層上面にて構築されている。また、畦畔 202 は２区西部 O9 区で検出した東西方向の畦畔で、西側は調査区外に続き、東側は途切れている。検出長 5.0 m、検出幅 2.1 ～ 2.6 m、高さは６～ 18 cmである。２区中央部で検出した畦畔 201 と同様、第８－①層上面にて灰白色砂質土（10Y 7/1）や灰色微砂（5Y 6/1）を用いて構築されている。

畦畔 203（第 11 図、図版 6）

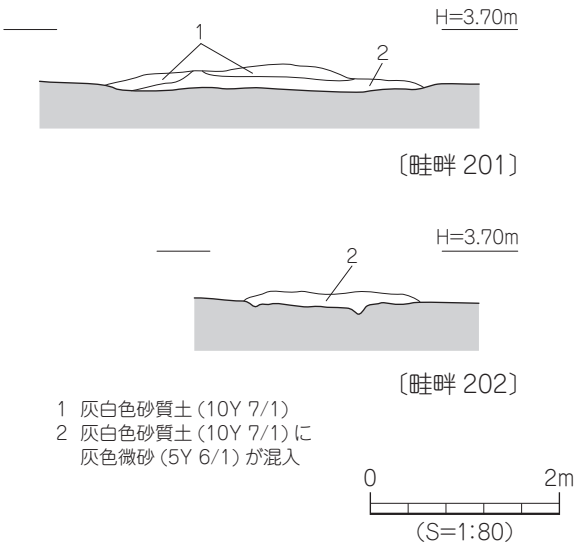
２区北西部、O8 ～ Q8 区で検出した東西方向の畦畔で、畦畔両端は調査区外に続く。検出長 11.5 m、検出最大幅 1.3 m、高さは６～ 11cmである。水田土壌である第８－①層上面にて構築されており、水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて作られている。

② 鋤　址

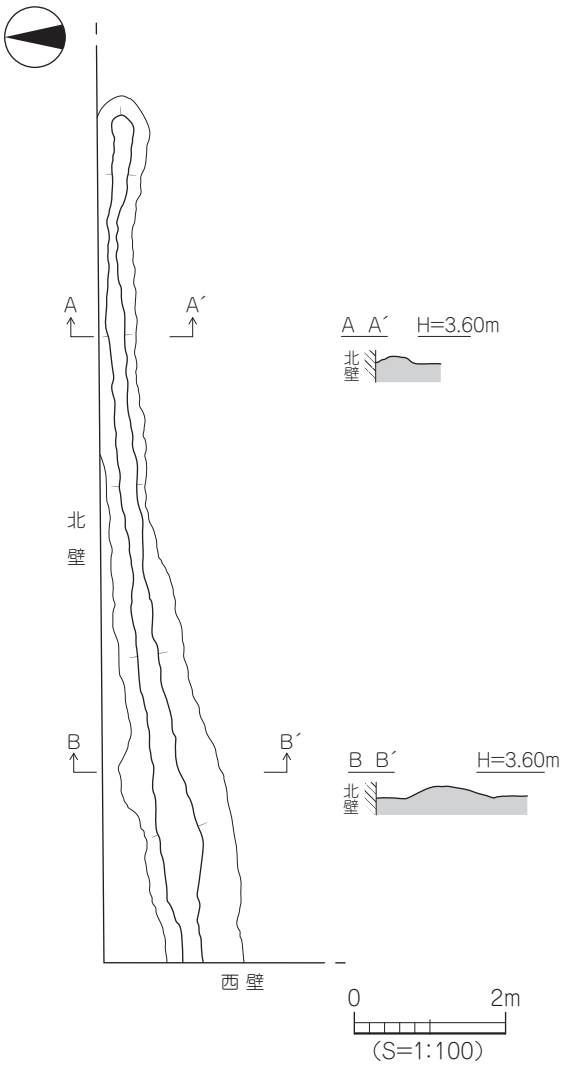
２区北東部、S8・9 区からは、15 条の鋤址を検出した。東西及び南北方向に掘削されており、検出長 0.6 ～ 1.8 m、検出幅６～ 18cm、深さは３～ 6cmである。鋤址は、すべて第７層（灰色砂）で埋没している。鋤址からは、遺物の出土はない。

③ 足　跡

２区で検出した足跡は 3,184 ケであり、このう



第 10 図　畦畔 201・202 断面図



第 11 図　畦畔 203 測量図

ち、牛と思われる足跡は609ケである。これらの足跡は、すべて第7層(灰色砂)で埋没している。なお、足跡は畦畔201や202の下面、及び2区南東部ではあまり検出されなかった。足跡内からは、土師器や須恵器の小片が少量出土した。

④ 水田址関連出土遺物

ⅰ）水田1埋土出土遺物（第12図、図版18）

11～14は土師器の坏。小片で、14の外面には方形状の線刻を施す。15・16は土師器の鉢。15の口縁部は上下方に拡張し、16は上方へ拡張する。11～16の色調は、すべて灰白色である。17～20は土釜。17は土師器、18～20は瓦質土器であり、18の口縁端部は面取りされる。21は須恵器。甕の口縁部片で、口縁端部はナデ凹む。22･23は亀山焼。胴部片で外面に格子目叩き、内面はナデを施す。色調は22が黒色、23は橙色である。24～27は白磁。24～26は碗で、24の口縁部は短く外反する。胎土は白色で、透明釉が掛けられている。26は削り出し高台状の底部で、内面見込みに圏線が巡る。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられている。27は皿の底部片で、胎土は灰白色をなす。

ⅱ）第7層（灰色砂）出土遺物（第13図）

28・29は土師器の坏。底部小片で、29の外面には回転糸切り痕が残る。30～32は土釜。30・32は土師器、31は瓦質土器である。30は口縁部の小片で、口縁端部は面取りされる。

ⅲ）水田2埋土出土遺物（第14・15図、図版18）

33～37は土師器の土釜。33･34は口縁部片、35～37は脚部片で、33の口縁端部は丸く仕上げる。38は土師器のコネ鉢で、口縁部は上方に拡張する。39・40は土師器の土鍋。口縁部の小片で、39の口縁端部はナデ凹む。41は常滑焼の甕。口縁部は外反し、胴部外面に平行叩きを施す。胎土は灰色で、外面には緑色の釉薬が掛けられている。42は亀山焼。甕の胴部片で、外面に格子目叩きを施す。色調は、内外面共に暗灰色である。43は瓦器の皿。小片で、推定口径9.2cmである。44は瓦器椀の底部片で、小さな断面三角形状の高台を貼り付ける。

ⅳ）水田2足跡・畦畔201出土遺物（第16図、図版18）

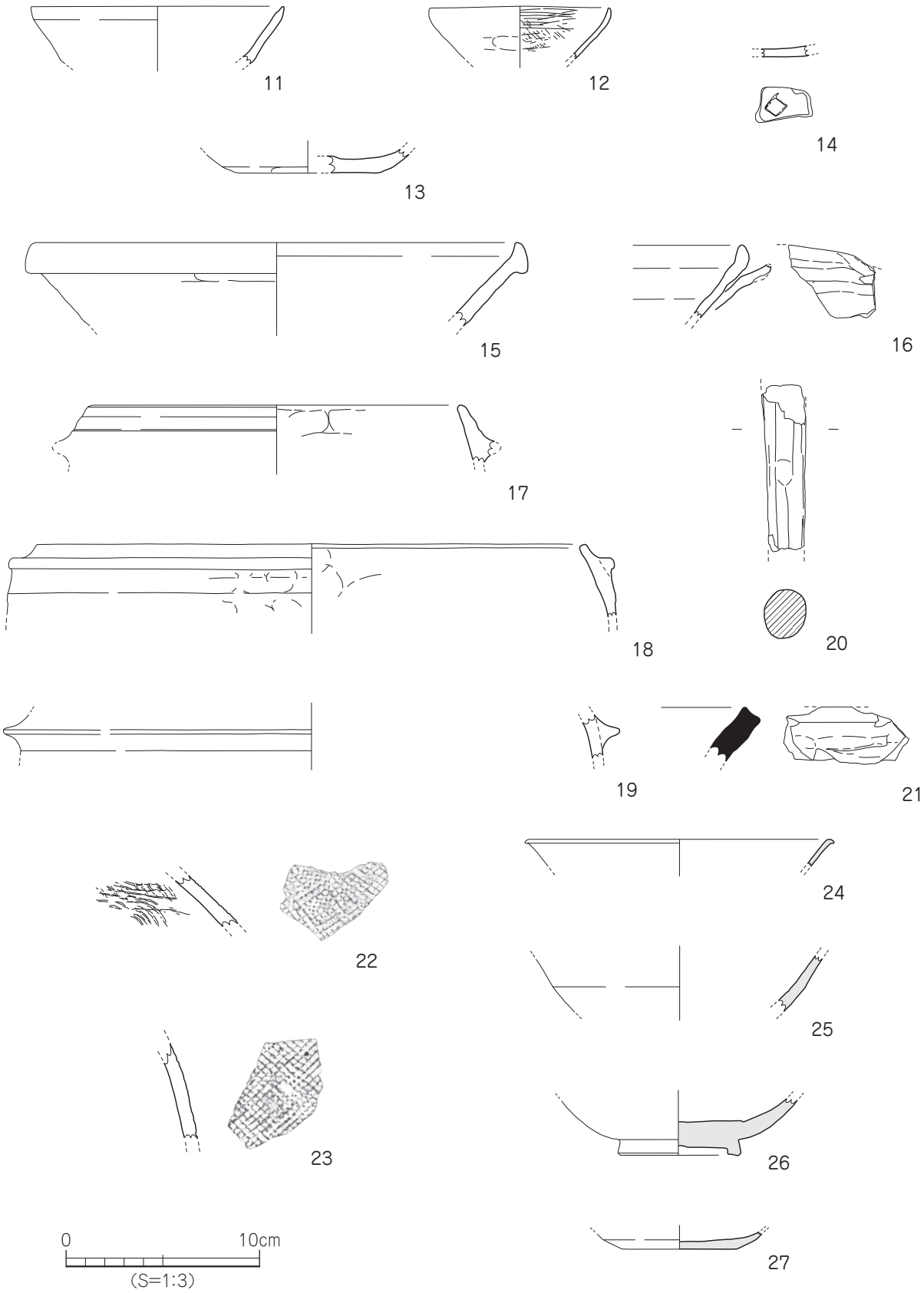
45～49は足跡、50・51は畦畔201出土品。45・46は土師器の坏。底部片で、46の外面には回転糸切り痕を残す。47は土師器の土鍋。口縁部の小片で、口縁端部はナデ凹む。48は亀山焼。胴部片で、外面に格子目叩きを施す。49は土師器の土釜。脚部片。50は土師器のコネ鉢。口縁部の小片で、口縁端部を上下方に拡張する。51は東播系須恵器。擂鉢で、口縁部を拡張する。色調は、内外面共に青灰色である。

時期:水田1と水田2は出土遺物から時期差は認められず、同時期に存在した水田址と考えられる。よって、2区検出の水田址は、概ね室町時代以降に構築されたと考えられる。

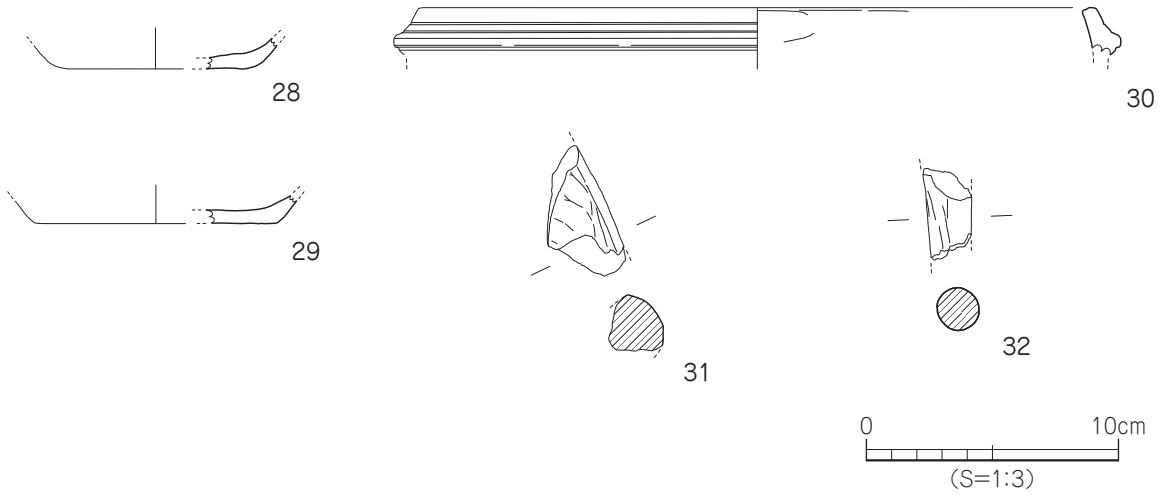
⑤ 溝

SD201（第17図、図版8）

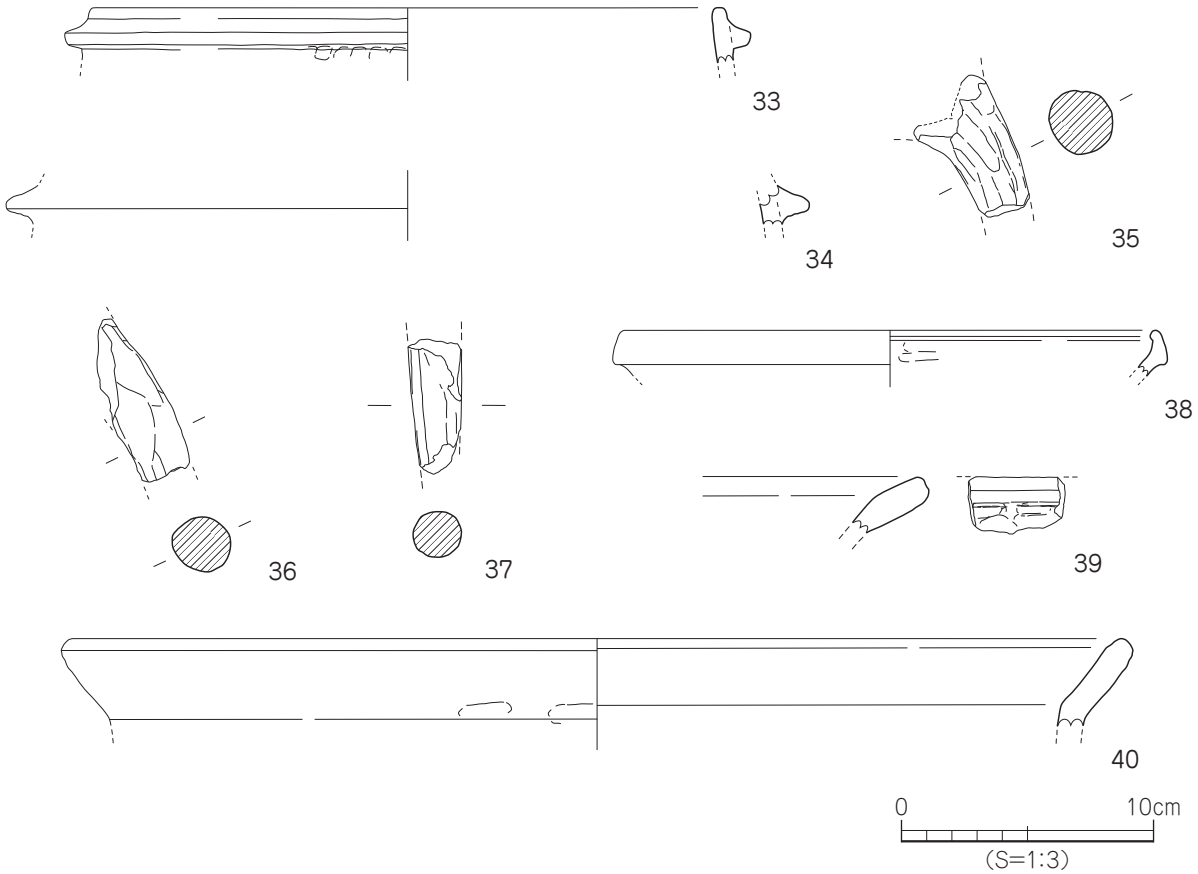
2区東部、R8～S11区で検出した南北方向の溝で、土層観察の結果、水田土壌である第8－②層



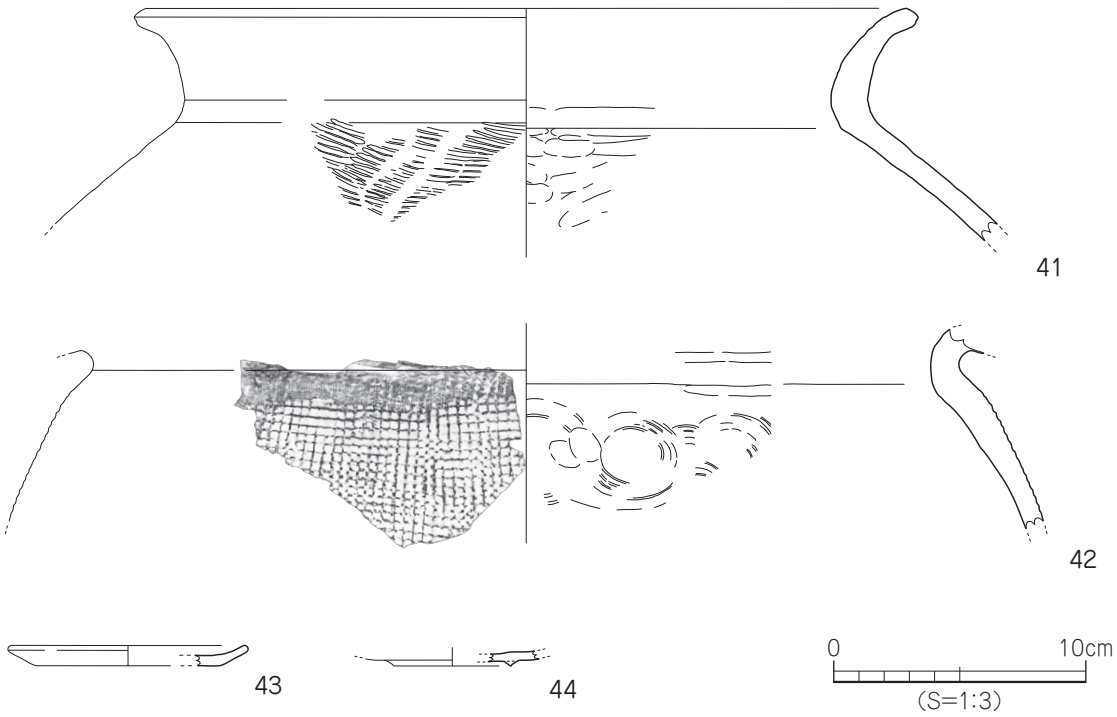
第 12 図　水田 1 埋土出土遺物実測図



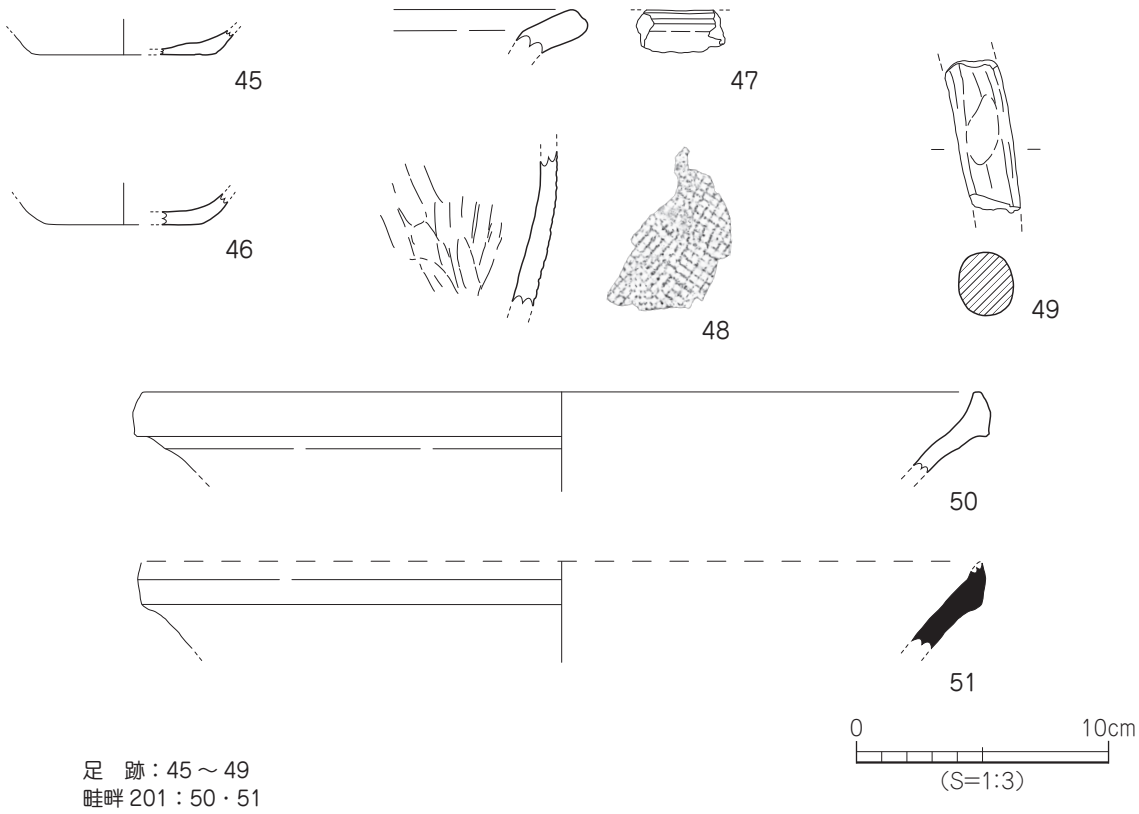
第 13 図　第 7 層（灰色砂）出土遺物実測図



第 14 図　水田 2 埋土出土遺物実測図（1）

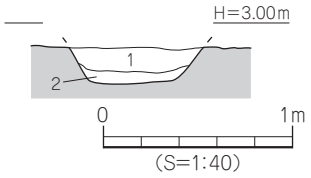


第 15 図　水田 2 埋土出土遺物実測図（2）



第 16 図　水田 2 足跡・畦畔 201 出土遺物実測図

上面から掘削されていることが判明した。検出長 13.4 m、検出幅 0.38 ～ 1.12 m、深さは検出面下 42cmを測る。断面形態は深いレンズ状をなし、埋土は第 8 －②層と同様の灰色粘質土（10Y 6/1）を基調とし、基底面付近は湧水の影響により青灰色に変色しており、基底面は第 11 層に及ぶ。溝基底面には凹凸があり、北から南へ向けて緩傾斜をなす（比高差 8cm）。遺物は土師器や瓦器、陶磁器等の小片が少量出土した。

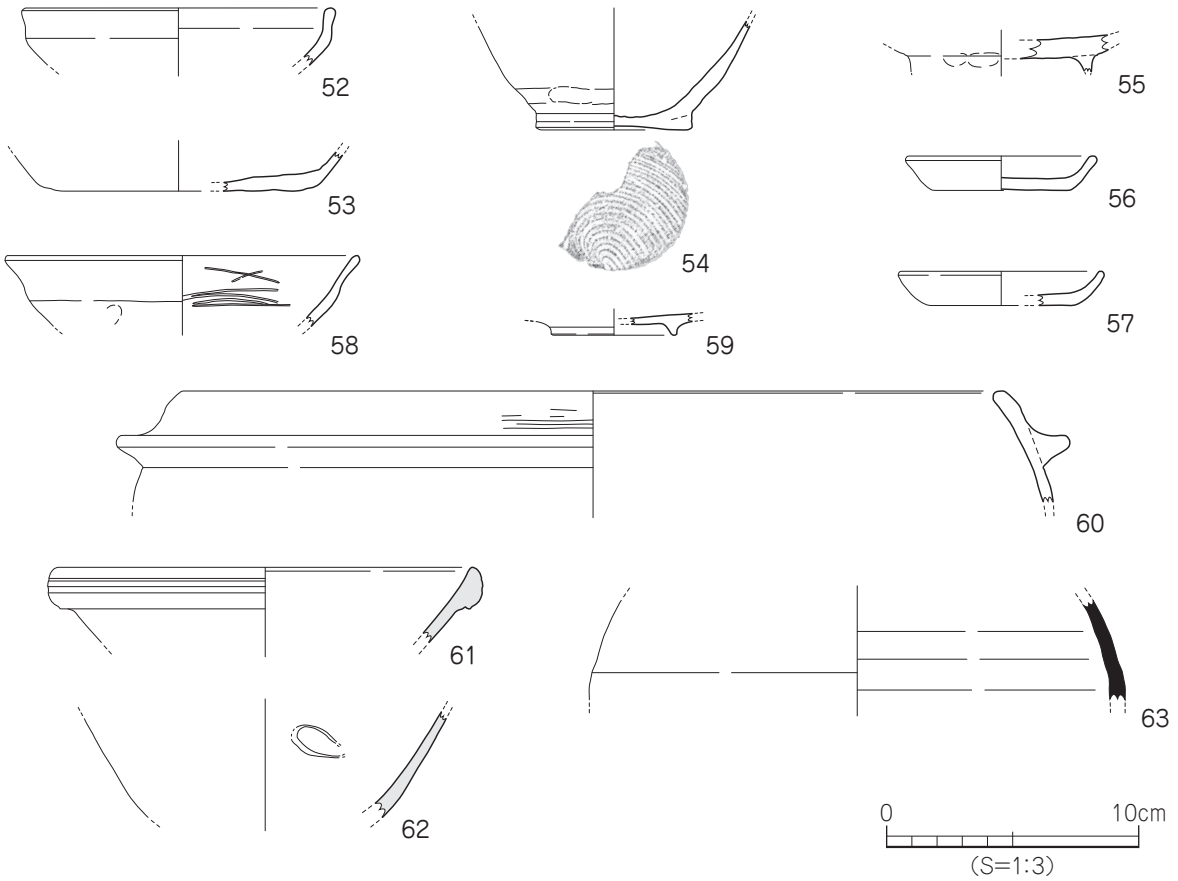


1　灰色粘質土（10Y 6/1）
2　青灰色粘質土（5B 6/1）

第 17 図　SD201 断面図

出土遺物（第 18 図、図版 19）

52･53 は土師器の坏。52 は口縁部片で、体部中位に稜をもつ。54 は土師器の椀。円盤高台状の底部で、底部の切り離しは粗目の回転糸切り技法による。53・54 の色調は、灰白色である。55 は土師器の椀。底部片で、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕を残す。56･57 は土師器の皿。56 は推定口径 7.4cm、57 は 8.0cmで、56 の底部外面には回転糸切り痕が残る。58・59 は瓦器。58 は和泉型瓦器椀で、推定口径 14.0cmである。体部中位に稜をもち、体部下半内面にヘラミガキを施す。59 は底部片で、小さな断面三角形状の高台を貼り付ける。60 は瓦質土器。土釜の口縁部片で、口縁端部は丸く仕上げる。61 は白磁碗。大きな玉縁状口縁で、胎土は白色である。62 は青磁碗。体部片で、内面に片彫輪花文が描かれている。胎土は灰色で、濃緑色の釉薬が掛けられている。63 は褐釉陶器の壺。胴部片で胎土は灰色をなし、内外面に褐色の釉薬が掛けられている。



第 18 図　SD201 出土遺物実測図

時期：出土遺物には時期差が認められるが、検出層位から水田址に伴う溝と考えられることから、概ね室町時代以降と考えられる。

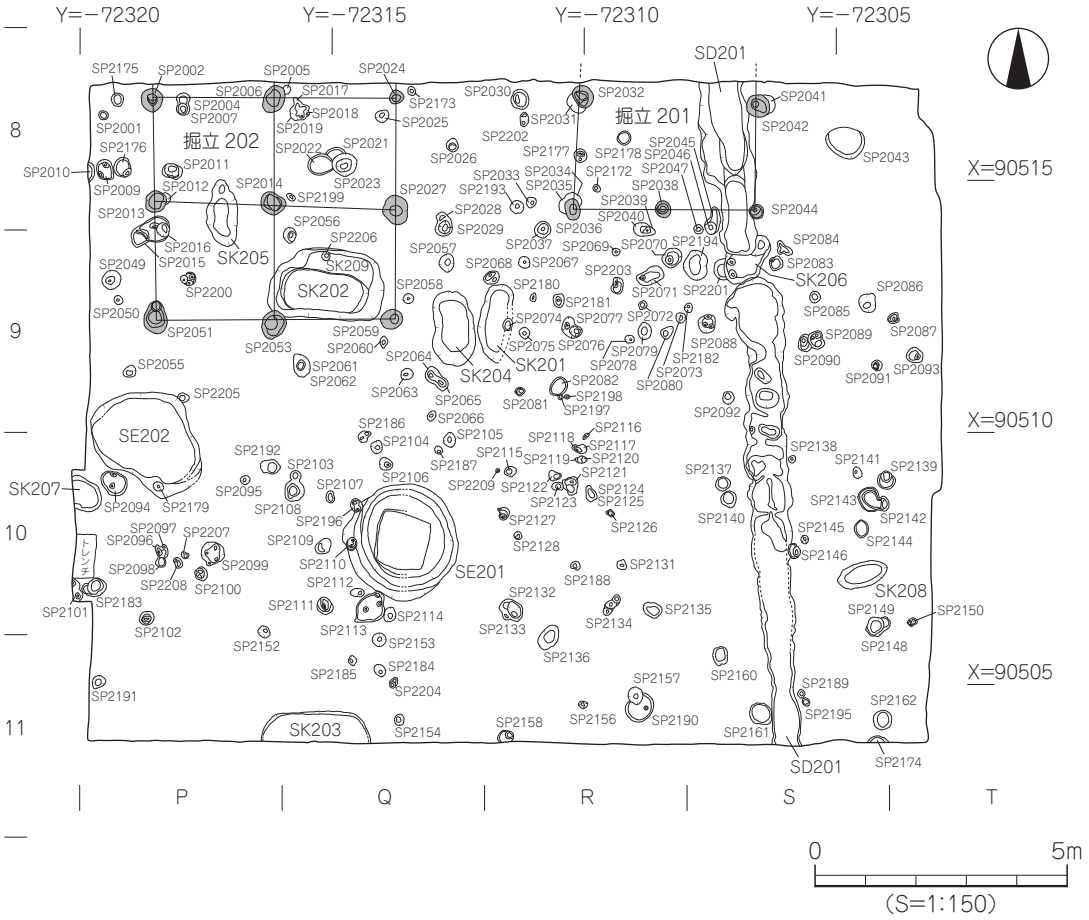
2）集落址の調査（第 19 図、図版 7）

水田址の下面、第 11 層上面（標高 3.0 ～ 3.1 m）にて集落址を検出した。検出した遺構は掘立柱建物址 2 棟、土坑 9 基、井戸址 2 基、柱穴 209 基である。

① 掘立柱建物址

掘立 201（第 20 図）

2 区北東部 R・S8 区で検出した側柱構造の建物址で、東西 2 間（3.59 m）、南北 2 間（2.25 m）以上の南北棟である。建物方位は、ほぼ真北である。建物を構成する柱穴は、5 基（SP2032・2036・2038・2042・2044）を検出した。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、柱穴掘り方規模は 28 ～ 47cm、深さは 16 ～ 44cmである。柱穴掘り方埋土は、灰黄褐色土（10YR 6/2）と灰色土（N5/）である。柱痕は 2 基の柱穴（SP2042・2044）で検出され、柱痕径は約 10cmである。柱穴内からは土師器坏や須恵器甕の破片のほかに瓦器椀、白磁などの小片が数点出土した。

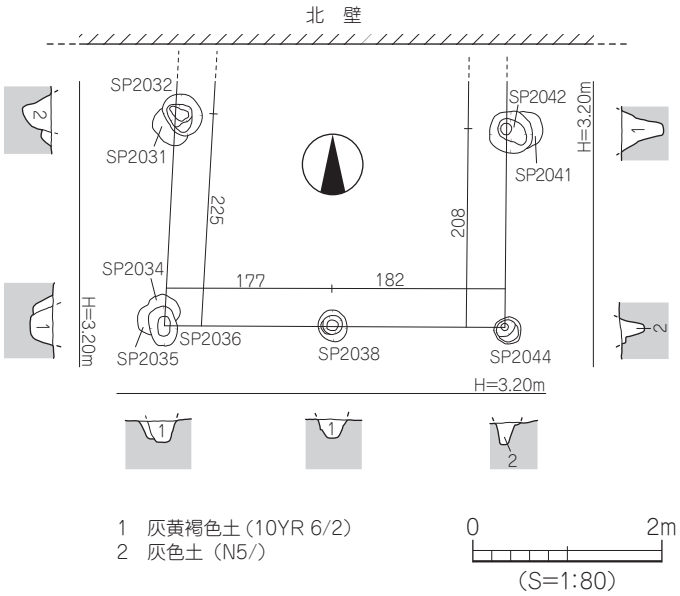


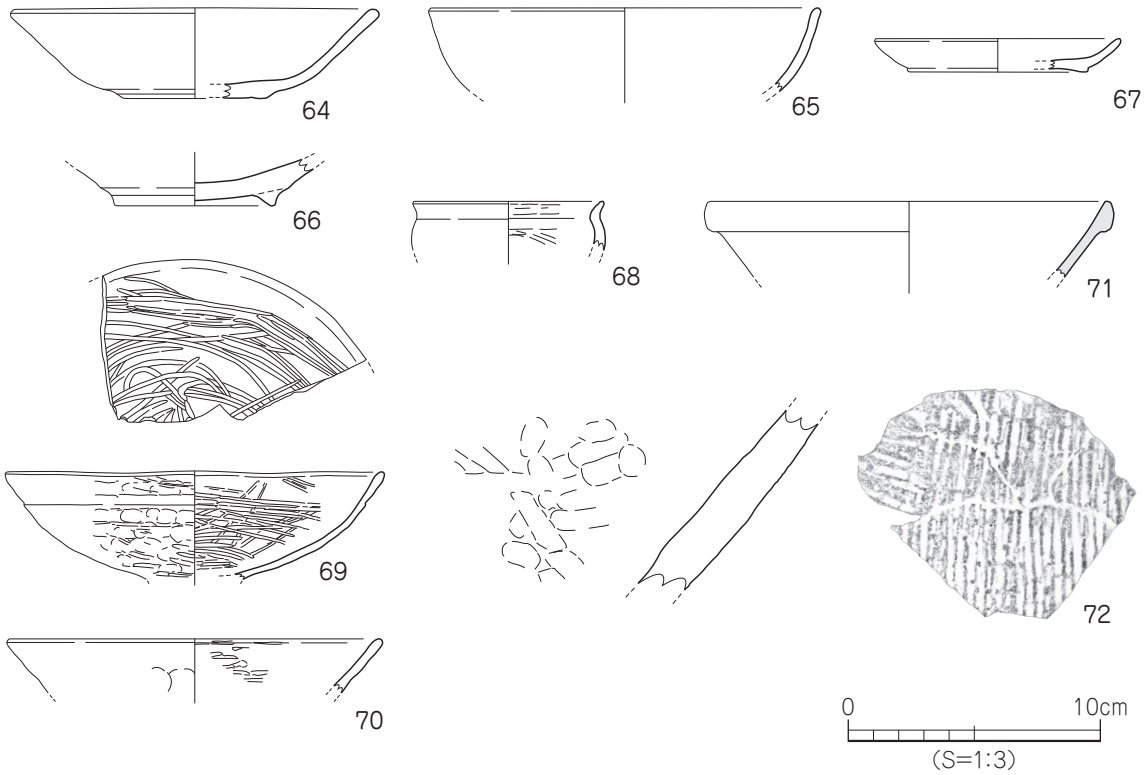
第 19 図　2 区遺構配置図

出土遺物（図版 19）

64 は土師器の坏。1/3 の残存で、底部は僅かに突出する。底部から体部中位内面にかけて煤が付着し、口縁部内面は被熱により褐色に変色している。推定口径は 14.2cm、器高 3.6cmである。65・66 は土師器の椀。66 は低めの高台が貼り付けられ、底部の切り離しは摩滅の為、不明である。67 は土師器の皿。小片で、推定口径 9.7cmである。底部外面には、回転糸切り痕を残す。68 は土師器の鉢。小型品で、推定口径は 7.6cmである。69・70 は和泉型の瓦器椀。69 は 1/3 の残存で、推定口径は 15.0cmである。体部上位に稜をもち、体部内外面全体には丁寧なヘラミガキを施す。70 は小片で、推定口径は 14.6cmである。71 は白磁碗。玉縁状の口縁部で、胎土は灰白色をなす。72 は瓦質の甕。胴部片で、外面に平行叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴より、掘立 201 は鎌倉時代前期、13 世紀前半頃の建物址と考えられる。





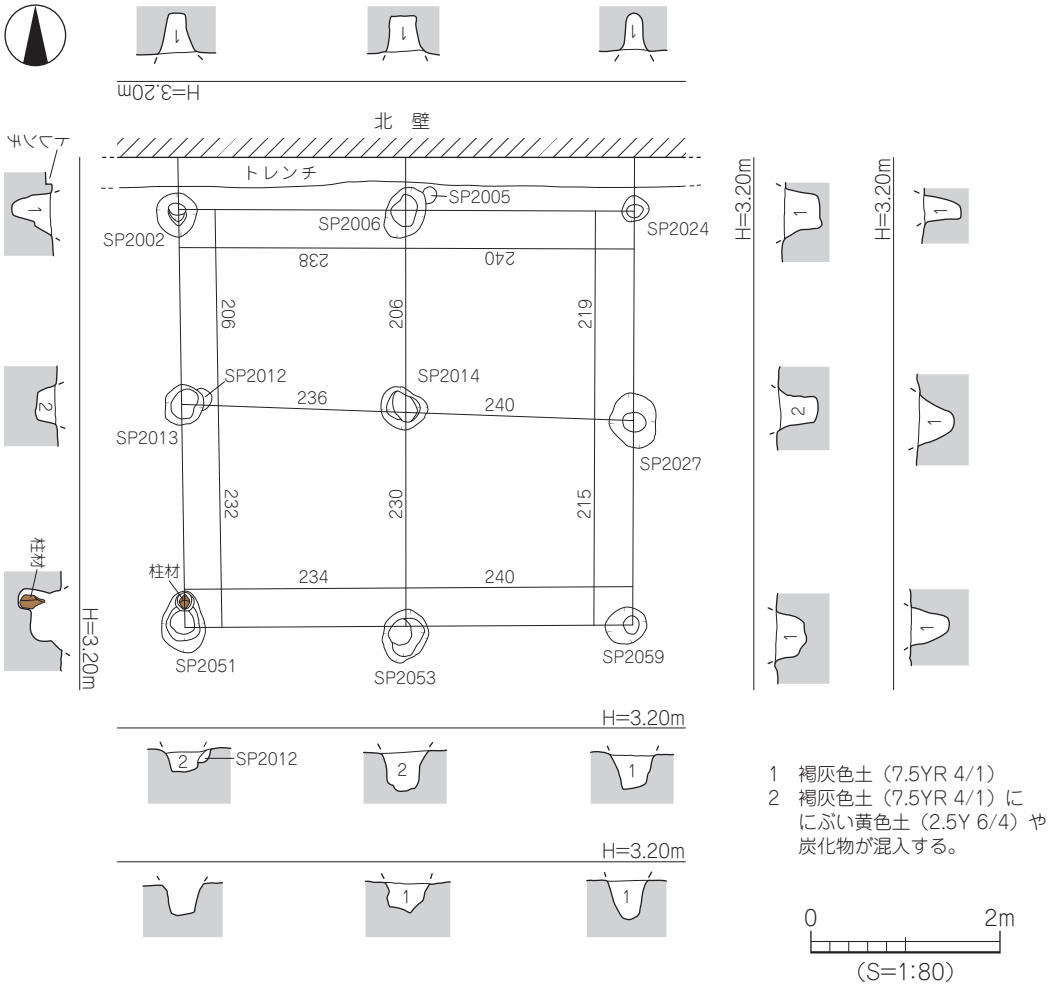
第 20 図　掘立 201 測量図・出土遺物実測図

掘立 202（第 21 図、図版 8・9）

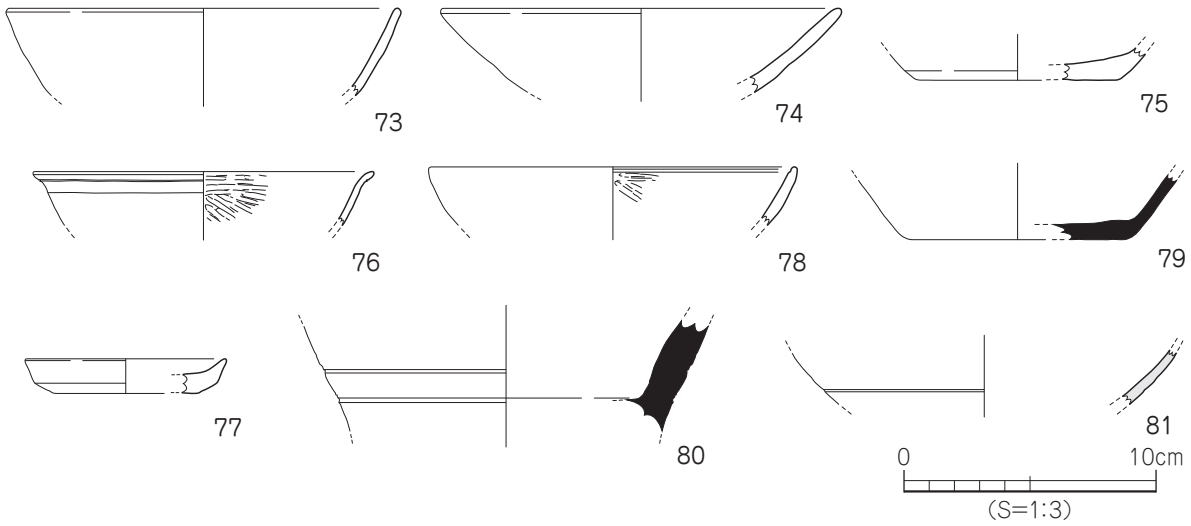
2 区中央部北西寄り P8 ～ Q9 区で検出した総柱構造の建物址で、東西 2 間（4.78 m）、南北 2 間（4.38 m）以上、床面積 20.93㎡以上の南北棟である。建物方位は、ほぼ真北をなす。建物を構成する柱穴は、9 基（SP2002・2006・2013・2014・2024・2027・2051・2053・2059）を検出した。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、柱穴掘り方規模は径 27 ～ 65cm、深さは 22 ～ 46cmである。柱穴掘り方埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）を基調とし、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）や炭化物が少量混入する。柱痕は 2 基の柱穴（SP2002・2051）で検出され、柱穴 SP2051 からは柱材の一部が遺存していた。使用した柱の直径は、約 10cmである（図版 28　A）。柱穴内からは土師器坏や土釜、須恵器坏や壺のほかに、瓦器椀の破片が数点出土した。なお、掘立 202 の床面では、後述する土坑 SK202 が検出されている。

出土遺物（第 22 図）

73 ～ 75 は土師器の坏。73･74 は小片で、73 は推定口径 15.4cm、74 は 15.8cmである。75 は底部片で、外面には回転ヘラ切り痕を残す。76 は土師器の椀。小片で、推定口径は 13.6cmである。77 は土師器の皿。器壁は厚く、底部の切り離しは摩滅の為、不明である。78 は瓦器。楠葉型の瓦器椀で、推定口径は 14.4cmである。79･80 は須恵器。79 は坏で、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。80 は壺の底体部片で



第 21 図　掘立 202 測量図



第 22 図　掘立 202 出土遺物実測図

ある。81 は白磁碗。体部片で、下位には沈線が巡る。胎土は灰白色である。

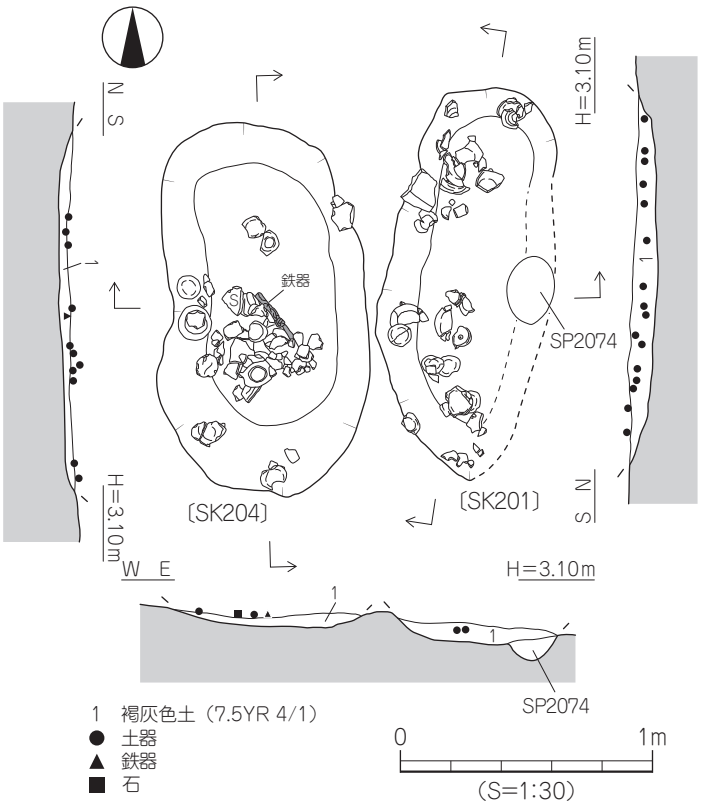
時期：出土遺物の特徴より、掘立 201 と同様、13 世紀前半頃の建物址と考えられる。

② 土　坑

2 区では、9 基の土坑を検出した。この中には完形品を含む遺物の出土した土坑 5 基（SK201・204・205・207・208）が含まれており、出土した遺物は平安時代後期から鎌倉時代前期に使用されたものばかりである。前述した 5 基の土坑については、出土状況から投棄ではなく、これらの遺物を使用した何らかの祭祀行為が執り行われた可能性が考えられる。

SK201（第 23 図、図版 9･10）

2 区中央部 Q・R9 区で検出した楕円形状の土坑で、土坑東側は試掘トレンチにより一部削平されている。規模は南北長 1.55 m、東西検出長 0.68 m、深さは 11㎝である。断面形態はレンズ状をなし、埋土



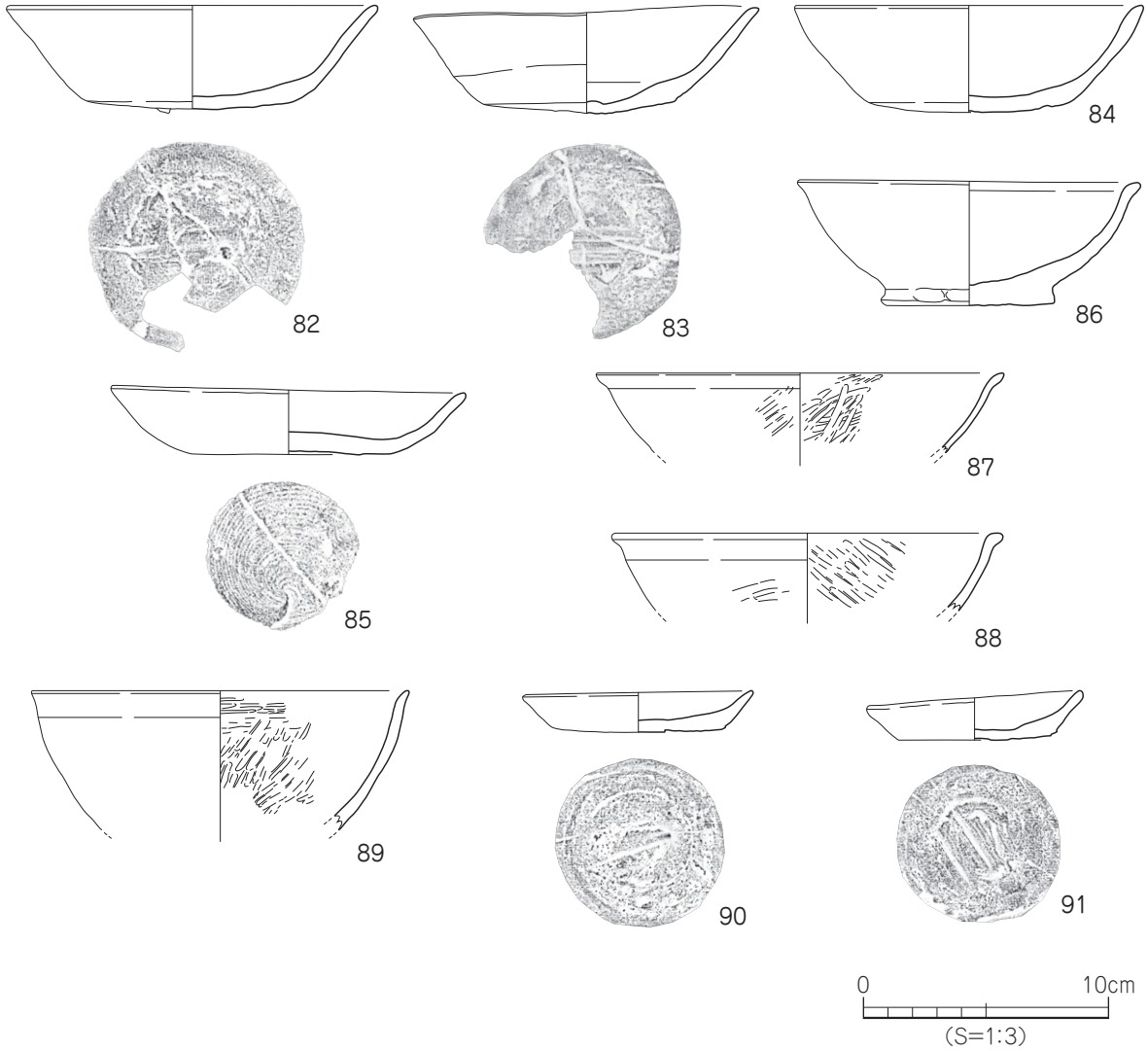
第 23 図　SK201・204 測量図

は褐灰色土（7.5YR 4/1）単層である。土坑基底面はほぼ平坦で、遺物は土坑基底面付近にて完形の土師器皿や坏、椀のほかに瓦器椀などが出土した。

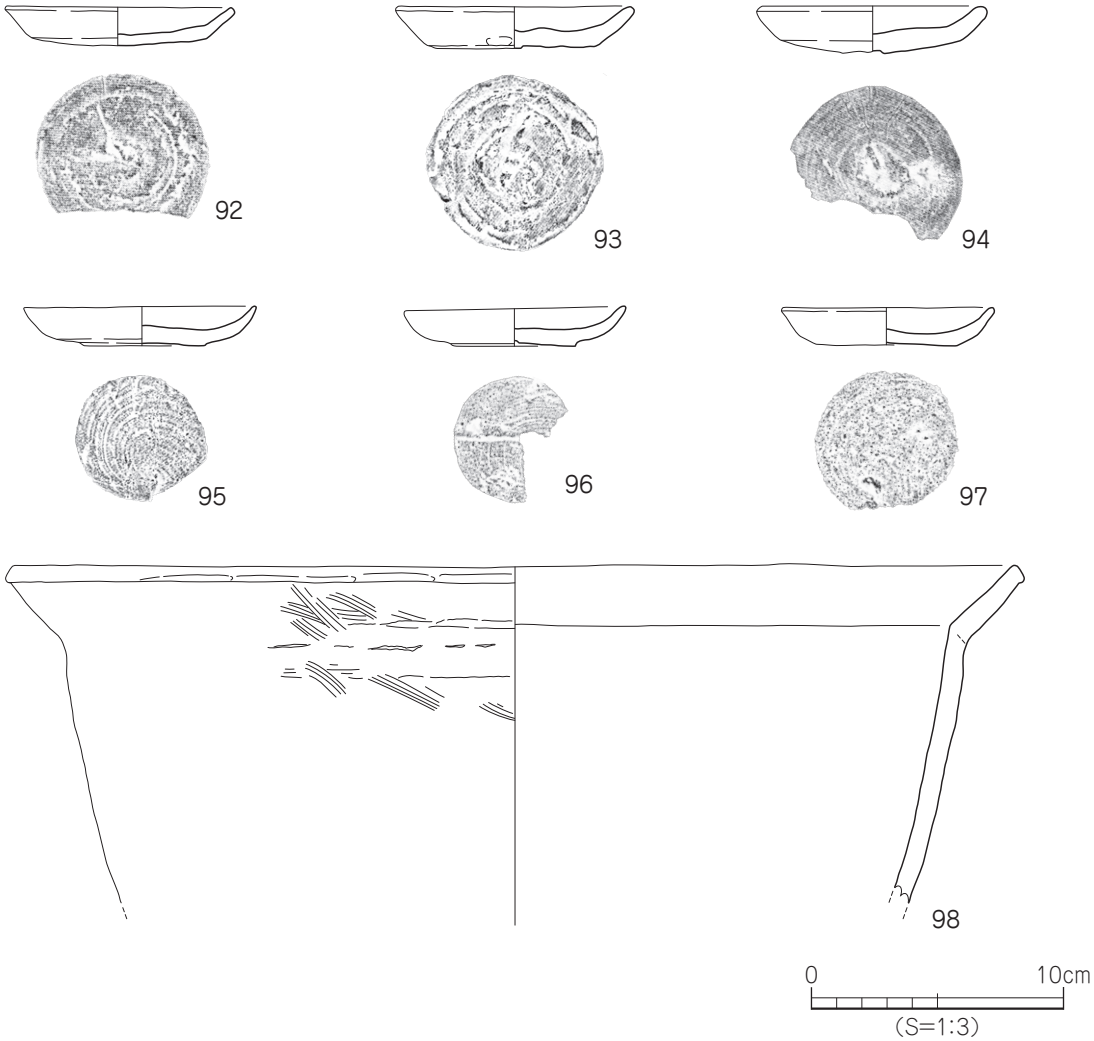
出土遺物（第 24・25 図、図版 20）

82 ～ 85 は土師器の坏。85 は完形品で、口径 14.3cm、底径 5.8cm、器高 2.8cmである。底部の切り離しは 82 ～ 84 が回転ヘラ切り技法、85 は回転糸切り技法による。86 ～ 88 は土師器の椀。86 は円盤高台状の底部をもち、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。87・88 は小片で、体部内外面にはヘラミガキを施す。色調は 82 ～ 85 がにぶい橙色、86 ～ 88 は灰白色である。89 は黒色土器。内黒椀で、体部内面には丁寧なヘラミガキを施す。90 ～ 97 は土師器の皿。91 は完存品で、口径 8.6cm、底径 6.2cm、器高 2.0cmである。底部の切り離しは、90 ～ 94 は回転ヘラ切り技法、95 ～ 97 は回転糸切り技法による。なお、95・96 の底部は僅かに突出している。98 は土師器の鍋。推定口径 39.6cmで、口縁部は内湾し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より SK201 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀中頃と考えられる。



第 24 図　SK201 出土遺物実測図（1）



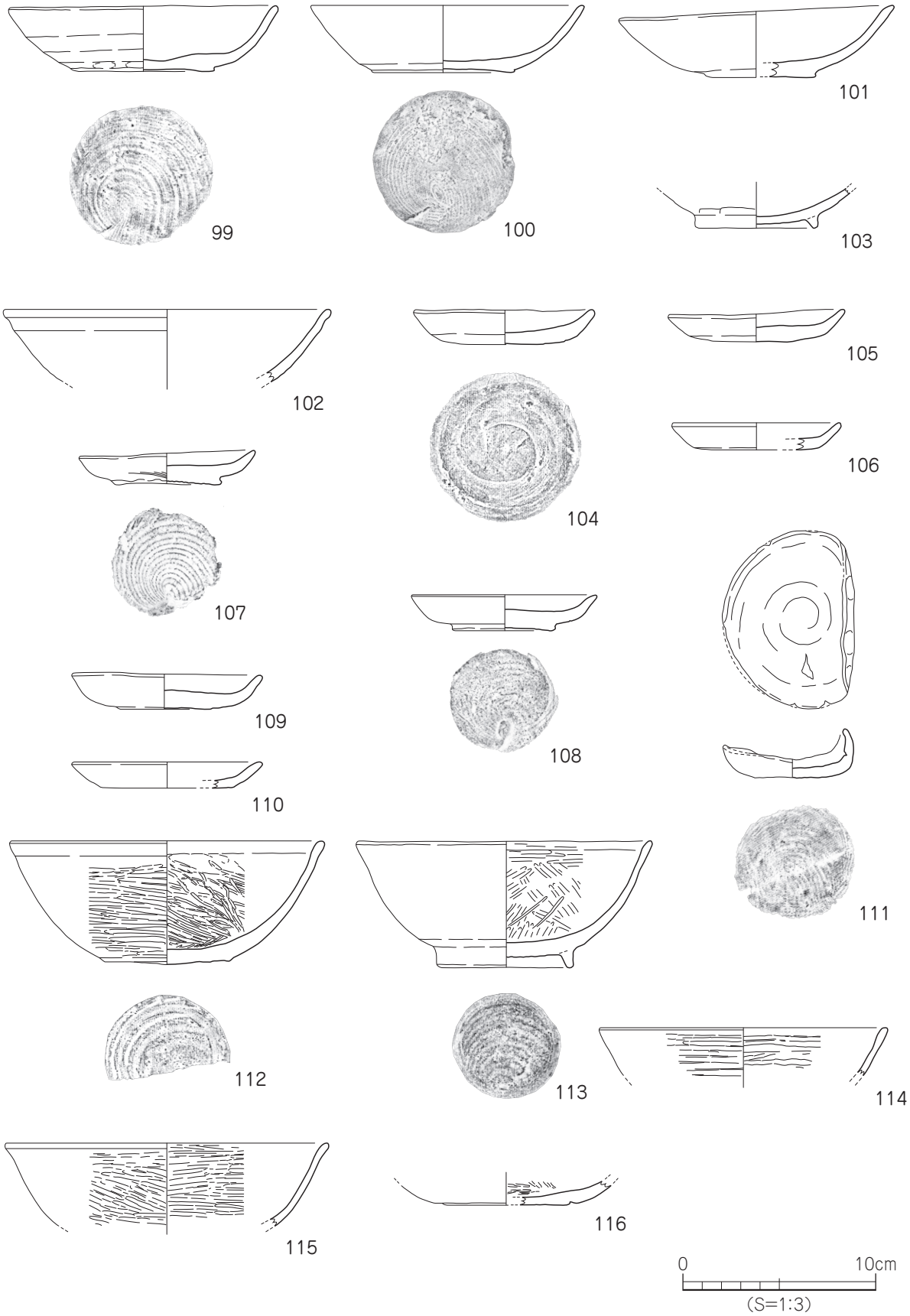
第 25 図　SK201 出土遺物実測図（2）

SK204（第 23 図、図版 9・10）

2 区中央部 Q9 区で検出した不整楕円形状の土坑で、規模は長径 1.44 m、短径 0.76 m、深さは 6cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）単層である。土坑基底面はほぼ平坦で、遺物は土坑基底面付近にて完形の土師器皿や坏、黒色土器、瓦器のほかに鉄製品が出土した。

出土遺物（第 26・27 図、図版 21・22）

99 ～ 101 は土師器の坏。99 は完存品で、口径 13.7cm、底径 7.3cm、器高 3.4cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は僅かに突出する。色調は橙色で、胎土中に石英、長石のほかに赤色酸化土粒を含む。100 は底部完形品で、推定口径 14.0cm、器高 3.4cmである。101 は突出する底部を持ち、口径 14.1cm、器高 3.7cmである。99 ～ 101 の底部切り離しは、全て回転糸切り技法による。102･103 は土師器の椀。102 は推定口径 16.8cmで、口縁部下位に不明瞭な稜をもつ。104 ～ 111 は土師器の皿。104 は完存品で、口径 9.1cm、底径 7.6cm、器高 1.8cmである。器壁は厚く、色調は灰黄褐色である。105 は 3/4 の残存で、口径 9.0cm、器高 1.7cmである。器壁は厚く、色調はにぶい黄橙色である。104



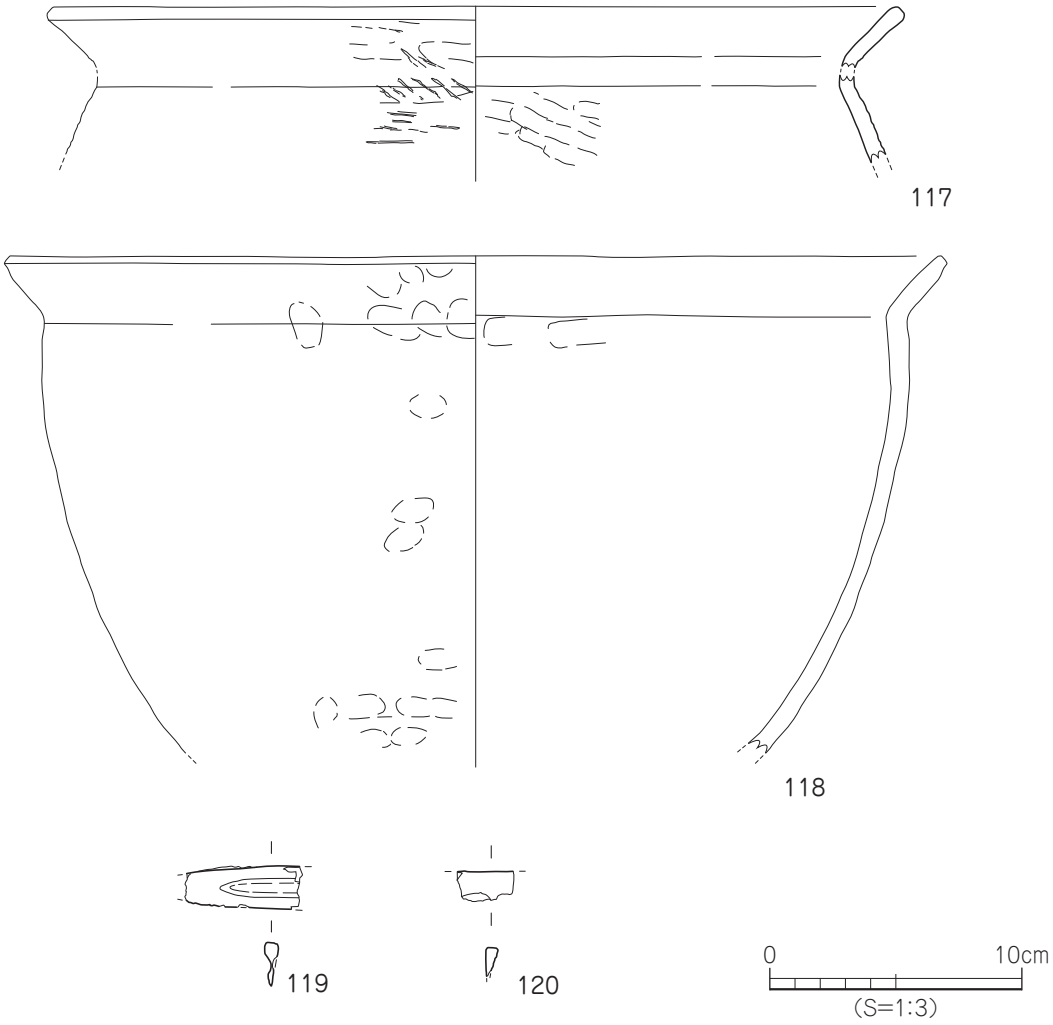
第 26 図　SK204 出土遺物実測図（1）

～ 106 の底部切り離しは、回転ヘラ切り技法による。107・108 の底部は突出し、107 は口径 9.0cm、器高 1.8cm、108 は口径 9.5cm、器高 1.9cmである。111 は耳皿状で、口径 6.2cm、底径 5.0cm、器高 2.5 cmである。107 ～ 111 の底部切り離しは、全て回転糸切り技法による。

112 ～ 116 は黒色土器。内黒椀で、112 は推定口径 16.1cm、底径 6.4cm、器高 6.4cmである。底部は、僅かに突出する平底をなす。体部内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。底部外面には、粗目の回転糸切り痕を残す。113 は底部完形品で、推定口径 15.1cm、底径 6.6cm、器高 6.6cmである。体部内面にはヘラミガキを施し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。116 は底部片で、回転糸切り痕が残る。112 ～ 116 の色調は、すべて灰白色である。

117 は弥生土器の甕。「く」の字状口縁で、胴部外面にはタタキ調整がみられる。118 は土師器の鍋。外反口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。119・120 は器種不明の鉄製品。同一個体で、119 の中央部は凹む。

時期：出土遺物の特徴より SK204 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭と考えられる。



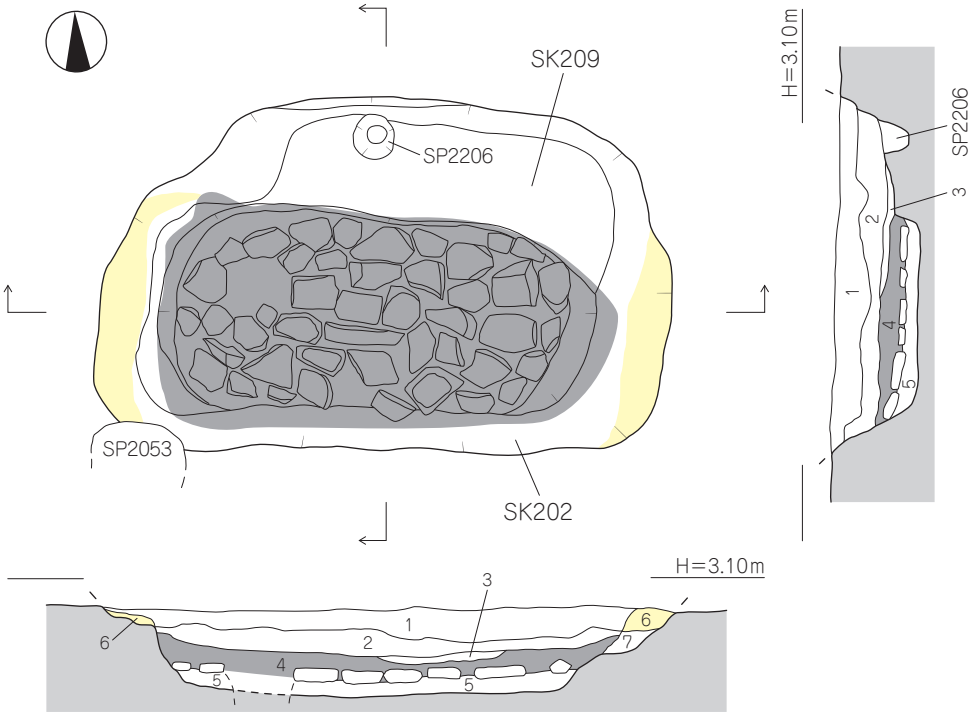
第 27 図　SK204 出土遺物実測図（2）

SK202（第 28 図、図版 10 ～ 12）

2 区北西部 P・Q9 区で検出した楕円形状の土坑で、SK209 と重複する（前後関係は不明）。規模は東西長 2.25 m、南北検出長 1.05 m、深さは 34cmである。断面形態は逆台形状をなすが、東西の壁面にはテラス状の平坦部をもつ。埋土は 4 種類あり、上位より褐灰色土（7.5YR 5/1）、黄灰色土（2.5Y 4/1）、浅黄色土（5Y 7/4）、緑灰色土（10GY 6/1）であるが、前述した平坦部には浅黄色砂（2.5Y 7/3）が厚さ 5 ～ 10cm程度堆積している。また、黄灰色土と緑灰色土の間には厚さ 5 ～ 10cm程度の炭化物が土坑全面にて検出された。基底面には径 10 ～ 25cm大の扁平な礫が敷かれ、土坑西部の基底面には礫が弧状に配置され、その中央部は礫がなく空洞となっていた。なお、発掘調査中、SK202 基底面付近は湧水が激しく、常時、滞水状態であったため、空洞部分の基底部は確認できなかった。遺物は炭化物の上面にて、土師器坏や椀の破片のほかに瓦器椀や緑釉陶器の破片などが数点出土した。

出土遺物（第 29 図、図版 22）

121 ～ 123 は土師器の坏。121 は 1/2 の残存で、推定口径 14.8cm、推定底径 8.4cm、器高は 3.7cmである。硬質で、色調は灰白色である。122 は 1/4 の残存で、色調は淡橙色である。123 は底部完形品で、胎土中に赤色酸化土粒を多く含む。121 ～ 123 の底部切り離しは、回転糸切り技法による。124 ～ 127 は土師器の皿。124 はほぼ完形品で、口径 8.0cm、底径 5.0cm、器高 1.6cmである。器壁は薄く、



1　褐灰色土（7.5YR 5/1）に浅黄色土（2.5Y 7/3）がブロック状に混入
2　黄灰色土（2.5Y 4/1）
3　浅黄色土（5Y 7/4）
4　炭化物
5　緑灰色土（10GY 6/1）
6　浅黄色砂（2.5Y 7/3）
7　黄灰色土（2.5Y 4/1）に浅黄色砂（2.5Y 7/3）が少量混入

第 28 図　SK202・209 測量図

底部中央に径 0.6cm大の孔を穿つ。124 ～ 127 の色調は、淡橙色である。125 は 1/4 の残存で、推定口径 8.7cm、器高 1.4cmである。126・127 は「て」の字状口縁で、126 の外面には指頭痕が残る。128 は緑釉陶器の碗。土師質で、外面には薄緑色の釉薬が部分的に残る。129 は白磁碗。小さな玉縁状の口縁部で、胎土は灰白色である。

時期：出土遺物の特徴より SK202 は 12 世紀代の土坑と考えられる。

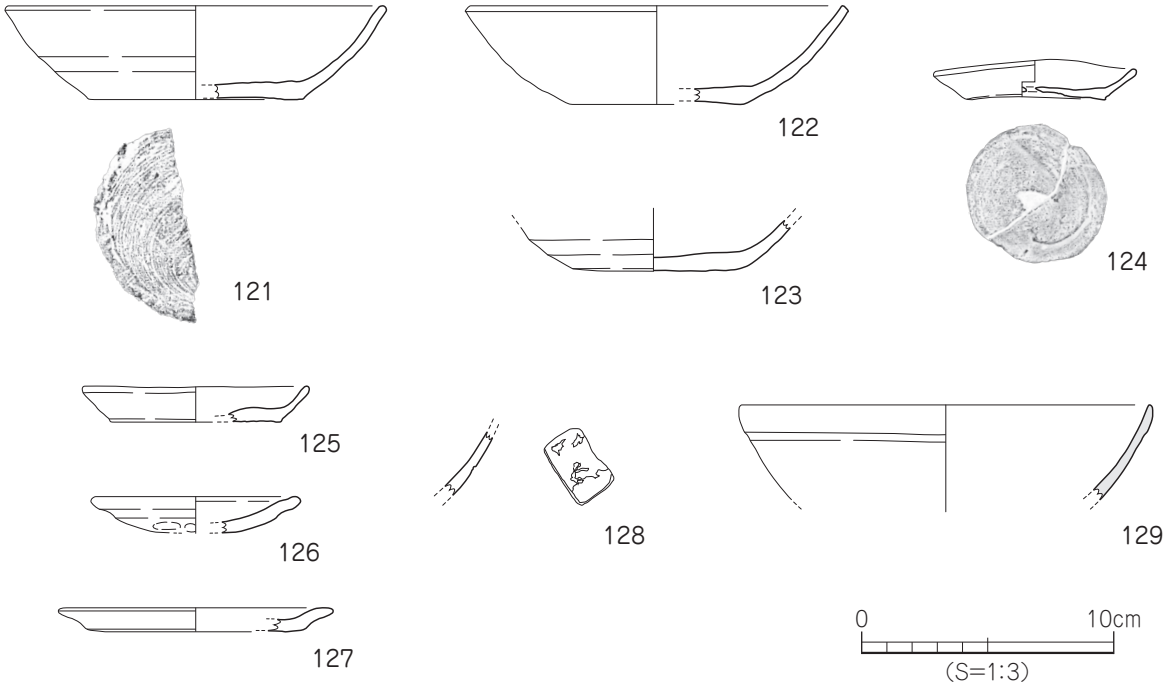
SK209（第 28 図、図版 10･11）

2 区北西部 Q9 区で検出した楕円形状の土坑で、SK202 と重複する。規模は東西長 1.71 m、南北検出長 0.80 m、深さは 22cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 5/1）を基調とし、黄灰色土（2.5Y 4/1）、浅黄色土（5Y 7/4）である。土坑基底面はほぼ平坦で、部分的に炭化物が遺存している。土坑内からは土師器片や須恵器甕の破片が少量出土した。

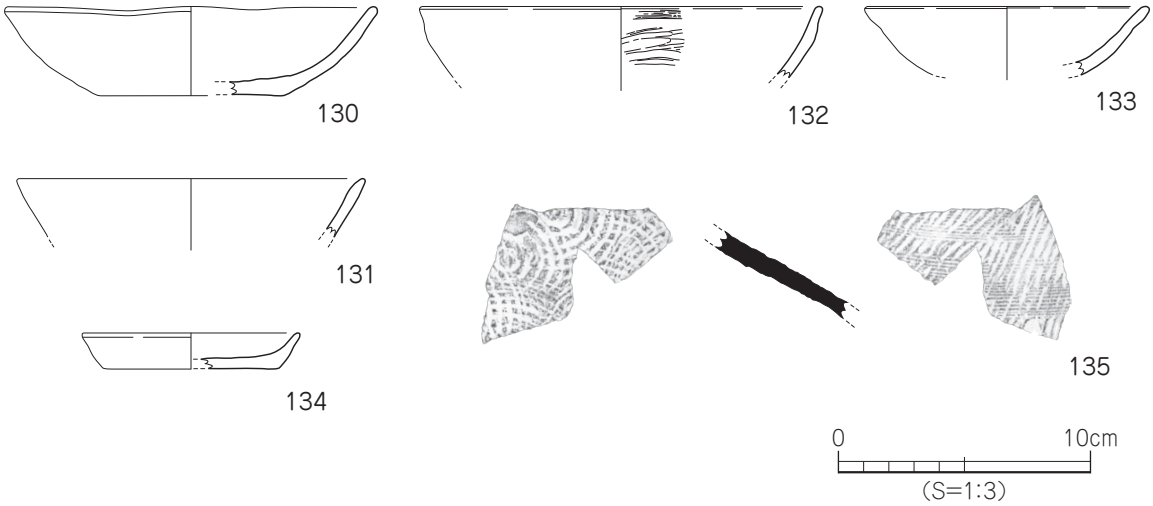
出土遺物（第 30 図、図版 22）

130 ～ 133 は土師器の坏。130 は推定口径 14.4cm、推定底径 7.2cm、器高 3.5cmで、底部外面には回転糸切り痕を残す。131 ～ 133 は小片で、133 は推定口径 11.0cmの小型品である。134 は土師器の皿。1/3 の残存で、推定口径 8.6cm、推定底径 6.7cm、器高 1.4cmである。底部外面には回転糸切り痕が残り、色調は淡橙色である。135 は須恵器の甕。胴部片で、外面に平行叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴より SK209 は 12 世紀代の土坑と考えられる。



第 29 図　SK202 出土遺物実測図



第 30 図　SK209 出土遺物実測図

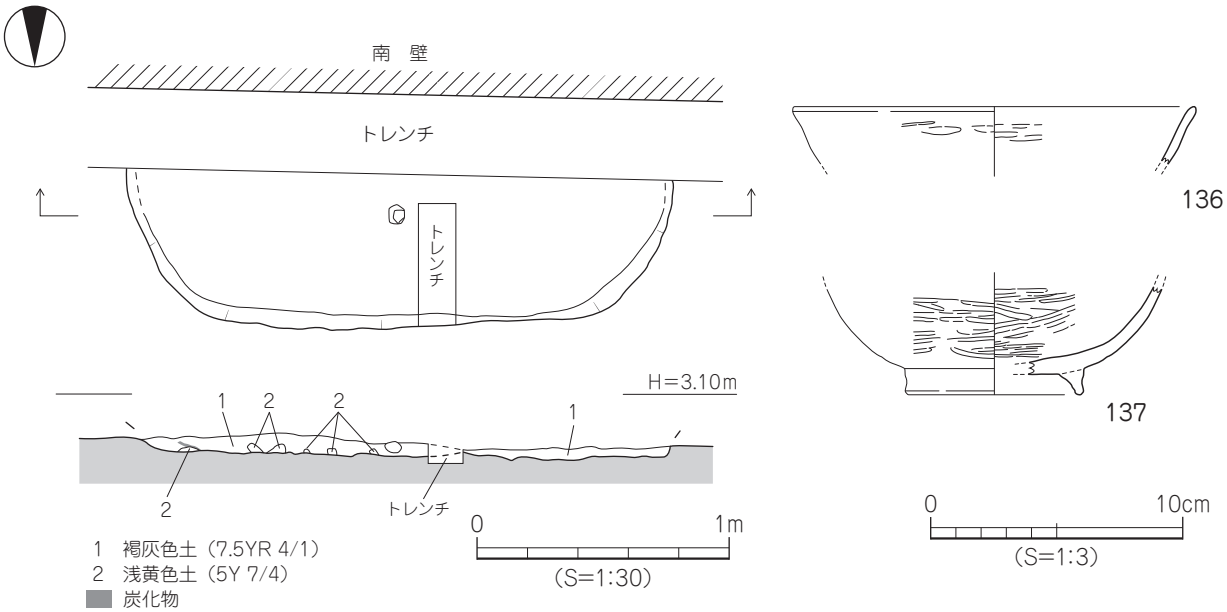
SK203（第 31 図、図版 12）

2 区南西隅 P・Q11 区で検出した楕円形状の土坑で、土坑南半部は排水用のトレンチにより削平されている。平面形態は楕円形状をなすものと思われ、規模は東西長 2.17 m、南北検出長 0.60 m、深さは 8cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）に浅黄色土（5Y 7/4）及び炭化物が少量混入する。土坑基底面は平坦で、遺物は基底面付近より黒色土器片が出土した。

出土遺物（図版 23）

136・137 は黒色土器。内黒椀で、136 の推定口径は 15.9cmである。137 は体底部片で、断面三角形状の低い高台を貼り付ける。136・137 共に、体部内面には丁寧なヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より SK203 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭と考えられる。



第 31 図　SK203 測量図・出土遺物実測図

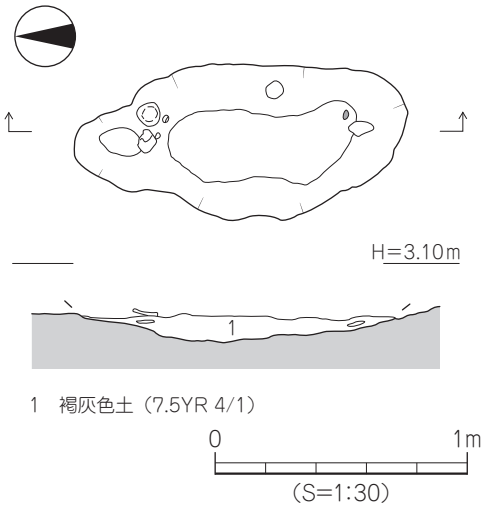
SK205（第 32 図、図版 13）

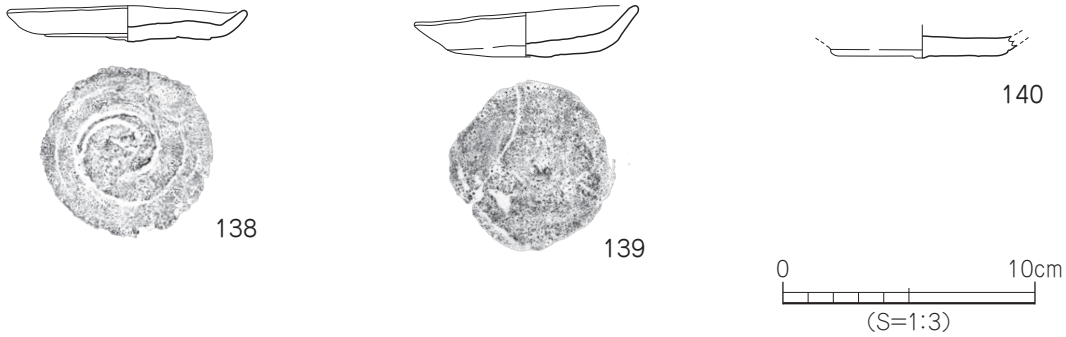
2 区北西部 P8･9 区で検出した南北方向に長い不整楕円形状の土坑で、規模は長径 1.30 m、短径 0.60 m、深さは 10cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）単層である。土坑基底面は中央部がやや凹む。遺物は完形品を含む土師器坏や皿、椀のほかに須恵器片などが出土した。

出土遺物（図版 23）

138 ～ 140 は土師器の皿。138･139 はほぼ完形品で、138 は口径 9.2cm、底径 6.5cm、器高 1.4cmである。底部中央部が突出し、口縁部は短く内湾する。色調は、にぶい褐色である。139 は口径 8.7cm、底径 6.8cm、器高 2.0cmで体底部境界は丸味をもつ。色調は、灰白色である。140 は底部片で、底径 6.4 cmであり、色調は鈍い褐色である。138 ～ 140 の底部切り離しは、全て回転ヘラ切り技法による。

時期：出土遺物の特徴より SK205 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭頃と考えられる。





第 32 図　SK205 測量図・出土遺物実測図

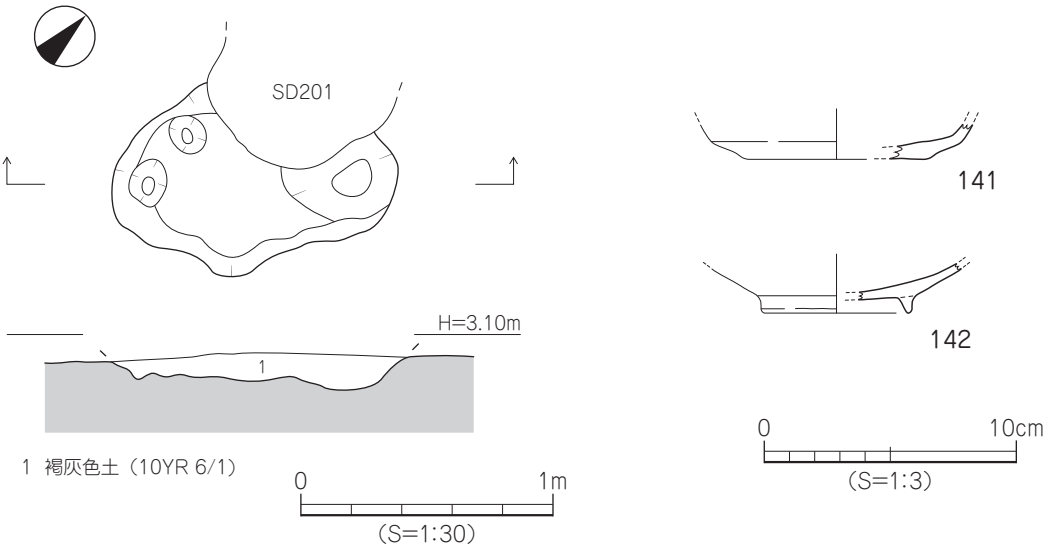
SK206（第 33 図）

2 区中央部北東寄り、S9 区で検出した不整形の土坑で溝 SD201 と重複し、SK206 が先行する。規模は長径 1.38 m、短径 0.85 m、深さは 10cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 6/1）単層である。土坑基底面には、凹凸がみられる。土坑からは、土師器の小片が数点出土した。

出土遺物

141 は土師器の坏。底部片で、推定底径 7.2cmである。底部の切り離しは、摩滅の為、不明である。色調は淡橙色である。142 は土師器の椀。小片で、推定底径 5.8cmである。体部内面にはヘラミガキを施し、色調は灰白色である。

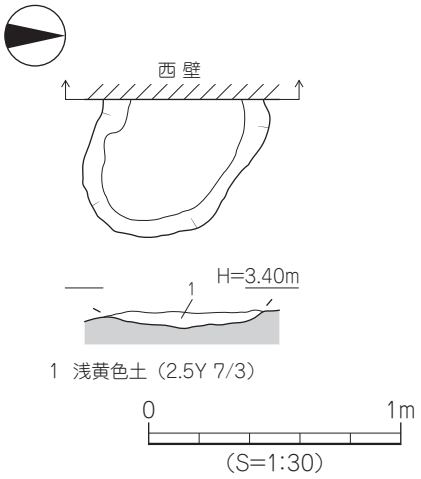
時期：出土遺物の特徴より SK206 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭頃と考えられる。



第 33 図　SK206 測量図・出土遺物実測図

SK207（第 34 図、図版 13）

2 区南西部 P10 区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 0.57 m、南北長 0.66 m、深さは検出面下 5cmである。調査区西壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅷ層が覆う。断面形態は皿状をなし、埋土は浅黄色土（2.5Y 7/3）単層である。遺物は完形品を含む土師器椀、皿のほかに土鍋片が出土した。



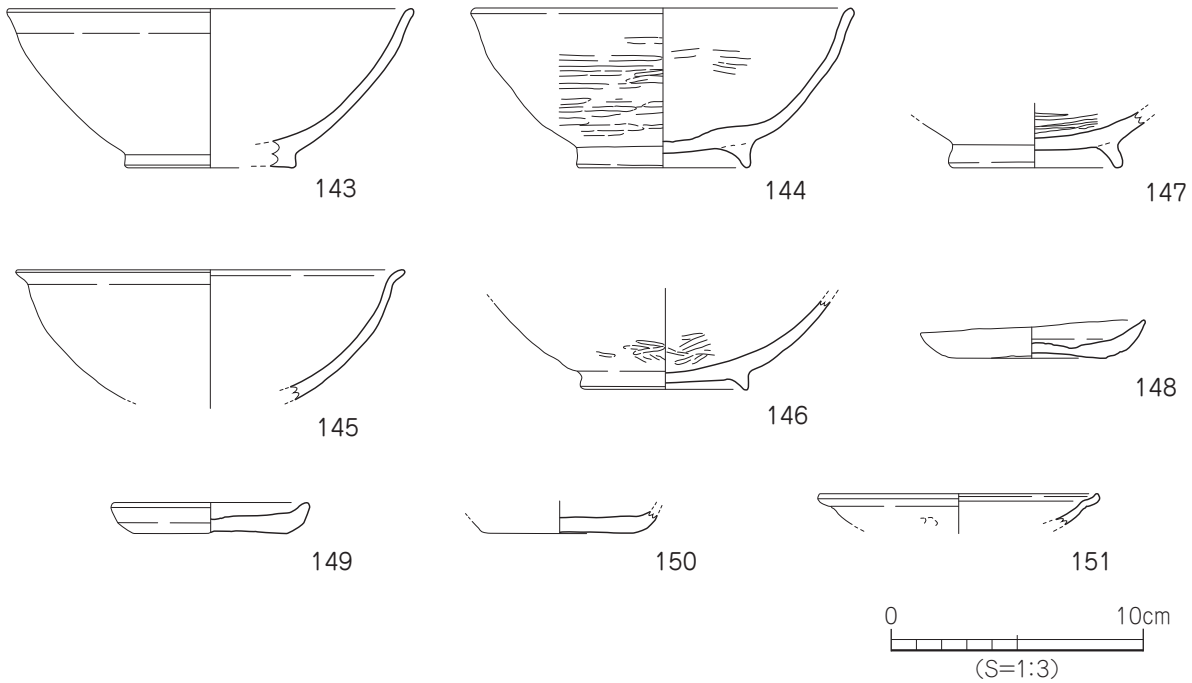
第 34 図　SK207 測量図

出土遺物（第 35 図、図版 23）

143 は土師器の椀。推定口径 16.0cm、推定底径 6.6cm、器高は 6.3cmである。体部は内湾し、底部は円盤高台状をなす。色調は、鈍い橙色である。144 ～ 147 は土師器の椀。144 は底部完形品で、推定口径 14.9cm、底径 6.6cm、器高 6.3cmである。底部の切り離しは、粗目の回転糸切り技法による。色調は、灰白色である。147 は底部片で、底部外面には回転糸切り痕を残す。

148 ～ 151 は土師器の皿。148 は口径 8.9cm、底径 6.0cm、器高 1.5cmで、底部の切り離しは回転糸切り技法による。149 は推定口径 7.8cm、器高 1.2cmで、口縁部は短く直立する。底部外面には、回転ヘラ切り痕が残る。148 ～ 150 の色調は、鈍い橙色である。151 は「て」の字状口縁で、推定口径は 10.8cmである。色調は淡橙色である。

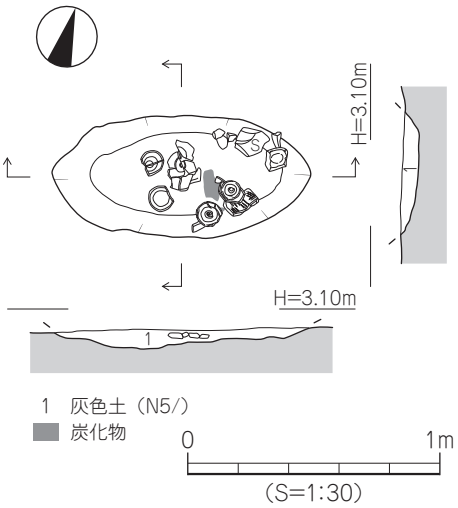
時期：出土遺物の特徴より SK207 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭頃と考えられる。



第 35 図　SK207 出土遺物実測図

SK208（第 36 図、図版 14）

2 区南東部 S10 区で検出した楕円形状の土坑で、規模は長径 1.02 m、短径 0.48 m、深さは 5cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は灰色土（N5/）単層である。土坑基底面はほぼ平坦で、遺物は基底面付近にて完形品を含む土師器や黒色土器等が出土した。

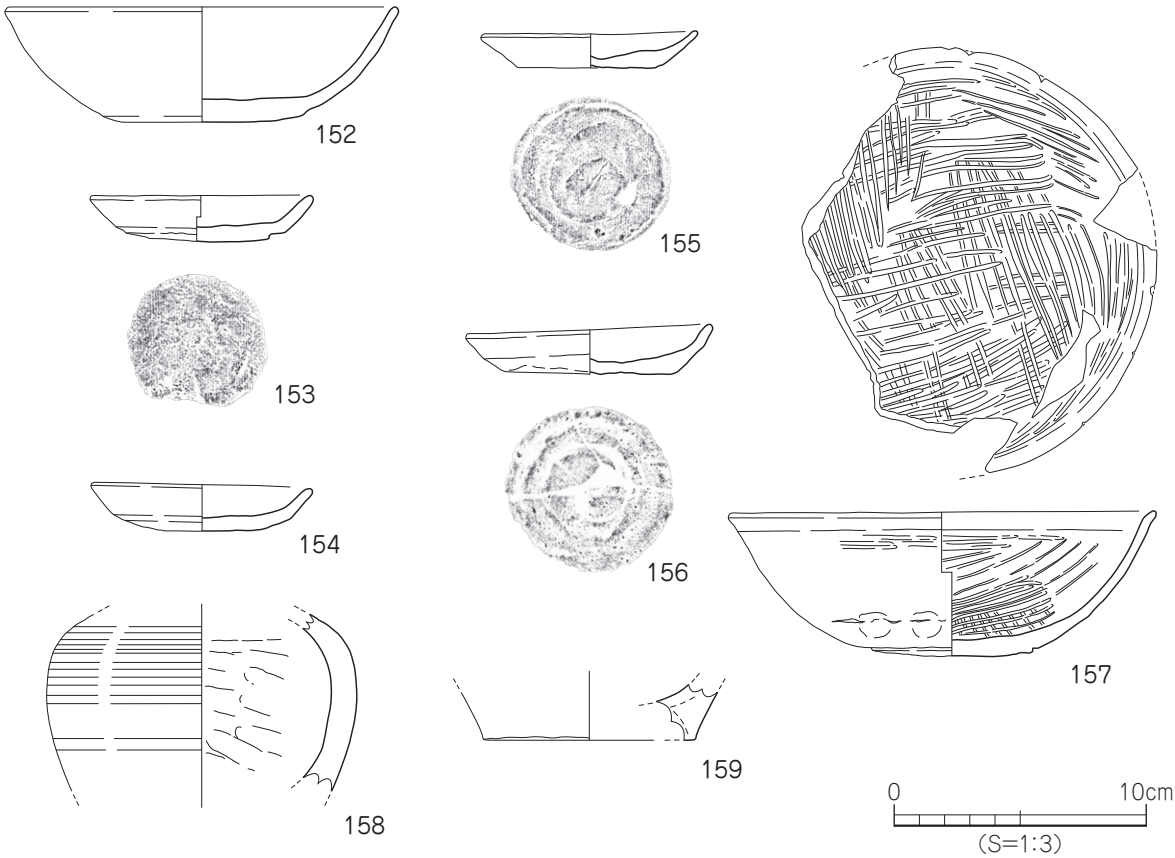


第 36 図　SK208 測量図

出土遺物（第 37 図、図版 24）

152 は土師器の坏。推定口径 15.4cm、底径 7.8cm、器高 4.6cmで、底部は僅かに突出する。色調は鈍い橙色で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。153 ～ 156 は土師器の皿。153 は完形品で、口径 8.6cm、底径 5.6cm、器高 1.8cmである。底部は僅かに突出し、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。155 は完存品で、口径 8.5cm、底径 5.4cm、器高 1.5cmである。底体部の境界は明瞭であり、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。色調は、鈍い橙色である。156 は口径 9.6cm、底径 6.3cm、器高 2.0cmで、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。色調は赤褐色で、胎土中に赤色酸化土粒を多く含む。157 は黒色土器。内黒椀で、推定口径 16.7cm、推定底径 6.8cm、器高 5.7cmである。体部内面には、暗文状のヘラミガキを施す。158・159 は土師器の壺。同一個体で、色調は鈍い橙色である。

時期：出土遺物の特徴より SK208 は平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭頃と考えられる。



第 37 図　SK208 出土遺物実測図

③ 井戸址

SE201（第 38 図、図版 14 ～ 16）

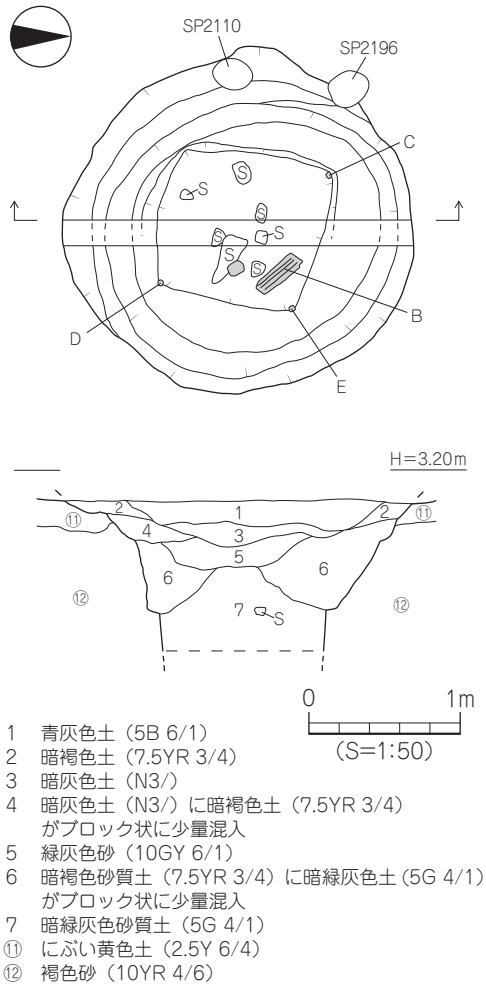
2 区中央部南西寄り Q10 区に位置する井戸址で、掘り方の平面形態は楕円形状をなし、規模は長径 2.27 m、短径 2.18 mを測る。発掘調査開始時は井戸址東側を半截し、調査を進めたが、壁面が第 11 層の褐色砂に及ぶにつれて周辺からの湧水が激しくなり、やむなく東側全体を掘り下げて断面観察や構造確認を行った。

掘り方の断面形態は逆台形状をなすが、地表下 80cmの地点には平坦面があり、その部分にて一辺 80cm程度、深さ 40cmを測る方形状の掘り方を検出した。掘り方の四隅には一辺約 6cmの角材が遺存しており、角材と角材の間には幅 10cm、長さ 30cm、厚さ 1cmの板材が充填されていた（図版 28　B ～ E）。おそらく、この施設が井戸枠として利用されていたものと推測される。掘り方壁面及び基底面は、第 12 層砂層に及んでいる。掘り方埋土は 7 種類あり、上位より青灰色土（5B 6/1）、暗褐色土（7.5YR 3/4）、暗灰色土（N3/）、緑灰色砂（10GY 6/1）、暗緑灰色砂質土（5G 4/1）などである。なお、方形状の掘り方は暗緑灰色砂質土で埋没している。なお、掘り方基底部は周辺からの湧水が激しく、確認することが出来なかった。断面観察や検出状況から、SE201 は井戸としての機能がなくなり人為的に埋め戻されたものと考えられる。SE201 からは土師器や須恵器、瓦器のほかに白磁の破片や砥石、鉄斧などが出土した。

出土遺物（第 39 図、図版 24・25）

160 ～ 165 は土師器の坏。160 は口縁部片で、体部中位に稜をもつ。161 は底部片で、底径 7.2 cmである。体部に粘土紐の巻き上げ痕が残り、底部の切り離しは回転糸切り技法による。162 ～ 165 は僅かに突出部をもつ底部で、162・163 の外面には回転ヘラ切り痕が残る。166 ～ 171 は土師器の椀。166 は口縁部片で、推定口径 14.3cmである。体部内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。硬質で、色調は灰白色である。167 ～ 171 は底部片。167・168 は円盤高台状の底部で、167 の底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。169 は底部完形品で、底径 6.7cmである。高台にはヨコナデ、体部内外面にはヘラミガキを施す。色調は、鈍い黄橙色である。172 ～ 174 は土師器の皿。172･173 は小片で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。174 は「て」の字状口縁で、推定口径 8.8cm、器高 1.4cmである。内外面には指頭痕が残り、色調は淡橙色である。

175 ～ 181 は瓦器。175 ～ 177 は楠葉型瓦器椀で、口縁部内面に沈線が巡る。175 は推定口径 14.8cm、176 は 15.1cm、177 は 16.5cmである。体部内外面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。179 ～ 181 は底部片で、179 の内面には平行線状の暗文、180 は弧状の暗文がみられる。



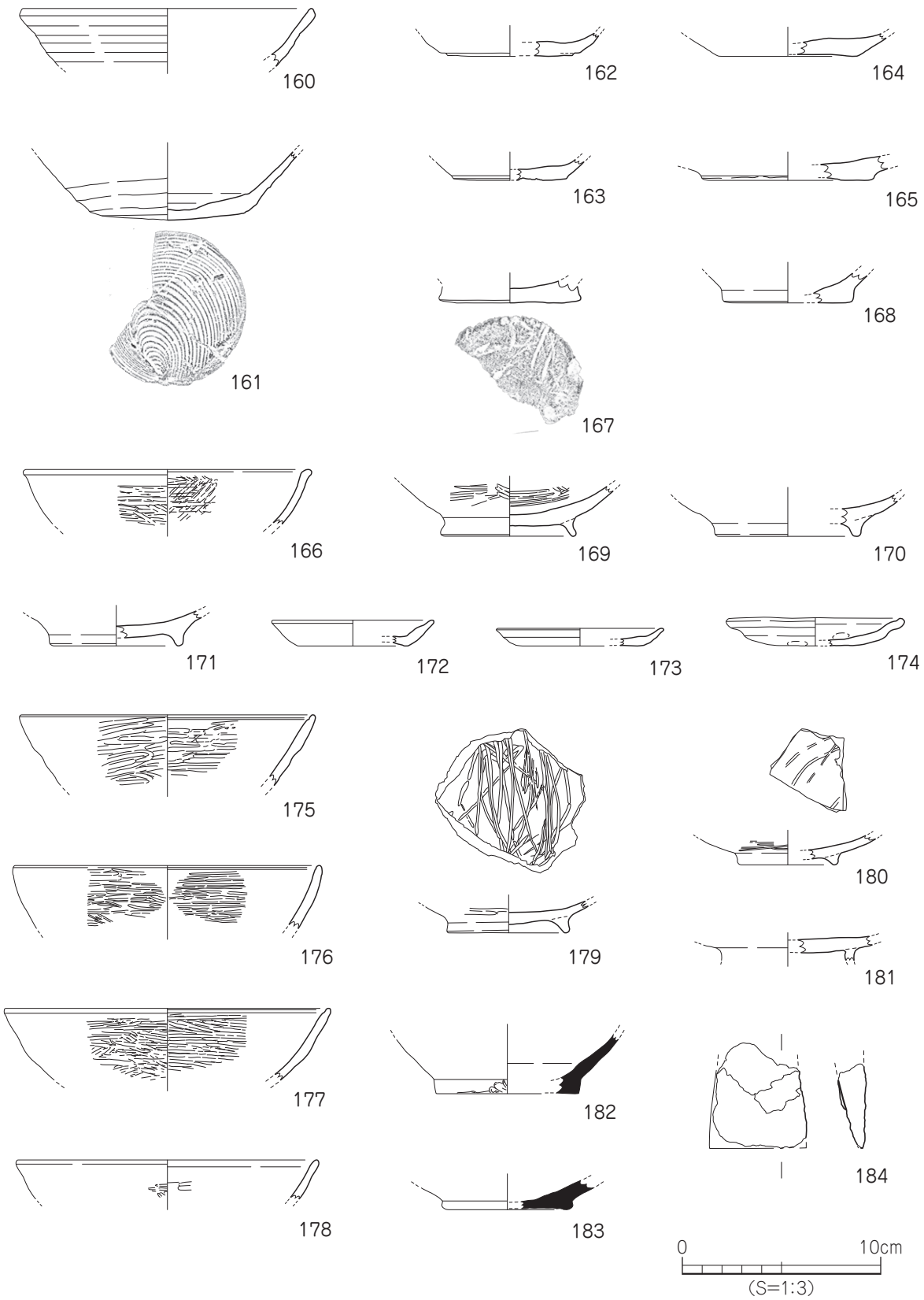
第 38 図　SE201 測量図

182・183 は須恵器の坏。円盤高台状の底部で、182 の底部外面には回転糸切り痕を残す。182・183 の色調は、灰色である。184 は鉄斧で、柄部を欠損する。

時期：出土遺物の特徴より SE201 は平安時代後期から鎌倉時代前期、11 世紀から 13 世紀と考えられる。

SE202（第 40 図、図版 17）

2 区南西部 P9・10 区に位置する井戸址で、掘り方の平面形態は楕円形状をなし、規模は長径 2.18 m、短径 1.95 mを測る。掘り方の断面形態は逆台形状をなし、深さは検出面下約 50cmである。埋土は上位より暗褐色土（7.5YR 3/4）、明赤褐色砂（5YR 5/6）、暗灰色土（N3/）などである。SE202 は SE201 にくらべ掘り方の深さが浅く、井戸址の認定は難しいが、本来は SE201 のように深さ 1 mほどの掘り方が存在した可能性がある。しかしながら、検出した掘り方基底部は第 12 層の褐色砂であり、掘り方と地表との違いが認定できず、砂層より下面の状況は判断できなかった。SE202 からは SE201 と同様、土師器や須恵器、瓦器などの破片が少量出土した。

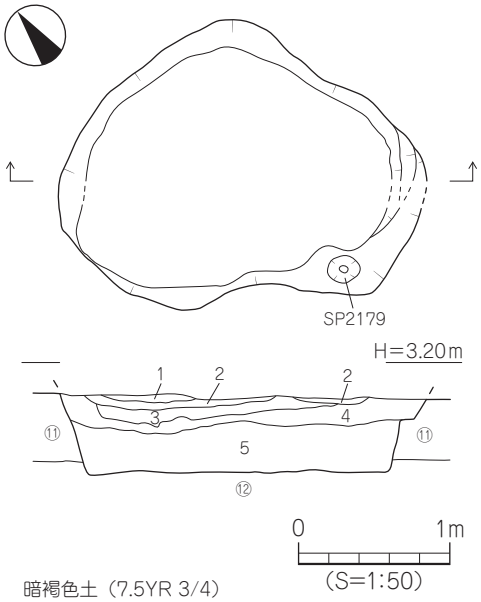


第 39 図　SE201 出土遺物実測図

出土遺物（第 41 図、図版 25・26）

185・186 は土師器の坏。185 は 1/2 の残存で、推定口径 14.2cm、器高 3.5cmである。底部外面には、回転糸切り痕が残る。186 は推定口径 15.0cmで、口縁部下に沈線状の凹みをもつ。187 ～ 190 は土師器の椀。188 は円盤高台状の底部で、底部の切り離しは摩滅の為、不明である。189・190 の外面には回転糸切り痕を残す。187 ～ 190 の色調は灰白色であり、187･189 は硬質である。191･192 は土師器の皿。「て」の字状口縁で、191 の推定口径は 9.2cm、192 は 10.5cmである。色調は 191 が淡橙色、192 は鈍い黄橙色である。

193･194 は黒色土器。内黒椀で、底部外面には回転糸切り痕が残る。195・196 は瓦器。195 は楠葉型の瓦器椀で、口縁部内面には沈線が巡る。推定口径 15.2cmで、体部内外面にはヘラミガキを施す。196 は底部片で、内面に平行線状の暗文がみられる。197 は土師器の高坏。中空で、胎土中に赤色酸化土粒を含む。198・199 は土師器の鍋。198 は外反口縁で、口縁端部は面取りされる。200 は香川県十瓶焼の壺で、断面観察により三層の焼成痕が見て取れる。胴部片で、外面に線刻がみられる。



1　暗褐色土（7.5YR 3/4）
2　明赤褐色砂（5YR 5/6）
3　暗灰色土（N3/）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に混入
4　暗褐色土（7.5YR 3/4）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に少量混入
5　暗灰色土（N3/）
⑪　にぶい黄色土（2.5Y 6/4）
⑫　褐色砂（10YR 4/6）

第 40 図　SE202 測量図

時期:出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね SE201 と同様、11 世紀から 13 世紀と考えられる。

④ 柱　穴

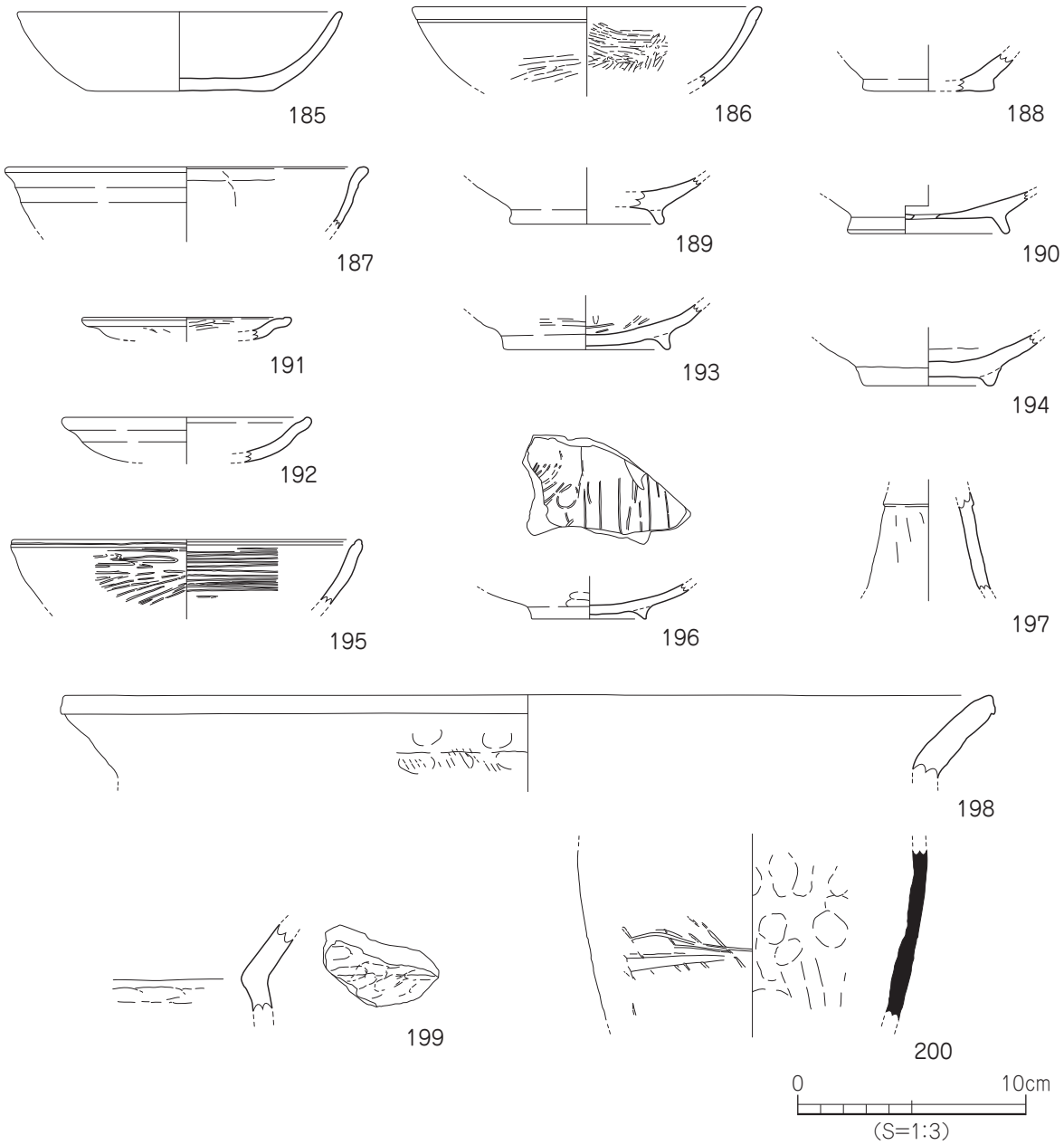
2 区では 209 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は 8 種類（1 ～ 8 類）あり、掘立柱建物を構成する柱穴は 1・2・4・5 類である。遺物は柱穴内より土師器や須恵器、瓦器、陶磁器等が出土した。

1 類：褐灰色土（7.5YR 4/1）：84 基（小礫が混入する柱穴 3 基を含む）
2 類：褐灰色土（7.5YR 4/1）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に混入：26 基
3 類：灰黄褐色土（10YR 6/2）：13 基
4 類：灰黄褐色土（10YR 6/2）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に混入：1 基
5 類：灰色土（N5/）：79 基（小礫が混入する柱穴 1 基を含む）
6 類：灰色土（N5/）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に混入：3 基
7 類：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）に褐灰色土（7.5YR 4/1）がブロック状に混入：2 基
8 類：青灰色土（10BG 6/1）に褐灰色土（7.5YR 4/1）と灰色土（N5/）が混入：1 基

柱穴出土遺物（第 42 図、図版 26）

＜出土品＞ 201･208：SP2042、203･214：SP2053、202･204：SP2004、205：SP2157、206：SP2039、207・210：SP2017、209･213：SP2064、211：SP2088、212：SP2140。

201 は土師器の坏。口縁部片で、体部外面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。202 ～ 206 は土師器の椀。203 ～ 205 は円盤高台状の底部で、203・204 の底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。207 は黒色土器。内黒椀で、体部内面にはヘラミガキを施す。208・209 は土師器の皿。208 は推定口径 9.3cmで、器壁は薄い。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。209 は「て」の字状口縁で、1/3 の残存である。推定口径 9.2cmで、色調は淡い橙色である。210 は瓦器椀で、口縁部の小片である。211 は土師器の甕。内湾口縁で、口縁端部は内傾する。212 は土師器の高坏。柱部片で、低脚である。213 は土師器の鍋。口縁部片で、口縁端部は面取りされる。214 は東播系須恵器。コネ鉢で、口縁部は上方に拡張し、口縁端部はナデ凹む。色調は、内外面共に青灰色である。

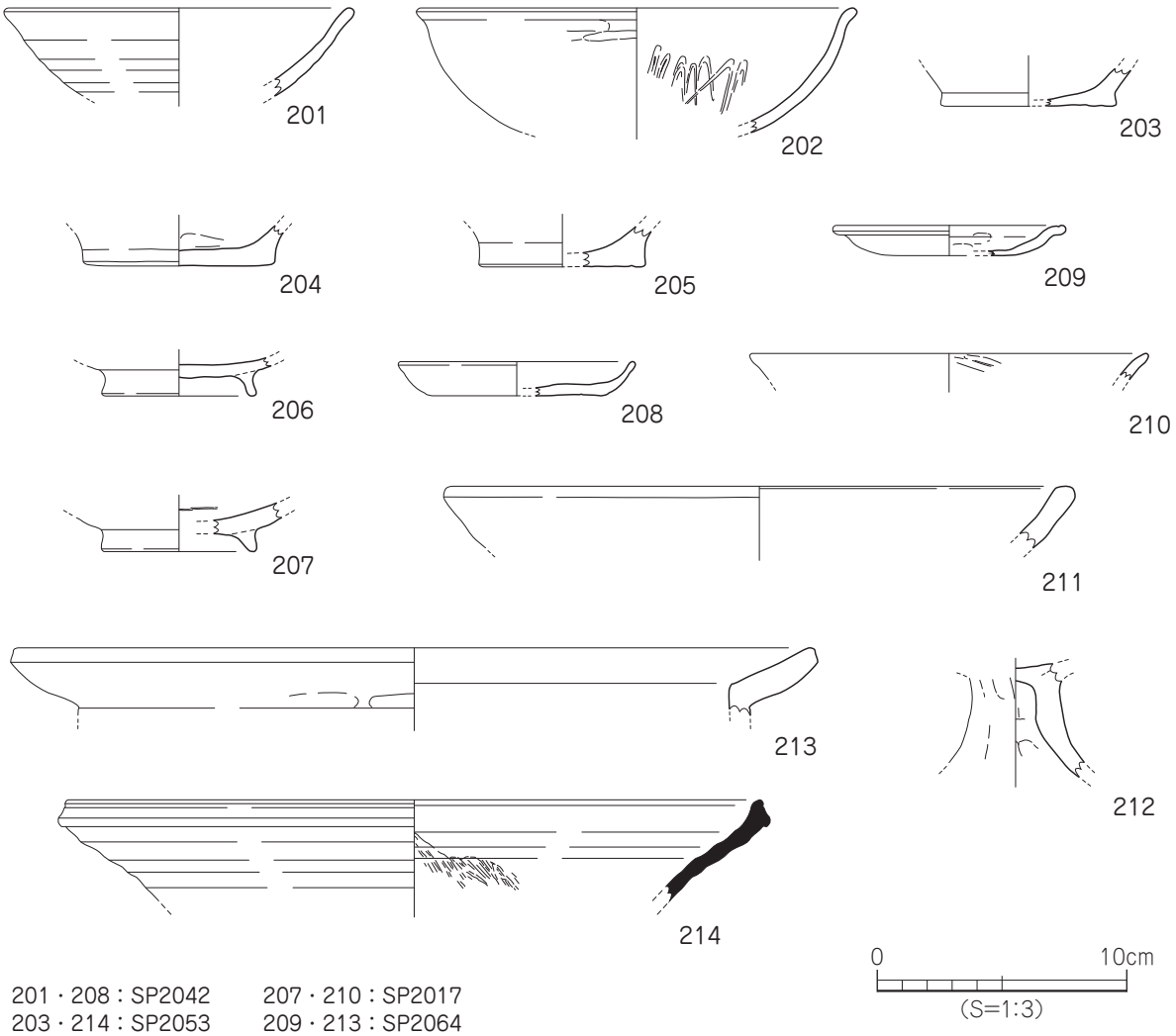


第 41 図　SE202 出土遺物実測図

⑤ 包含層出土遺物（第 43・44 図、図版 26・27）

調査では、第 10 層中より平安時代から鎌倉時代に時期比定される土器や石器が出土した。このうち、松山市内の遺跡からは出土例の極めて少ない土師器椀（220）が出土した。なお、松山市が平成 2 年度に実施した『古照遺跡 6 次調査』検出の砂礫層中より、同様の土器が出土している。

215 は土師器の坏、216 は皿である。216 はほぼ完形品で、口径 9.6cm、底径 7.2cm、器高 1.3cmである。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。色調は鈍い黄橙色で、胎土中に赤色酸化土粒を含む。217 ～ 220 は黒色土器。内黒椀で、底部の切り離しは 217・218 は回転糸切り技法、219・220 は回転ヘラ切り技法による。220 は托上椀で、推定底径 5.6cmを測る。断面台形状の高台と托上部を貼り付け、底部内面には丁寧なヘラミガキを施す。色調は外面が鈍い黄橙色、内面は黒色である。221 は瓦器椀。底部片で、内外面全体にヘラミガキを施す。222 は土師器の甕。口縁部は内湾し、胴部内外面には粗いハケメ調整がみられる。223 は土師器の土釜。口縁部片で、口縁端部は面取りされる。224 ～ 227



201・208：SP2042
203・214：SP2053
202・204：SP2004
205：SP2157
206：SP2039
207・210：SP2017
209・213：SP2064
211：SP2088
212：SP2140

第 42 図　2 区柱穴出土遺物実測図

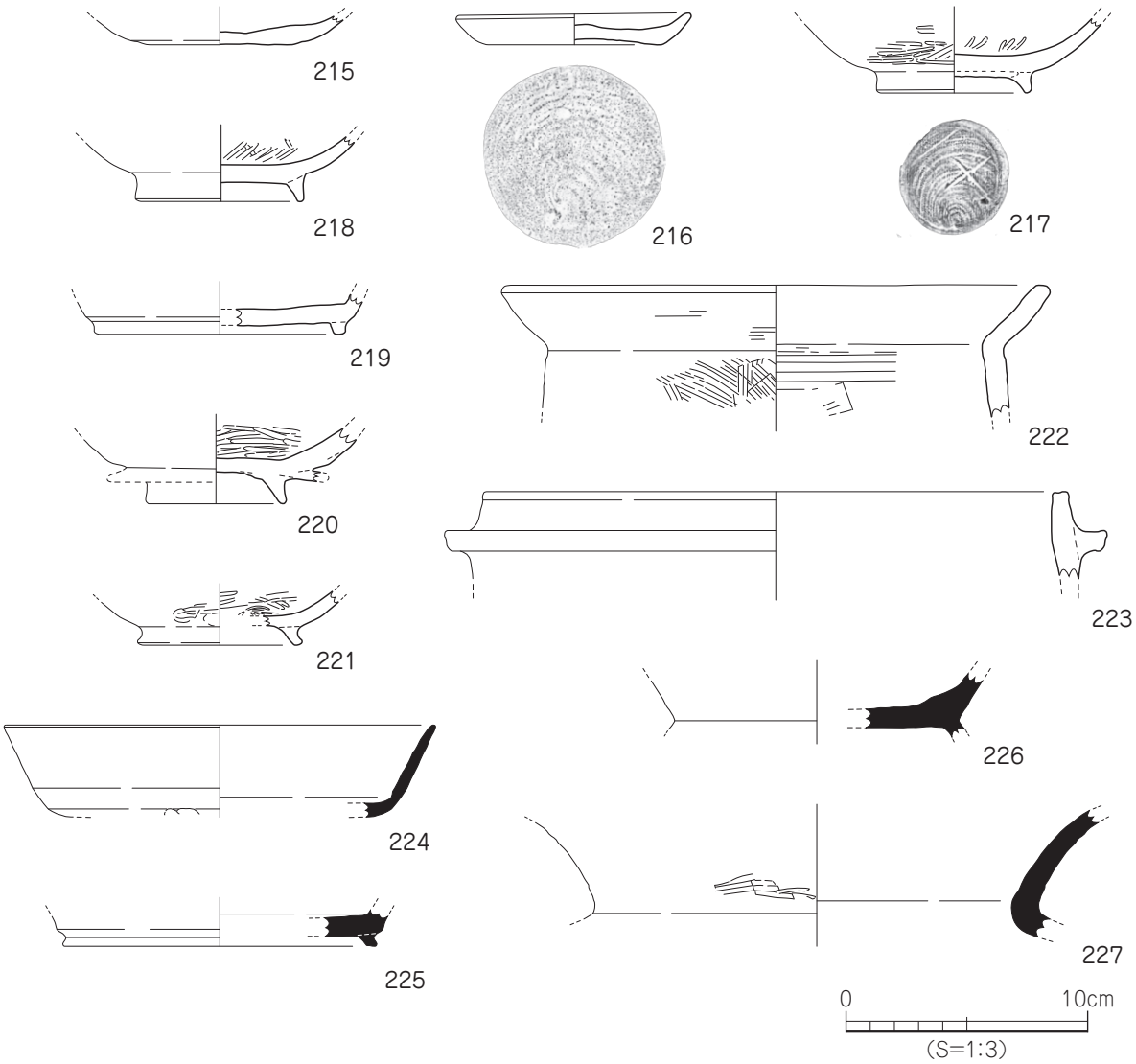
は須恵器。224 は無台の坏で、推定口径 17.8cmである。225 は高台の付く坏で、高台は体底部境界に付く。226 は脚付壺の底脚部、227 は頸部片である。

228 は瓦質土器の鉢で、推定口径 45.4cmである。口縁部は内湾し、口縁端部は面取される。229・230 は褐釉陶器の壺。同一個体で、胎土は灰色をなし、全面に褐色の釉薬が掛けられている。231 は灰釉陶器。椀の底部片で、須恵質である。蛇の目高台で、胎土は灰白色をなし、内面に薄褐色の釉が部分的に残る。232 は平瓦の小片。色調は白色で、凹面に布目痕が残る。

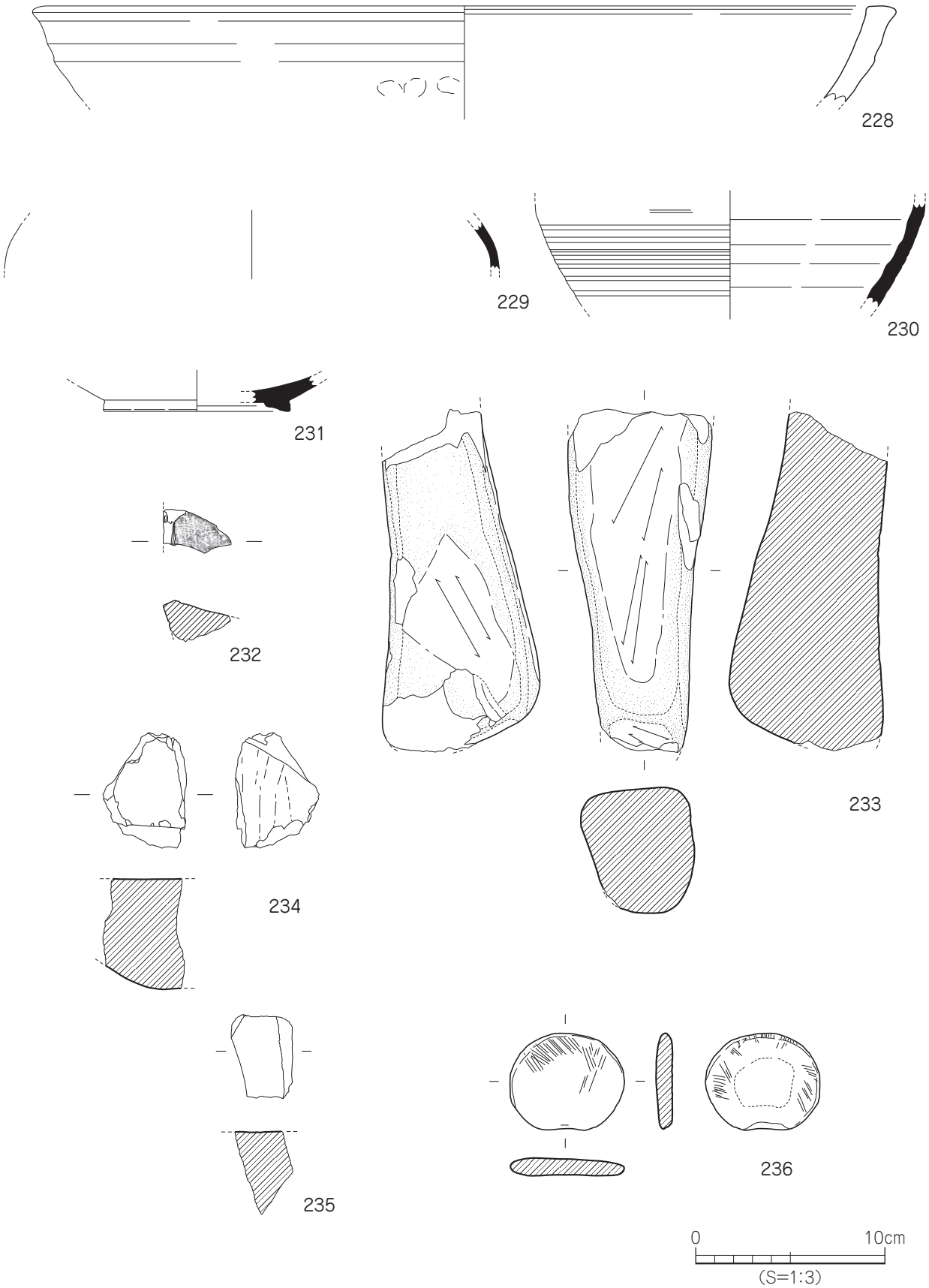
233 ～ 235 は砥石。233 はほぼ完形品で、2 面の砥面をもつ。重量は約 1.3kgである。234 は 2 面、235 は 1 面の砥面をもつ、砂岩製。236 は用途不明品。円盤状で、径 5 ～ 6cm、厚さは 0.9cmである。

【参考文献】

栗田　正芳　1993 『古照遺跡－第 6 次調査－』松山市文化財調査報告書 第 35 集



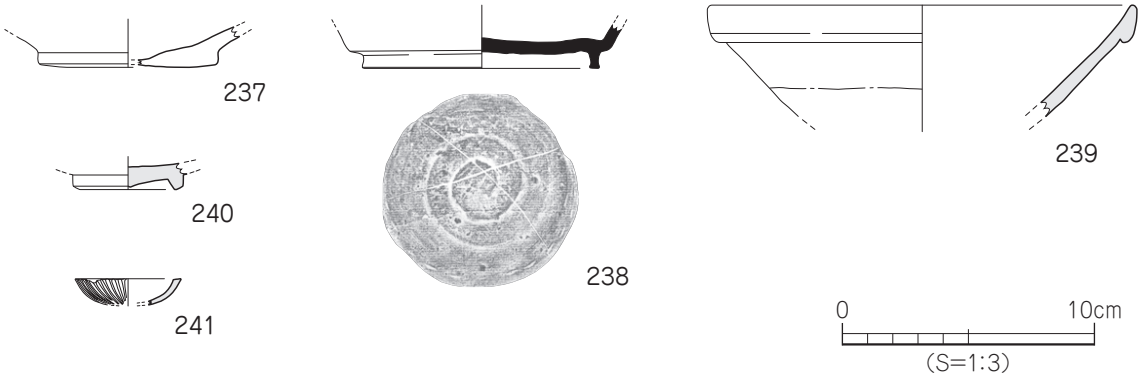
第 43 図　2 区包含層出土遺物実測図（1）



第 44 図　２区包含層出土遺物実測図（2）

⑥ 地点不明出土遺物（第 45 図、図版 27）

237 は土師器の椀、238 は須恵器の坏である。238 の底部外面には、「×」印のヘラ記号がみられる。239･240 は白磁碗。239 は玉縁状口縁で、胎土は灰白色をなす。241 は白磁の紅皿。1/2 の残存で、胎土は白色をなす。



第 45 図　2 区地点不明出土遺物実測図

3．3 区の調査

3 区は調査対象地中央部、L1 ～ M10 区に位置する。南北方向に長い長方形状をなし、調査面積は、約 114㎡である。3 区では地表下約 80㎝の地点（標高約 3.2 ～ 3.3 m）にて水田址を検出した（第 48 図、図版 29）。

（1）層　位

3 区で確認した土層は、以下の 7 層（第 1 ～ 5･7･8 層）である。このうち、第 8 層は水田土壌である。

第 1 層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1）〕で、層厚は 8 ～ 20㎝である。

第 2 層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で 3 区全域にあり、層厚は 4 ～ 11㎝である。

第 3 層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で 3 区全域にあり、層厚は 18 ～ 24㎝である。

第 4 層：灰色土（5Y 6/1）で 3 区全域にあり、層厚は 8 ～ 20㎝である。

第 5 層：黄褐色土（10YR 5/6）で 3 区全域にて部分的にみられ、層厚は 3 ～ 6㎝である。

第 7 層：灰色砂（10Y 5/1）を基調とし、灰白色粗砂（10Y 7/1）や褐色砂（10YR 4/6）で構成される。3 区全域にみられ、層厚は 10 ～ 30㎝である。

第 8 層：灰色粘質土（10Y 5/1）で 3 区全域にみられ、層厚は 25㎝以上である。本層は水田土壌であり、本層上面にて畦畔や溝、足跡を検出した。なお、本層は地下水の影響等により一部がグライ化し、色調が青灰色をなす箇所が数箇所でみられた。

（2）遺構と遺物

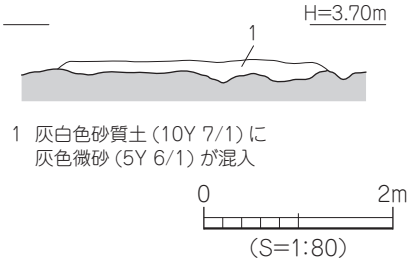
3 区では、水田址を確認した。検出した遺構は畦畔 2 条、溝 2 条、足跡 2,808 ケである。遺物は土師器や須恵器の小片が少量出土した。

1）畦　畔

3区では、規模の異なる畦畔を検出した。

畦畔301（第46図、図版30）

3区中央部、M3～L4区で検出した大型の畦畔で、検出幅2.8 m、高さは約6cmである。畦畔は、水田土壌である第8層上面にて灰白色砂質土（10Y 7/1）を用いて構築されている。



第46図　畦畔301断面図

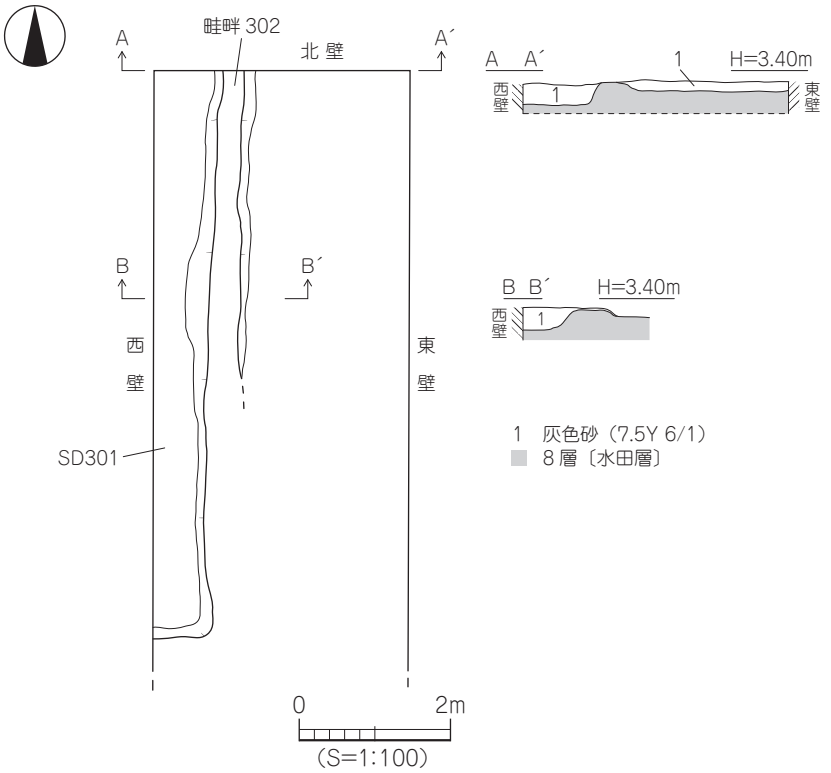
畦畔302（第47図、図版30）

3区北西部、M1･2区で検出した畦畔で、北側は調査区外に続く。検出長7.5 m、検出幅0.50～0.82 m、高さは4～7cmである。畦畔は第8層と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて作られている。なお、畦畔西側には水田に水を供給するための溝SD301が付設されている。

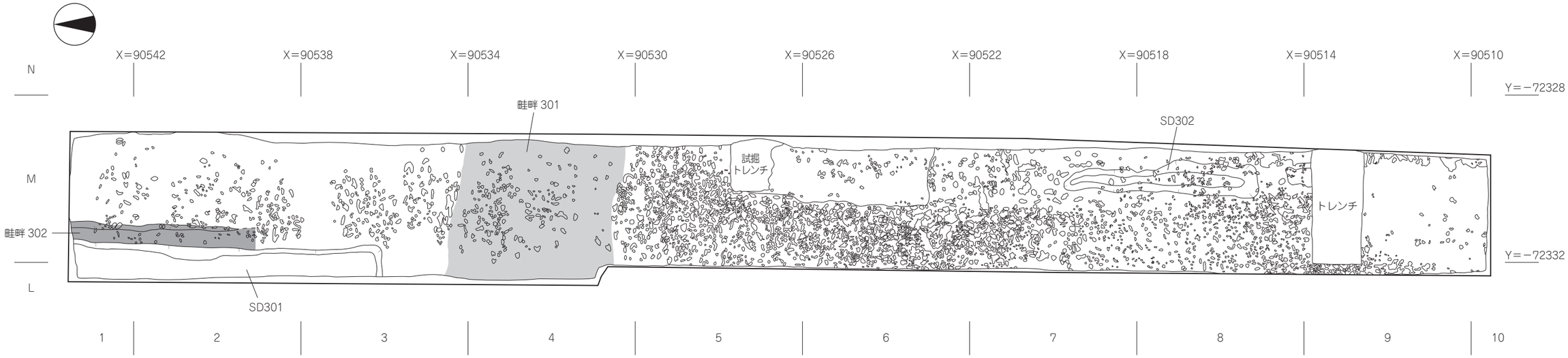
2）溝

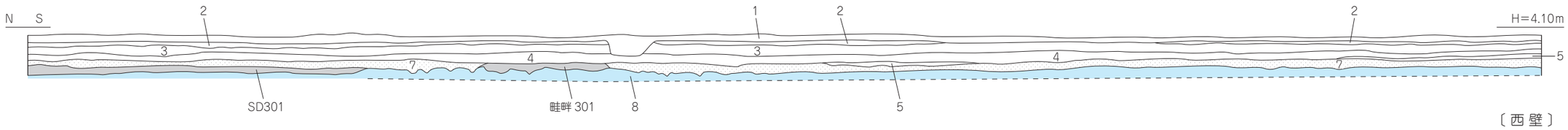
SD301（第47図、図版30）

3区北西部、L1～M3区で検出した南北方向の溝で、検出幅0.42～0.80 m、深さは12～20cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、灰色砂（7.5Y 6/1）で埋没している。溝からは土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第47図　畦畔302・SD301測量図





1　オリーブ灰色土（5GY 5/1）
2　灰オリーブ色土（5Y 6/2）
3　オリーブ黄色土（5Y 6/4）
4　灰色土（5Y 6/1）
5　黄褐色土（10YR 5/6）
7　灰色砂（10Y 5/1）・灰白色粗砂（10Y 7/1）・褐色砂（10YR 4/6）の互層
8　灰色粘質土（10Y 5/1）〔水田層〕

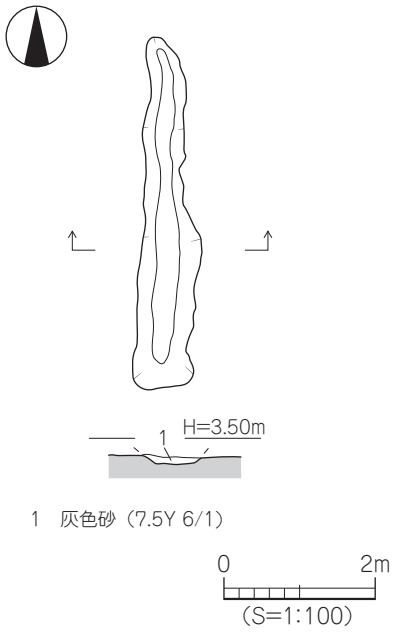
大型畦畔
畦畔
水田層

0　5m
（S=1:100）

第 48 図　3 区足跡等検出状況図、西壁土層図

SD302（第 49 図）

3 区中央部南寄り、M7・8 区で検出した南北方向の溝で、検出長 4.66 m、検出幅 0.46 ～ 0.80 m、深さは 8 ～ 12cmである。断面形態は浅いレンズ状をなし、灰色砂（7.5Y 6/1）で埋没している。溝基底面は平坦であるが、北から南へ向けて緩傾斜をなす（比高差 3cm）。溝内からは、遺物の出土はない。



第 49 図　SD302 測量図

3）足　跡

3 区で検出した足跡は、2,808 ケである。このうち、牛と思われる足跡は 724 ケである。これらの足跡は、すべて第 7 層（灰色砂）で埋没している。足跡内からは数点の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：検出状況から、1･2 区と同時期の水田址と思われる。よって、3 区検出の水田址は概ね室町時代以降の構築と考えられる。

4．4 区の調査

4 区は調査対象地北西部 E3 ～ J6 区に位置する。東西方向にやや長い長方形状をなし、調査面積は、約 284㎡である。4 区からは、水田址を検出した（第 52 図、図版 31 ～ 33）。遺物は水田土壌や排水用に掘削したトレンチ内より、土師器や須恵器、瓦器の破片が少量出土している。

（1）層　位

4 区で確認した土層は、以下の 11 層（第 1 ～ 9・12・13 層）である。なお、第 9 層以下は調査壁沿いに設定したトレンチにて確認した土層である。

第 1 層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1）〕で、層厚は 4 ～ 20cmである。

第 2 層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で 4 区全域にあり、層厚は 2 ～ 16cmである。

第 3 層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で 4 区全域にあり、層厚は 3 ～ 14cmである。

第 4 層：灰色土（5Y 6/1）で 4 区全域にて部分的にあり、層厚は 2 ～ 10cmである。

第 5 層：黄褐色土（10YR 5/6）で 4 区ほぼ全域にあり、層厚は 2 ～ 6cmである。

第 6 層：灰黄褐色土（10YR 5/2）で 4 区東半部にみられ、層厚は 4 ～ 22cmである。

第 7 層：灰色砂（10Y 5/1）を基調とし、灰白色粗砂（10Y 7/1）や褐色砂（10YR 4/6）で構成される。4 区全域にみられ、層厚は 3 ～ 16cmである。

第 8 層：灰色粘質土（10Y 5/1）で 4 区全域にあり、層厚は 6 ～ 28cmである。本層上面にて、畦畔や足跡を検出した。

第 9 層：灰色砂（10Y 6/1）で 4 区南東部にみられ、層厚は 6 ～ 18cmである。

第 12 層：褐色砂（10YR 4/6）で 4 区南東部にみられ、層厚は 20cm以上である。

第 13 層：灰色粗砂（7.5Y 6/1）で、現地表面下 2.5 mの地点（標高 1.6 m）まで掘削を行った。層厚は 30cm以上である。

（2）遺構と遺物

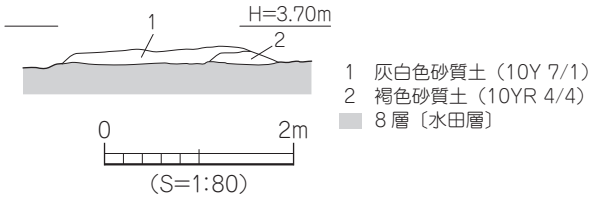
4区では、現地表下約80cmの地点（標高3.3 m前後）にて水田址を確認した。検出した遺構は畦畔3条、鋤址2条、足跡25,878ケである。なお、4区北壁から南へ7.5 m前後のエリアでは、水田面が周辺より約5cm程度低くなっている。

1）畦　畔

4区では、規模の異なる畦畔3条を検出した。

畦畔401（第50図、図版31）

4区中央部E4～J5区で検出した大型の畦畔で、検出幅2.3～3.1 m、高さは6～16cmである。真北方向より、やや西に傾く東西方向に向けて作られた畦畔で、4区中央部付近では南へ向けて「T」字状に折れ曲がっている。畦畔は灰白色砂質土（10Y 7/1）や褐色砂質土（10YR 4/4）を用いて作られている。なお、畦畔は第8層である水田土壌上面で構築されており、畦畔下面では足跡が検出されている。



第50図　畦畔401断面図

畦畔402（第51図、図版32）

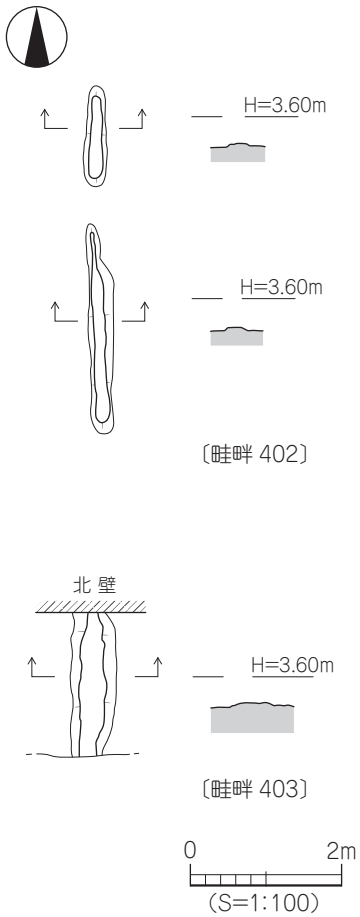
4区西部E4～F5区で検出した畦畔で、検出長4.6 m、検出幅0.26～0.40 m、高さは3～5cmである。南北方向の畦畔で、水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて作られている。なお、畦畔402は畦畔401除去後、水田層上面にて検出したものである。

畦畔403（第51図、図版32）

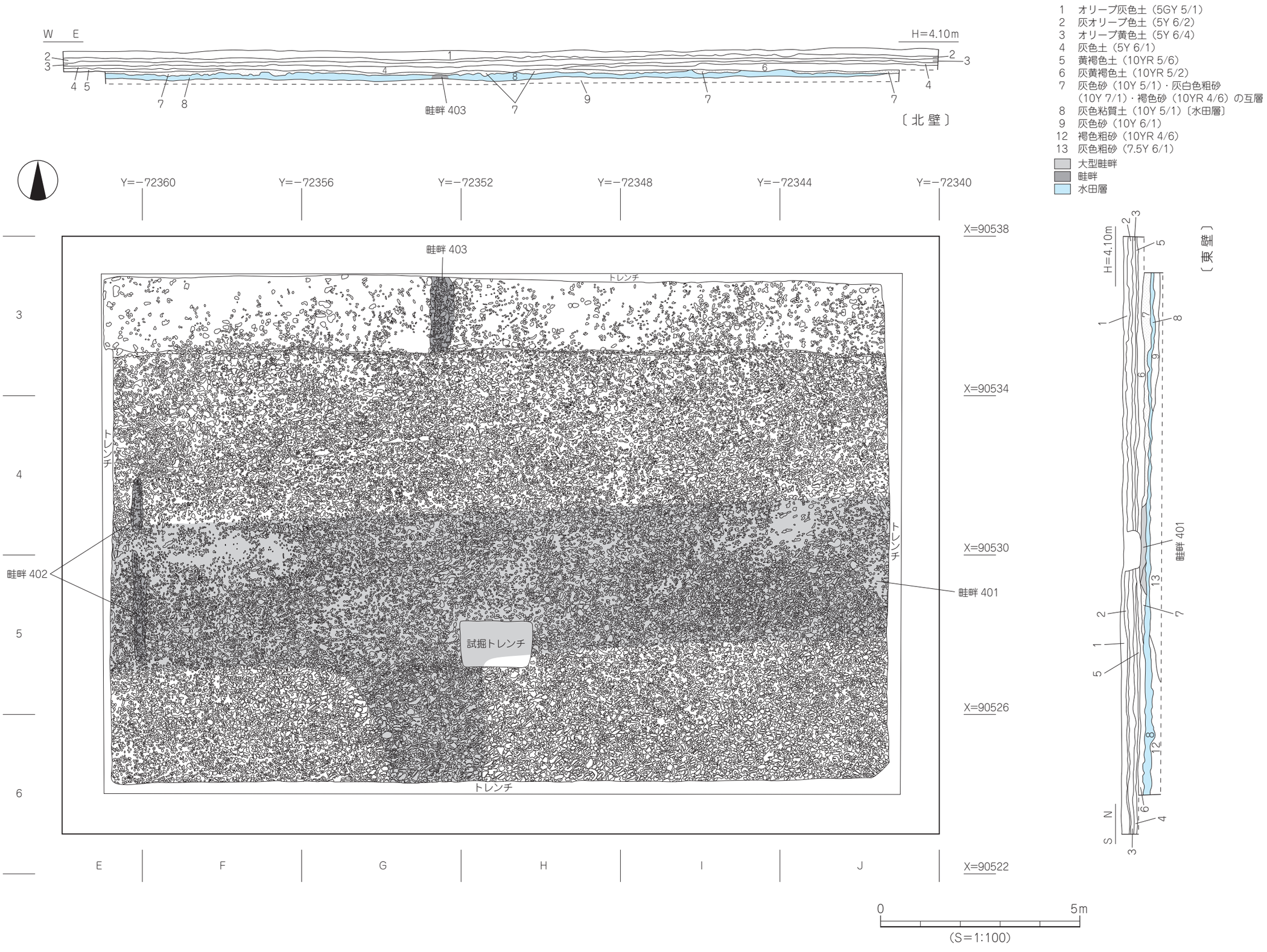
4区中央部北寄りG3区で検出した畦畔で、検出長1.9 m、検出幅0.20～0.36 m、高さは3～6cmである。南北方向の畦畔で、水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて作られている。なお、畦畔は第8層である水田土壌上面で構築されている。

2）鋤　址

4区中央部北寄りE4～J4区からは、2条の鋤址を検出した。東西方向の鋤址で、真北方向からは、やや西に方位を振っている。検出長8.8 m、検出幅8～22cm、深さは3～6cmである。鋤址は、第7層と同様の灰色砂（10Y 5/1）で埋没している。2条の鋤址は、ほぼ平行な位置にあり、両者の間隔は1.7～1.8 mである。鋤址からは、遺物の出土はない。



第51図　畦畔402・403測量図



第 52 図　4 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図

3）足　跡

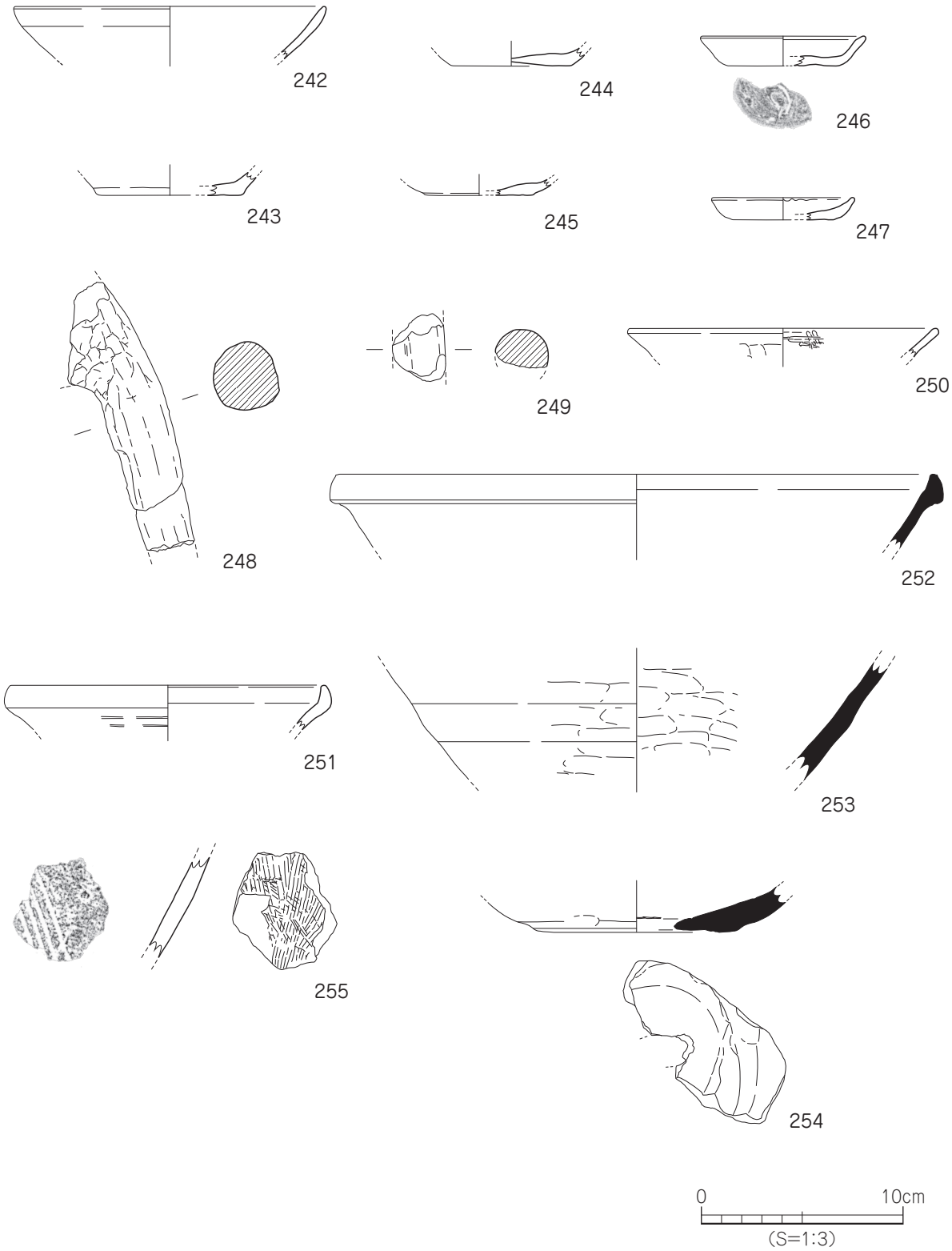
4 区からは、ほぼ全域にて足跡を検出した。足跡総数は 25,878 ケであり、このうち牛と思われる足跡は 8,218 ケである。これらの足跡は、すべて第 7 層（灰色砂）で埋没している。4 区で検出した足跡数は他の地区にくらべ極めて多く、調査期間の都合上、全て完掘したわけではない。足跡からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。なお、足跡の平面測量はドローンを使用した空中写真測量を専門業者（国際航業株式会社）に委託した。

4）水田層出土遺物（第 53 図、図版 34）

4 区では水田土壌内より、土師器や須恵器、瓦器などが出土した。

242 ～ 245 は土師器の坏。242 の口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。色調は、内外面共に褐色である。243 ～ 245 は底部片で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。色調は 243・245 が灰白色、244 は浅黄色である。246・247 は土師器の皿。246 の口縁部はやや外反し、底部外面には回転糸切り痕が残る。247 の体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。色調は、両者共に灰白色である。248・249 は土師器の土釜。脚部片で、248 は厚みが厚く、最大径は 3㎝である。250 は和泉型瓦器椀。推定口径 15.2㎝で、内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。色調は、内外面共に暗灰色である。251 は土師器の鉢。口縁部は上方に肥厚し、口縁端部は尖る。色調は、内外面共に灰色であるが、中心部は褐色をなす。252 ～ 254 は東播系須恵器の擂鉢。252 の口縁部は上下方に肥厚し、254 の底部には円形状の孔を穿つ（焼成後穿孔）。255 は土師器の擂鉢で、体部内面に 6 条の条線を看守する。色調は外面が褐色、内面は暗褐色である。

時期：出土遺物から、4 区検出の水田址は概ね室町時代以降の構築と考えられる。



第 53 図　4 区水田層出土遺物実測図

５．５区の調査

５区は調査対象地南西部、E7 ～ J11 区に位置する。東西方向にやや長い長方形状をなし、調査面積は、約 307㎡である。５区からは、２区と同様に水田址と集落址を検出した。

（１）層　位（第 55 図、図版 35）

５区で確認した土層は、以下の 12 層（第１～８・10 ～ 13 層）である。このうち第 12・13 層は部分的な深掘りにより確認したものである。なお、第６層下面では流路（Ⓐ層）を検出している。

第 1 層：現表土層〔オリーブ灰色土（5GY 5/1)〕で、層厚は 10 ～ 18cmである。

第 2 層：灰オリーブ色土（5Y 6/2）で５区全域にて部分的にみられ、層厚は２～ 16cmである。

第 3 層：オリーブ黄色土（5Y 6/4）で５区全域にて部分的にみられ、層厚は２～ 10cmである。

第 4 層：灰色土（5Y 6/1）で５区全域にあり、層厚は８～ 20cmである。

第 5 層：黄褐色土（10YR 5/6）で５区全域にて部分的にみられ、層厚は２～ 12cmである。

第 6 層：灰黄褐色土（10YR 5/2）で５区東半部にみられ、層厚は６～ 20cmである。

第 7 層：灰色砂（10Y 5/1）を基調とし、灰白色粗砂（10Y 7/1）や褐色砂（10YR 4/6）で構成される。５区全域にみられ、層厚は６～ 30cmである。

第 8 層：微弱な土色・土質の違いにより、３層に分層される。本層は地下水の影響等により一部グライ化し、色調が青灰色をなす箇所が数箇所でみられた。

第８－①層：灰色粘質土（10Y 5/1）で５区全域にあり、層厚は８～ 18cmである。本層上面にて、畦畔や足跡を検出した。

第８－②層：灰色粘質土（10Y 6/1）で、土壌内にマンガン粒子を多量に含む。層厚は、６～ 20 cmである。

第８－③層：灰オリーブ色粘質土（5Y 6/2）で、層厚は４～ 14cmである。

第 10 層：褐灰色土（10YR 4/1）で５区全域にあり、層厚は６～ 15cmである。本層中からは土師器や須恵器、施釉陶器、陶磁器が出土している。

第 11 層：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）で５区全域にあり、最大厚は 30cmである。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。本層上面からは溝や土坑、柱穴を検出した。

第 12 層：褐色砂（10YR 4/6）で、最大層厚は 38cmである。

第 13 層：灰色粗砂（7.5Y 6/1）で、地表下約４ｍの地点（標高 1.8 ｍ）まで確認した。

Ⓐ 層：灰白色砂（10Y 8/1）で５区北東部にて検出した。検出状況から、北西－南東方向に流れる流路の一部と推測される。

（２）遺構と遺物

５区では、水田址と集落址を検出した。水田址からは畦畔５条と足跡 20,896 ケを検出し、集落址では溝２条、土坑３基、柱穴 96 基を検出している。遺物は水田土壌内より土師器や須恵器の破片が出土し、集落遺構や包含層中からは土師器や須恵器、瓦器、陶磁器等が出土した。

１）水田址の調査

５区では、地表下約 80cmの地点（標高 3.2 ～ 3.3 ｍ）にて水田址を検出した（第 55 図、図版 31・34)。水田址からは、畦畔や足跡を検出している。

① 畦　畔

畦畔 501（第 54 図・図版 35）

5 区中央部から北東部、G7 ～ J8 区で検出した大型の畦畔で、検出幅 1.8 ～ 3.2 m、高さは 5 ～ 20 ㎝である。5 区中央部を南北方向に向けて構築され、北壁付近では東に向かって「L」字状に折れ曲がる。畦畔は灰白色砂質土（10Y 7/1）や灰色砂質土（10Y 5/1）、褐色砂質土（10YR 4/4）、灰色微砂(5Y 6/1)を用いて作られている。なお､畦畔は水田土壌である第 8 －①層上面にて構築されている。

畦畔 502（第 54 図）

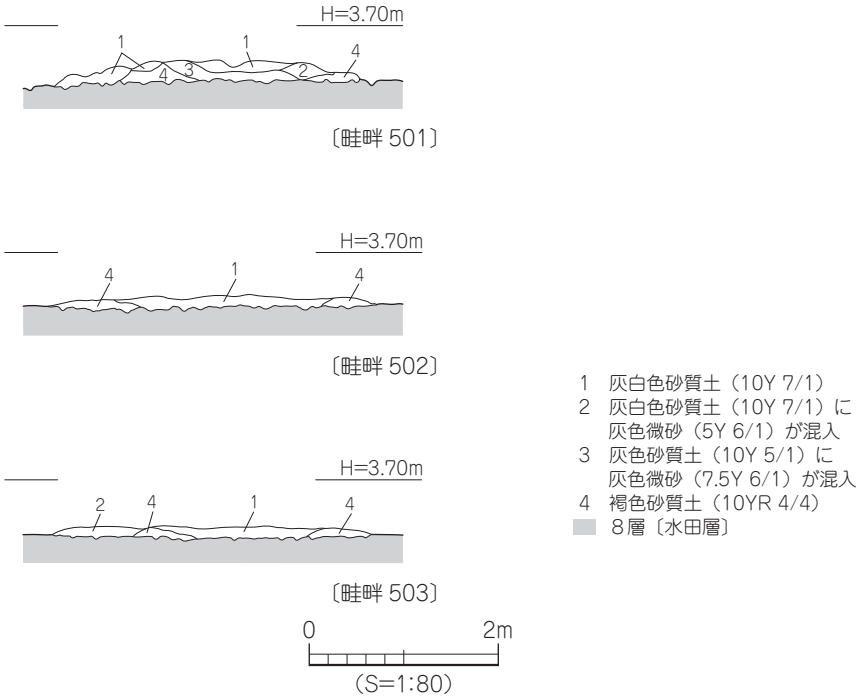
5 区南東部 H9 ～ J10 区で検出した大型畦畔で、東側は調査区外に続き、西側は途切れている。検出長 6.7 m、検出幅 3.0 ～ 3.4 m、高さは 6 ～ 10㎝である。畦畔は灰白色砂質土（10Y 7/1）と褐色砂質土（10YR 4/4）を用いて、第 8 －①層上面にて構築されている。

畦畔 503（第 54 図）

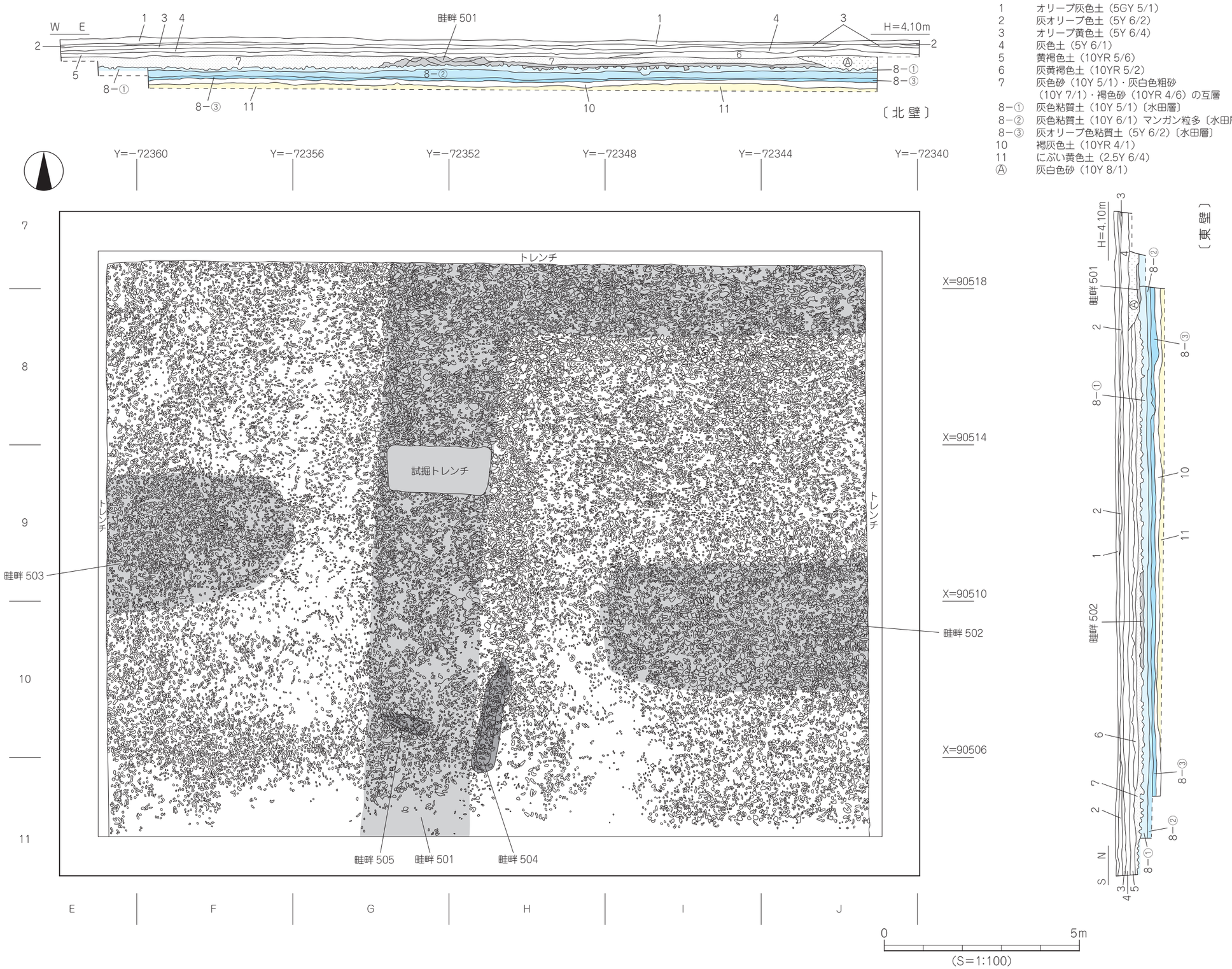
5 区西部 E9 ～ F10 区で検出した大型畦畔で、西側は調査区外に続き、東側は途切れている。検出長 4.7 m､検出幅 2.6 ～ 3.4 m､高さは 6 ～ 8㎝である。畦畔は灰白色砂質土（10Y 7/1）と灰色微砂（5Y 6/1)、褐色砂質土（10YR 4/4）を用いて、第 8 －①層上面にて構築されている。

畦畔 504（第 56 図）

5 区中央部南寄り H10・11 区で検出した南北方向の畦畔で、検出長 3.1 m、最大検出幅 0.62 m、高さは 2 ～ 3㎝である。畦畔は水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて、第 8 －①層上面にて構築されている。



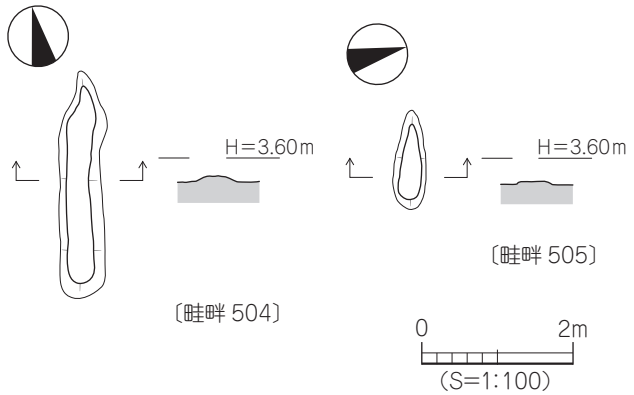
第 54 図　畦畔 501・502・503 断面図



第 55 図　5 区足跡等検出状況図、北壁・東壁土層図

畦畔 505（第 56 図）

5 区中央部南西寄り G10 区で検出した東西方向の畦畔で、検出長 1.3 m、検出最大幅 0.42 m、高さは約 2cmである。畦畔は水田土壌と同様の灰色粘質土（10Y 5/1）を用いて、第 8 －①層上面にて構築されている。



第 56 図　畦畔 504・505 測量図

② 足　跡

5 区で検出した足跡は 20,896 ケであり、このうち、牛と思われる足跡は 5,890 ケである。これらの足跡はすべて、第 7 層（灰色砂）で埋没している。なお、足跡は大型畦畔下面でも検出されている。足跡内からは土師器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。4 区と同様に検出した足跡数が極めて多く、発掘調査時は調査期間の都合上、足跡は全て完掘したわけではない。なお、足跡の平面測量はドローンを使用した空中写真測量を専門業者に委託した。

③ 水田層出土遺物（第 57 図、図版 37）

遺物は水田土壌中より、土師器や須恵器、陶磁器の破片が少量出土した。この中には、松山市内で出土例の極めて少ない『おろし皿（古瀬戸）』が含まれている。

256 は土師器の土鍋。口縁部片で、口縁部は短く外傾し、口縁端部はナデにより凹む。色調は外面が黒色、内面は暗褐色である。257 ～ 259 は東播系の須恵器擂鉢で、257・258 の口縁部は上内方に肥厚する。260 は古瀬戸のおろし皿で、内面には格子目状の線刻が施されている。須恵質で胎土は灰色をなし、内面には自然釉が付着する。261 は須恵器の坏蓋。つまみで、中央部が突出する。262 は龍泉窯系青磁碗。体部中位に圏線 1 条が巡り、胎土は灰色で、全面に濃緑色の釉が掛けられている。263 は白磁碗で、胎土は灰白色をなし、内外面には透明釉が掛けられている。264 は土師器の坏。円盤高台状の底部で、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は灰白色である。

時期：出土遺物より、5 区検出の水田址は概ね室町時代以降の構築と考えられる。

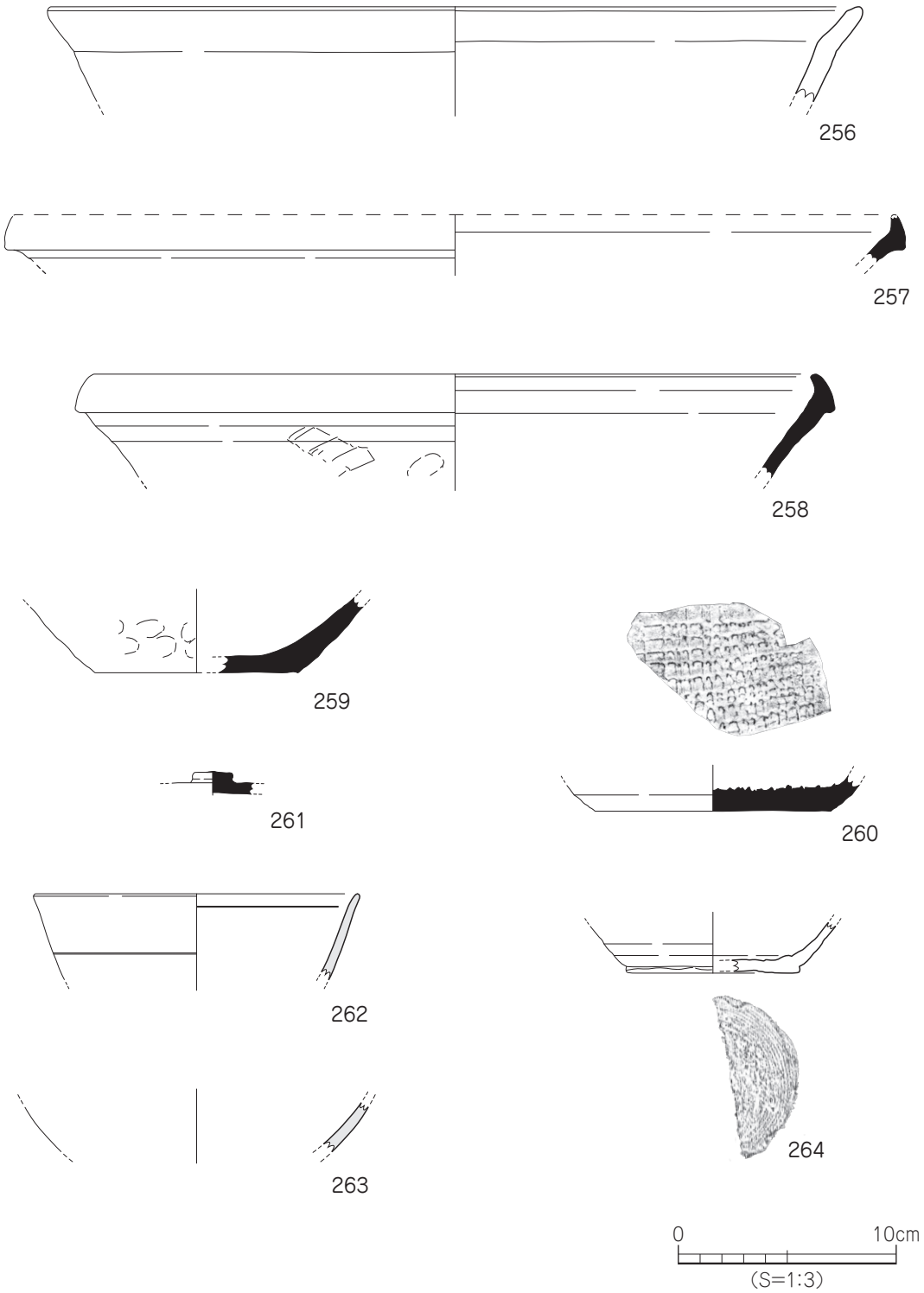
2）集落址の調査（第 58 図、図版 36）

水田址の下面、第 11 層上面（標高 2.9 ～ 3.0 m）にて集落址を検出した。検出した遺構は溝 2 条、土坑 3 基、柱穴 96 基である。

① 溝

SD501（第 59 図）

5 区南西部 F10 ～ H11 区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長 13.23 m、幅 1.35 ～ 2.41 mであり、最深部の深さは 17cmである。断面形態はレンズ状をなすが、溝北側にはテラス状の平坦部をもつ。埋土は、褐灰色土（10YR 4/1）単層である。溝内には水流の痕跡はなく空掘りの溝と思われ、溝の性格は土地を区画するための地割溝と考えられる。遺物は埋土中より土師器、須恵器、瓦器の破片のほかに灰釉陶器片などが出土した。



第 57 図　5 区水田層出土遺物実測図

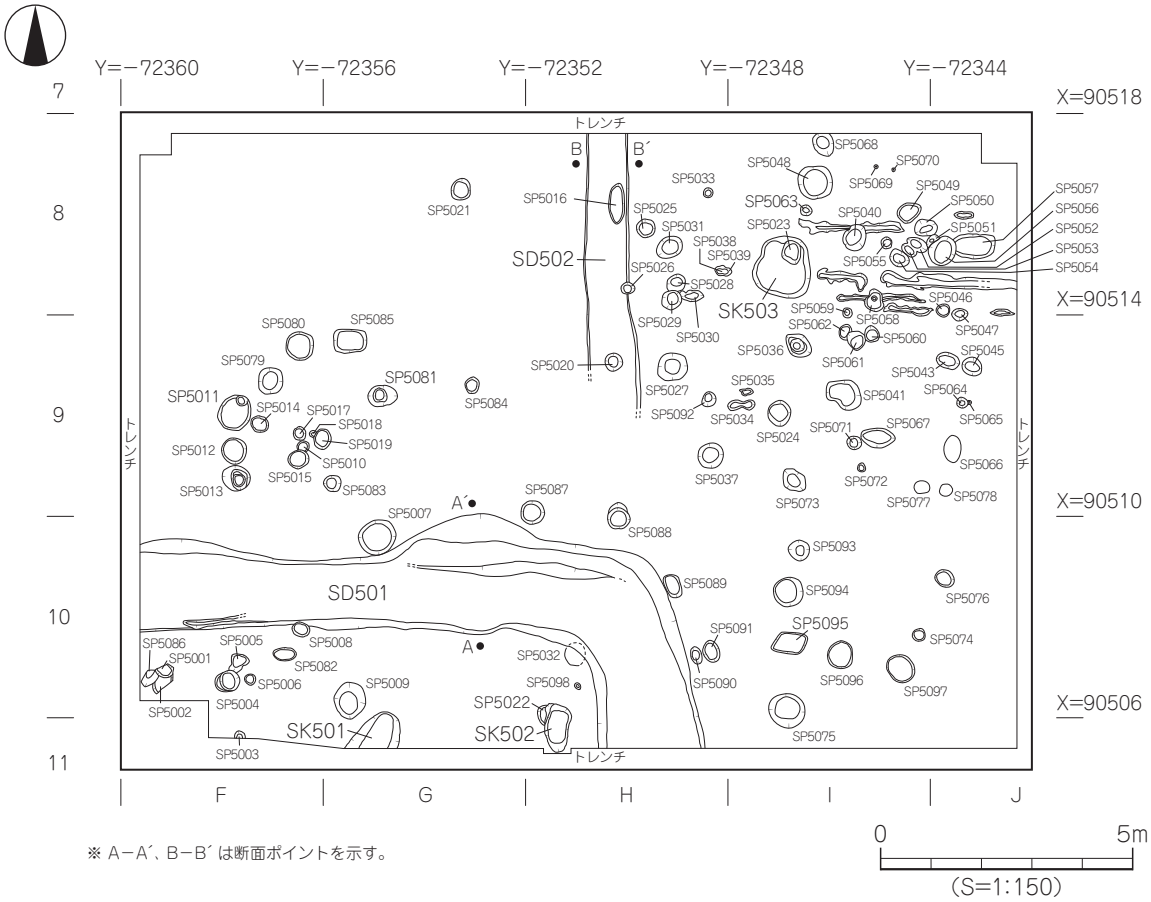
出土遺物（図版 37）

265 ～ 267 は土師器の椀。265 は円盤高台状の底部で、外面中央部は僅かに凹み、底部の切り離しは回転糸切り技法による。266 は断面三角形状の高台を貼付け、底部外面には回転糸切り痕が残る。265・266 共に、色調は灰白色である。267 は黒色土器の椀。底部外面には回転ヘラ切り痕が残り、色調は外面が灰褐色、内面は黒色である。268 は土師器の皿。体部は内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。色調は、内外面共に灰黄色である。269 は楠葉型の瓦器椀で、口縁部内面には沈線が巡る。内外面にはヨコ方向のヘラミガキを施し、色調は暗灰色である。270 は灰釉陶器の碗。蛇の目高台状の底部で、高台側面と底部内面には薄褐色の釉薬が残る。須恵質で、胎土は灰色である。京都産。271 は須恵器の高坏。脚部片で、脚柱部には回転カキメ調整がみられる。

時期：出土遺物の特徴より SD501 は平安時代後期から鎌倉時代、11 世紀から 13 世紀の溝と考えられる。

SD502（第 59 図）

5 区中央部北寄り H8・9 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は調査区外に続き、溝南端は消失している。規模は検出長 5.50 m、幅 0.84 ～ 0.98 m、深さは 6 ～ 8cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 4/1）単層である。溝の性格は SD501 と同様、地割溝と考えられる。遺物は埋土中より、土師器と瓦器の小片が少量出土した。



※ A−A′、B−B′ は断面ポイントを示す。

第 58 図　5 区遺構配置図

出土遺物

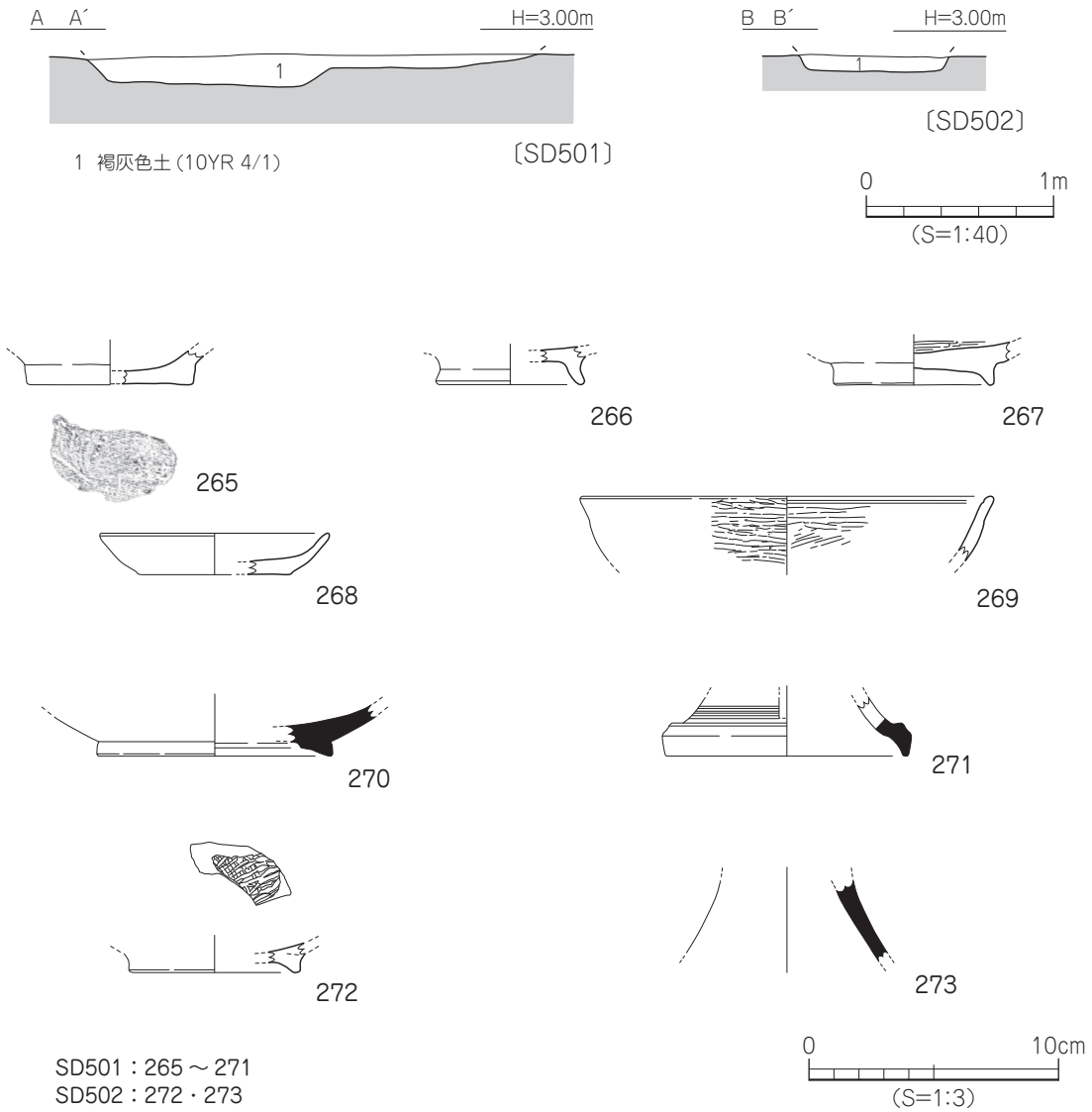
272 は瓦器椀の底部。断面台形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。色調は内外面共に暗灰色である。273 は須恵器高坏の脚部片で、長脚である。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土した瓦器椀の特徴より、概ね平安時代後期、11 世紀後半～ 12 世紀前半頃の溝と考えられる。

② 土坑

SK501（第 60 図）

5 区北東部 G10・11 区で検出した楕円形状の土坑で、規模は東西長 1.04 m、南北検出長 0.74 m、深さは 10㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）単層である。土坑内からは、土師器や瓦器の小片が少量出土したが、図化しうるものはない。



第 59 図　SD501・502 断面図・出土遺物実測図

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、埋土や出土遺物の特徴より、概ね平安時代後期の土坑と考えられる。

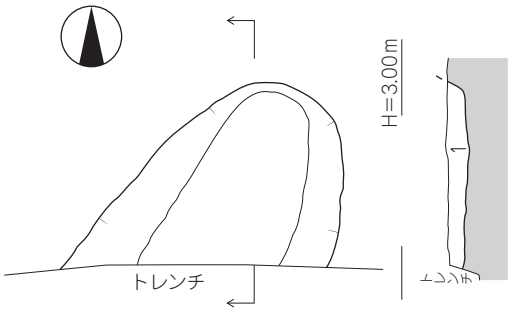
SK502（第 60 図）

5 区南西部 H10・11 区で検出した楕円形状の土坑で、規模は長径 0.92 m、短径 0.48 m、深さは 36cmである。断面形態は丸みのある逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）を基調とし、赤褐色砂（2.5YR 4/6）が北側基底面に堆積する。土坑内からは、土師器や須恵器の小片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、土坑埋土が SK501 と酷似することから、概ね平安時代後期の土坑と考えられる。

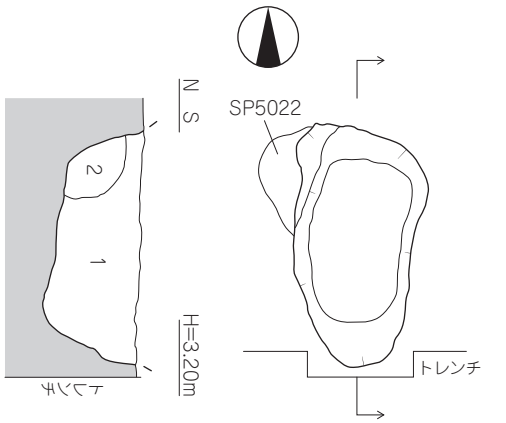
SK503（第 61 図）

5 区南西部 I8 区で検出した隅丸方形状の土坑で、規模は長径 1.20 m、短径 0.88 ～ 1.15 m、深さは 4cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 4/1）単層である。土坑基底面にて、柱穴 1 基（SP5023）を検出した。柱穴掘り方埋土は SK503 と同様の褐灰色土であることから、本土坑に伴う遺構の可能性が高い。土坑内からは土師器の小片が数点出土したほか、砥石片が出土した。



1　褐灰色土（7.5YR 4/1）

〔SK501〕



1　褐灰色土（7.5YR 4/1）
2　赤褐色砂（2.5YR 4/6）

〔SK502〕

0　1m
（S=1:30）

第 60 図　SK501・502 測量図

出土遺物

274 は土師器の皿。口縁部の小片で、色調は橙色である。275 は砥石。小片で、材質は砂岩である。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK501 と埋土が酷似することから、概ね平安時代後期の土坑と考えられる。

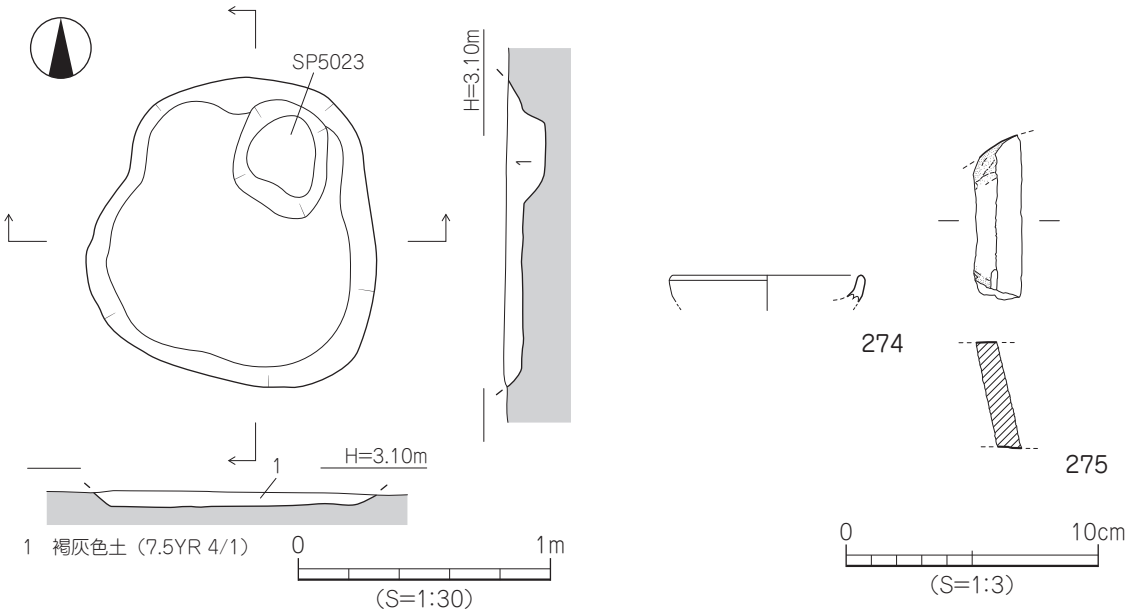
③ 柱　穴

5 区からは、96 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の 6 種類（1 ～ 6 類）となる。柱穴内からは土師器（平安時代～鎌倉時代）や須恵器（古墳時代～平安時代）、瓦器（平安時代～鎌倉時代）のほかに動物骨〔出土地点：SP5036（1 類）〕が出土した。

1 類：褐灰色土（7.5YR 4/1）：73 基

2 類：褐灰色土（7.5YR 4/1）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）がブロック状に混入：3 基

3 類：灰黄褐色土（10YR 6/2）：6 基



第 61 図　SK503 測量図・出土遺物実測図

4 類：灰色土（N5/）：11 基

5 類：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）に褐灰色土（7.5YR 4/1）がブロック状に混入：2 基

6 類：青灰色土（10BG 6/1）に褐灰色土（7.5YR 4/1）と灰色土（N5/）が混入：1 基

柱穴出土遺物（第 62 図、図版 37・38）

276 は SP5011（4 類）出土の須恵器坏蓋。擬宝珠状のつまみをもち、天井部外面には回転ヘラケズリを施す。奈良時代。277 は SP5022（2 類）、278 は SP5011 出土の須恵器坏。高台の付く坏で、277 は太めの高台が付く。278 は高台接地面が内傾する。奈良時代。279 は SP5095（1 類）出土の須恵器坏身。たちあがりは低く内傾し、色調は内外面共に赤褐色をなす（赤焼土器）。古墳時代後期後半。280 は SP5022 出土の須恵器瓿で、胴部上位に沈線 1 条が巡る。古墳時代後期後半。281 は SP5081（1 類）出土の須恵器甕。頸部片で沈線 2 条と沈線間に波状文を施す。7 世紀。282 は SP5081 出土の白磁碗。口縁部は短く外反し、胎土は灰白色をなし、内外面には透明釉が掛けられている。11 世紀。283 は SP5022 出土の土師器坏。底部片で、色調は橙色である。284 は SP5063（5 類）、285 が SP5022 出土の砥石である。破損品で、石材は砂岩を使用している。

④ 包含層・地点不明出土遺物

5 区では第 10 層や排水用に掘削したトレンチ内、及び重機の掘削時に土師器や須恵器、施釉陶器、陶磁器などが出土した（第 63 図、図版 38）。

ｉ）第 10 層出土遺物

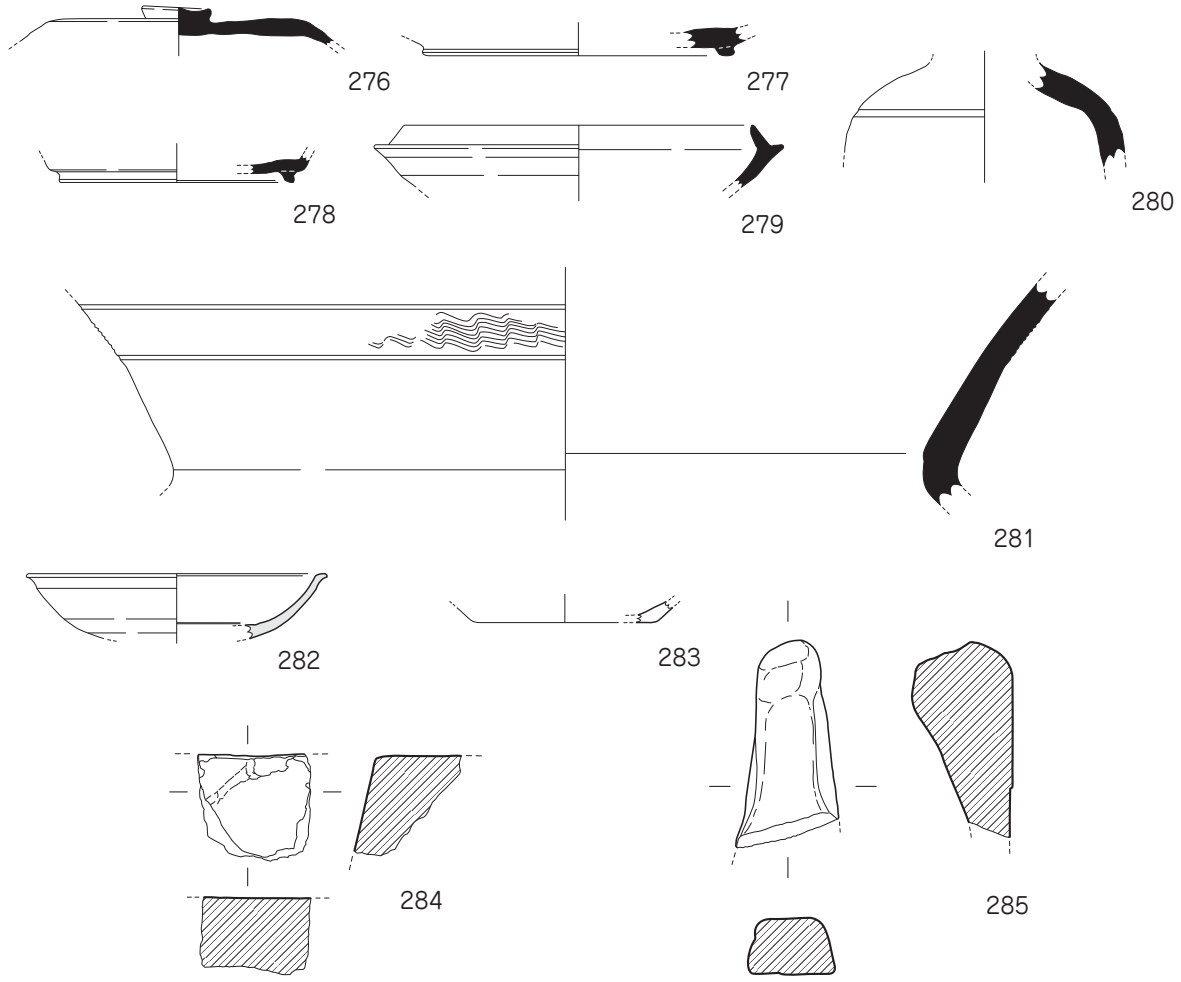
286 は土師器土鍋。口縁部中位に膨らみをもち、端面はナデ凹む。色調は褐色をなし、外面には煤が付着する。287 は土師器の椀。厚みのある円盤高台状の底部で、底部切り離しは摩滅の為、不明である。色調は内外面共に橙色である。288 は緑釉陶器。須恵質で胎土は灰色をなし、外面に薄緑色の釉薬が残存している。

ⅱ）トレンチ出土遺物

289 は土師器の土釜。口唇部は丸く、丸味のある断面三角形状の粘土紐を貼付けて鍔を形成している。色調は灰褐色をなし、口縁部外面に煤が付着する。平安時代後期。290 は土師器の椀。台形状の高台を貼付け、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は灰黄色である。平安時代後期。291 は土師器の皿。体部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは摩滅の為、不明である。色調は橙色である。平安時代後期。

ⅲ）地点不明出土遺物

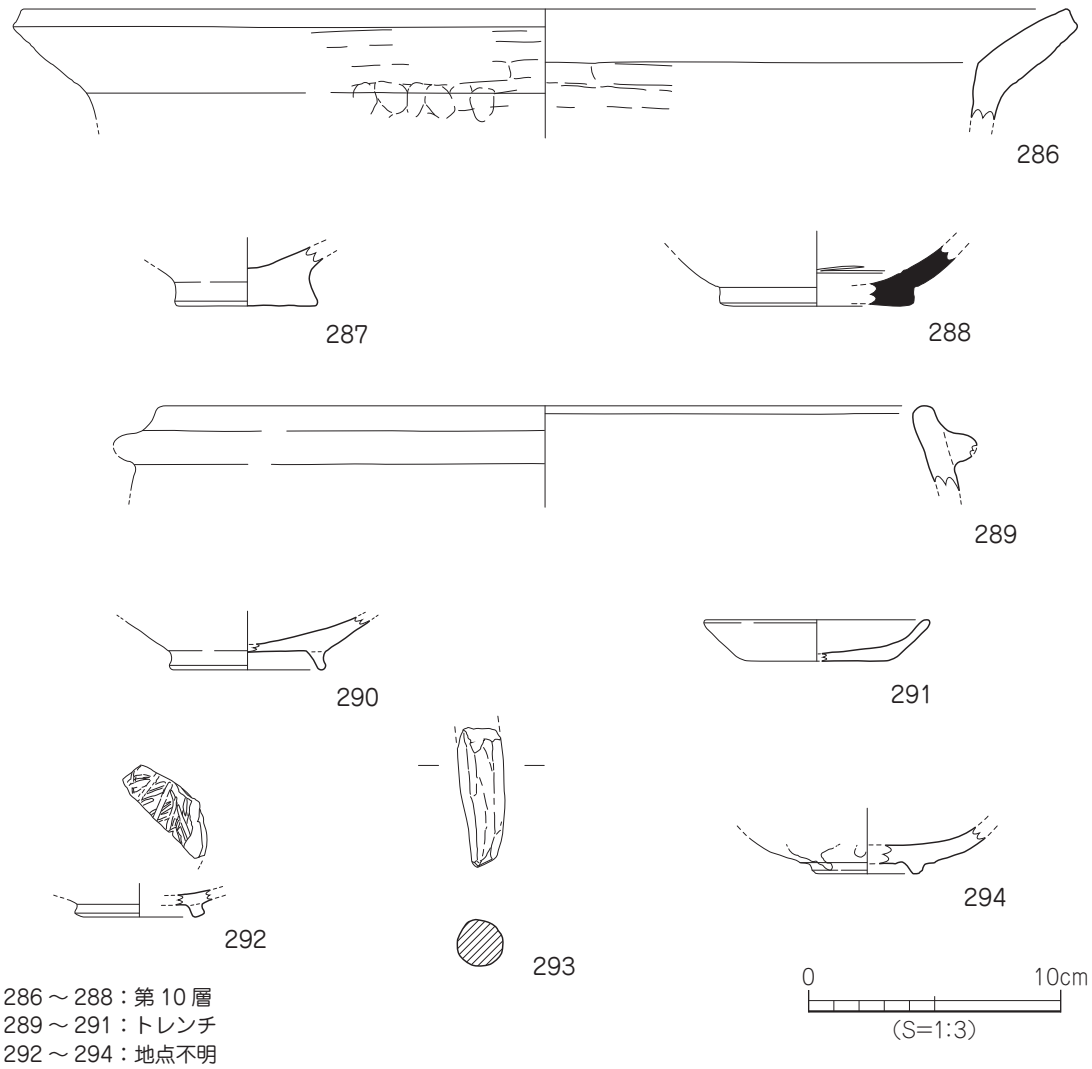
292 は瓦器椀の底部片で、断面方形状の高台を貼付け、内面には平行線状の暗文を施す。色調は内外面共に暗灰色である。平安時代後期。293 は土師器の土釜。脚部小片で、断面形態は円形をなし、脚部最大径は 2cmである。室町時代。294 は肥前系の陶器碗で、断面台形状の高台は削り出しにより形成される。胎土は黄褐色をなし、橙色の釉薬が部分的に掛けられている。江戸時代。



276・278：SP5011
277・280・283・285：SP5022
279：SP5095
281・282：SP5081
284：SP5063

0　10cm
（S=1:3）

第 62 図　5 区柱穴出土遺物実測図



第63図　5区包含層・地点不明出土遺物実測図

遺構一覧・遺物観察表　　－ 凡例 －

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（1）遺構一覧表

地　区　欄　グリッド名を記載。

平面形欄　〔　〕：推定形

規　模　欄　（　）：現存検出長、〔　〕：推定値、＜　＞：壁面で計測できる上端の数値。

出土遺物欄　遺物名称を略記した。

例）土→土師器、須→須恵器、瓦→瓦器、陶→陶磁器、石→石製品、鉄→鉄製品、木→木製品

（2）遺物観察表

法　量　欄　（　）：復元推定値

調　整　欄　土器の各部位名称を略記した。

例）天→天井部、つ→つまみ、口→口縁部、体→体部、胴→胴部、底→底部

胎　土　欄　胎土欄は混和剤を略記した。
例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤色土粒→赤色酸化土粒
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（1 ～ 2）→「1 ～ 2㎜大の石英・長石を含む」である。
焼　成　欄　焼成欄の略記について
◎→ 良好

表３　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	方　向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	R8 ～ S11	南北	レンズ状	(13.4) × 0.38 ～ 1.12 × 0.42	灰色粘質土	土・瓦・陶	室町時代以降	南端・北端とも調査区外に延びる SP2146 に切られる
301	L1 ～ M3	南北	レンズ状	(7.50) × 0.42 ～ 0.80 × 0.12 ～ 0.20	灰色砂	土	室町時代以降	北端は調査区外に延びる
302	M7･8	南北	レンズ状	4.66 × 0.46 ～ 0.80 × 0.08 ～ 0.12	灰色砂		室町時代以降	
501	F10 ～ H11	東西と南北	レンズ状	(13.23) × 1.35 ～ 2.41 × 0.02 ～ 0.17	褐灰色土	土・須・瓦・陶	11 ～ 13 世紀	西及び南端は調査区外へと延びる SP5008 に切られる
502	H8･9	南北	レンズ状	(5.50) × 0.84 ～ 0.98 × 0.06 ～ 0.08	褐灰色土	土・瓦	11 世紀後半～ 12 世紀前半	北端は調査区外へと延びる。SP5016・5020・5026 に切られる。

表４　掘立柱建物址一覧

掘立	地　区	方　位	規模（間）	桁行長（m）	梁行長（m）	床面積（㎡）	柱穴埋土	出土遺物	時　期	備　考
201	R・S8	南北	2 × 2 以上	3.59	(2.25)	(8.07)	灰黄褐色土 他	土・須・瓦・陶	13 世紀前半	
202	P8 ～ Q9	南北	2 × 2 以上	4.78	(4.38)	(20.93)	褐灰色土	土・須・瓦	13 世紀前半	

表５　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	Q･R9	楕円形	レンズ状	1.55 ×〔0.68〕× (0.11)	褐灰色土	土・瓦	11 ～ 12 世紀	SP2074 に切られる
202	P･Q9	楕円形	逆台形状	2.25 ×〔1.05〕× 0.34	褐灰色土 他	土・瓦・陶	12 世紀	炭化物層と敷石あり SK209、SP2053・2206 に切られる
203	P･Q11	楕円形	逆台形状	2.17 × (0.60) × 0.08	褐灰色土	土	11 ～ 12 世紀	南側は調査区外に延びる
204	Q9	不整楕円形	レンズ状	1.44 × 0.76 × (0.06)	褐灰色土	土・瓦・鉄	11 ～ 12 世紀	
205	P8･9	不整楕円形	レンズ状	1.30 × 0.60 × 0.10	褐灰色土	土・須	11 ～ 12 世紀	
206	S9	不整形	皿状	1.38 × 0.85 × 0.10	褐灰色土	土	11 ～ 12 世紀	SD201 に切られる SP2201 を切る
207	P10	〔楕円形〕	皿状	(0.57) × 0.66 × 0.05	淡黄色土	土	11 ～ 12 世紀	西側は調査区外に延びる
208	S10	楕円形	皿状	1.02 × 0.48 × 0.05	灰色土	土	11 ～ 12 世紀	
209	Q9	〔楕円形〕	逆台形状	1.71 ×〔0.80〕× 0.22	褐灰色土	土・須	12 世紀	貼床あり SK202 を切る
501	G10･11	〔楕円形〕	逆台形状	1.04 × (0.74) × 0.10	褐灰色土	土・瓦	平安時代後期	
502	H10･11	楕円形	逆台形状	0.92 × 0.48 × 0.36	褐灰色土（赤褐色砂の混交）	土・須	平安時代後期	SP5022 を切る
503	I8	隅丸方形	皿状	1.20 × 0.88 ～ 1.15 × 0.04	褐灰色土	土・石	平安時代後期	SP5023 に切られる

表６　井戸址一覧

井戸（ＳＥ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	Q10	楕円形 下層部は方形	逆台形状	2.27 × 2.18 × 0.93	青灰色土 他	土･須･瓦･陶･石・木・鉄	11 ～ 13 世紀	SP2110・2196 に切られる
202	P9･10	楕円形	逆台形状	2.18 × 1.95 × 0.56	暗灰色土 他	土・須・瓦	11 ～ 13 世紀	SP2179 に切られる

表７　柱穴一覧　（１）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2001	P8	円形	0.18 × 0.18 × 0.10	褐灰色土	須	
2002	P8	〔楕円形〕	（0.53）× 0.39 × 0.43	褐灰色土		掘立 202
2003	P8	〔円形〕	〔0.40〕×（0.15）× ―	褐灰色土	土	北壁際トレンチ内
2004	P8	〔円形〕	0.27 ×〔0.27〕× 0.08	褐灰色土	土	SP2007 に切られる
2005	Q8	〔円形〕	0.16 ×〔0.16〕× 0.05	褐灰色土		SP2006 に切られる
2006	P・Q8	楕円形	0.56 × 0.39 × 0.39	褐灰色土		掘立 2 SP2005 を切る
2007	P8	〔円形〕	0.24 ×〔0.24〕× 0.17	褐灰色土		SP2004 を切る
2008	P8	―	＜ 0.48 ＞×（0.11：深さ）	褐灰色土		西壁内
2009	P8	不整楕円形	0.40 × 0.31 × 0.25	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2010	P8	〔円形〕	0.40 ×（0.12）× 0.12	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2011	P8	楕円形	0.40 × 0.28 × 0.16	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2012	P8	〔円形〕	0.20 ×（0.10）× 0.21	褐灰色土	土	SP2013 に切られる
2013	P8	不整楕円形	0.41 × 0.38 × 0.22	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		掘立 202 SP2012 を切る
2014	P・Q8	楕円形	0.48 × 0.40 × 0.43	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		掘立 202
2015	P8・9	〔円形〕	0.35 ×〔0.35〕× 0.11	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土・須・石	
2016	P8・9	〔円形〕	0.51 ×〔0.47〕× 0.19	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2017	Q8	〔楕円形〕	〔0.17〕× 0.10 × 0.10	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2018	Q8	円形	0.16 ×〔0.16〕× 0.10	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2019	Q8	〔円形〕	0.35 ×〔0.35〕× 0.10	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2020	Q8	〔円形〕	―	にぶい黄色土に褐灰色土がブロック状に混入		検出のみ
2021	Q8	〔円形〕	0.40 ×〔0.40〕× 0.05	褐灰色土		SP2022・2023 に切られる
2022	Q8	〔楕円形〕	〔0.50〕× 0.42 × 0.08	褐灰色土	土	SP2021 を切る SP2023 に切られる
2023	Q8	円形	0.48 × 0.46 × 0.32	褐灰色土	土・炭	SP2021・2022 を切る
2024	Q8	円形	0.28 × 0.27 × 0.39	褐灰色土		掘立 202
2025	Q8	円形	0.25 × 0.25 × 0.16	褐灰色土	土	
2026	Q8	楕円形	0.28 × 0.22 × 0.15	灰色土		
2027	Q8	楕円形	0.59 × 0.48 × 0.44	褐灰色土		掘立 202
2028	Q8	〔円形〕	〔0.20〕× 0.20 × 0.05	褐灰色土	土	SP2029 に切られる

柱穴一覧 （2）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2029	Q8・9	〔円形〕	0.34 × 0.32 × 0.28	褐灰色土	土・須	SP2028 を切る
2030	R8	円形	0.38 × 0.35 × 0.40	褐灰色土	土・須	
2031	R8	〔円形〕	0.43 ×〔0.32〕×（0.23）	灰色土	土	SP2032 に切られる
2032	R8	円形	0.45 × 0.37 × 0.29	灰色土		掘立 201 SP2031 を切る
2033	R8	円形	0.21 × 0.20 × 0.09	褐灰色土		
2034	R8	〔円形〕	0.35 ×〔0.30〕×（0.19）	灰色土		SP2036 に切られる
2035	R8	〔円形〕	0.30 ×〔0.30〕×（0.19）	灰黄褐色土		SP2036 に切られる
2036	R8	楕円形	0.42 × 0.29 × 0.24	灰黄褐色土		掘立 201 SP2034・2035 を切る
2037	R8・9	円形	0.33 × 0.32 × 0.18	灰色土		
2038	R8	円形	0.33 × 0.30 × 0.17	灰黄褐色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		掘立 201
2039	R8・9	〔円形〕	0.18 ×〔0.18〕× 0.22	褐灰色土	土	SP2040 に切られる
2040	R8・9	〔楕円形〕	〔0.33〕× 0.26 × 0.23	灰色土	土	SP2039 を切る
2041	S8	〔円形〕	0.39 ×〔0.35〕×（0.12）	灰色土		SP2042 に切られる
2042	S8	円形	0.47 × 0.44 × 0.44	灰黄褐色土	土	掘立 201 SP2041 を切る
2043	S8	円形	0.75 × 0.62 × 0.07	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2044	S8	円形	0.28 × 0.28 × 0.16	灰色土		掘立 201
2045	S8・9	〔楕円形〕	〔0.24〕× 0.15 × 0.06	灰色土		
2046	S8・9	〔円形〕	0.28 ×〔0.28〕× 0.20	灰色土	石	
2047	S8・9	円形	0.19 × 0.17 × 0.18	褐灰色土	土	
2048	P9	—	＜ 0.40 ＞× 0.13：深さ	灰色土		西壁内
2049	P9	円形	0.37 × 0.35 × 0.21	灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2050	P9	円形	0.18 × 0.18 × 0.08	灰色土		
2051	P9	楕円形	0.65 × 0.44 × 0.46	褐灰色土	木	掘立 202
2052	P9	〔楕円形〕	—	褐灰色土	土	検出のみ
2053	P・Q9	不整楕円形	0.56 × 0.38 × 0.31	褐灰色土	土・須・瓦	掘立 202 SK202 を切る
2054	P9	—	＜ 0.33 ＞× 0.06：深さ	灰色土		西壁内
2055	P9	円形	0.23 × 0.23 × 0.13	灰色土	土	
2056	Q8・9	円形	0.28 × 0.27 × 0.43	褐灰色土	土・炭	
2057	Q9	円形	0.32 × 0.29 × 0.36	褐灰色土	土	
2058	Q9	円形	0.21 × 0.20 × 0.07	褐灰色土	土	
2059	Q9	円形	0.41 × 0.39 × 0.42	褐灰色土		掘立 202
2060	Q9	円形	0.22 × 0.17 × 0.08	灰色土	土	

柱穴一覧 （3）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2061	Q9	〔不整円形〕	（0.22）×（0.10）×（0.19）	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土・須・瓦	
2062	Q9	〔楕円形〕	0.48 × 0.30 × 0.35	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2063	Q9	円形	0.22 × 0.21 × 0.08	褐灰色土		
2064	Q9	〔楕円形〕	〔0.34〕× 0.26 × 0.29	灰色土	土	SP2065 を切る
2065	Q9	〔楕円形〕	〔0.28〕× 0.22 × 0.22	灰色土		SP2064 に切られる
2066	Q9	楕円形	0.21 × 0.14 × 0.17	褐灰色土	土	
2067	R9	円形	0.23 × 0.23 × 0.19	灰色土		
2068	Q・R9	円形	0.29 × 0.27 × 0.15	灰色土	土	
2069	R9	楕円形	0.20 × 0.13 × 0.07	灰色土		
2070	R9	円形	0.40 × 0.34 × 0.12	灰色土		
2071	R9	楕円形	0.52 × 0.41 × 0.18	褐灰色土	土	
2072	R9	円形	0.17 × 0.14 × 0.10	褐灰色土		
2073	R9	円形	0.19 × 0.17 × 0.06	灰色土	土	
2074	R9	楕円形	0.53 × 0.37 × 0.03	灰色土		SK201 を切る
2075	R9	円形	0.22 × 0.21 × 0.26	褐灰色土	土	
2076	R9	〔円形〕	〔0.28〕× 0.25 × 0.41	褐灰色土		SP2077 に切られる
2077	R9	〔楕円形〕	0.33 ×〔0.20〕× 0.15	灰色土	土	SP2076 を切る
2078	R9	楕円形	0.19 × 0.14 × 0.08	灰色土		
2079	R9	円形	0.31 × 0.27 × 0.07	灰色土		
2080	R9	楕円形	0.27 × 0.19 × 0.17	褐灰色土	土・石	
2081	R9	円形	0.20 × 0.16 × 0.25	灰色土		
2082	R9	円形	0.38 × 0.33 × 0.17	灰色土	土・瓦	SP2197 を切る
2083	S9	円形	0.28 × 0.27 × 0.08	灰色土		
2084	S9	不整楕円形	0.38 × 0.19 × 0.05	灰色土	土・瓦	
2085	S9	円形	0.22 × 0.19 × 0.08	褐灰色土		
2086	S9	円形	0.37 × 0.32 × 0.18	褐灰色土		
2087	S・T9	円形	0.21 × 0.18 × 0.10	褐灰色土		
2088	S9	円形	0.36 × 0.34 × 0.15	にぶい黄色土に褐灰色土がブロック状に混入	土・須	
2089	S9	円形	0.35 × 0.32 × 0.20	褐灰色土	土	
2090	S9	〔円形〕	0.32 ×〔0.31〕× 0.21	褐灰色土	土	
2091	S9	円形	0.22 × 0.22 × 0.16	褐灰色土	土	
2092	S9	円形	0.26 × 0.23 × 0.07	灰黄褐色土		

柱穴一覧 （4）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2093	T9	円形	0.33 × 0.30 × 0.24	褐灰色土	土	
2094	P10	楕円形	0.55 × 0.47 × 0.11	灰色土	土	
2095	P10	円形	0.18 × 0.17 × 0.07	褐灰色土		
2096	P10	〔不整形〕	0.20 ×〔0.13〕× 0.04	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2097	P10	〔円形〕	0.20 × 0.20 × 0.14	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2098	P10	〔円形〕	0.20 ×〔0.18〕× 0.21	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2099	P10	不整円形	0.45 × 0.45 × 0.14	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2100	P10	円形	0.32 × 0.24 × 0.07	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2101	P10	〔不整楕円形〕	（0.43）×（0.18）× 0.14	灰色土	土	
2102	P10	円形	0.38 × 0.28 × 0.09	褐灰色土		
2103	Q10	〔円形〕	0.20 ×〔0.20〕× 0.09	褐灰色土		SP2108 を切る
2104	Q10	円形	0.24 × 0.24 × 0.09	褐灰色土		
2105	Q10	円形	0.30 × 0.25 × 0.11	褐灰色土		
2106	Q10	楕円形	0.30 × 0.24 × 0.24	褐灰色土		
2107	Q10	楕円形	0.23 × 0.17 × 0.11	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2108	Q10	〔円形〕	0.41 × 0.37 × 0.27	褐灰色土		SP2103 に切られる
2109	Q10	楕円形	0.34 × 0.26 × 0.07	褐灰色土		
2110	Q10	円形	0.25 × 0.21 × 0.12	褐灰色土		SE201 を切る
2111	Q10	円形	0.35 × 0.31 × 0.12	褐灰色土	土	
2112	Q10	楕円形	0.28 × 0.18 × 0.08	褐灰色土		
2113	Q10	不整円形	0.55 × 0.54 × 0.10	褐灰色土	土	
2114	Q10	楕円形	0.28 × 0.24 × 0.09	褐灰色土	土	
2115	R10	円形	0.23 × 0.22 × 0.09	灰色土	土	
2116	R10	楕円形	0.11 × 0.07 × 0.05	灰色土		
2117	R10	〔円形〕	0.16 ×〔0.15〕× 0.07	灰色土	土・須	SP2118 を切る
2118	R10	〔楕円形〕	〔0.24〕× 0.11 × 0.10	灰色土		SP2117 に切られる
2119	R10	〔楕円形〕	〔0.10〕× 0.07 × 0.10	灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2120	R10	〔楕円形〕	〔0.17〕× 0.14 × 0.11	灰色土		
2121	R10	不整円形	0.35 × 0.31 × 0.30	灰色土	土	
2122	R10	不整楕円形	0.25 × 0.20 × 0.13	灰色土	土	
2123	R10	楕円形	0.21 × 0.16 × 0.12	灰色土		
2124	R10	〔楕円形〕	〔0.18〕× 0.14 × 0.12	灰色土		

柱穴一覧　（5）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2125	R10	楕円形	0.20 ×〔0.19〕× 0.10	灰色土		
2126	R10	不整円形	0.16 × 0.15 × 0.02	褐灰色土		
2127	R10	円形	0.25 × 0.25 × 0.25	褐灰色土	土	
2128	R10	円形	0.15 × 0.15 × 0.11	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2129	R10	〔円形〕	—	褐灰色土	土	検出のみ
2130	R10	〔円形〕	—	褐灰色土		検出のみ
2131	R10	円形	0.20 × 0.19 × 0.10	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
2132	R10	〔楕円形〕	0.31 ×〔0.26〕× 0.09	褐灰色土	土	
2133	R10	〔楕円形〕	〔0.48〕×〔0.32〕× 0.21	褐灰色土		
2134	R10	不整楕円形	0.47 × 0.20 × 0.07	褐灰色土		
2135	R10	楕円形	0.42 × 0.27 × 0.11	灰色土		
2136	R10・11	楕円形	0.53 × 0.36 × 0.24	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2137	S10	円形	0.29 × 0.29 × 0.12	灰黄褐色土		
2138	S10	円形	0.15 × 0.13 × 0.13	灰黄褐色土	土・鉄	
2139	S・T10	円形	0.35 × 0.35 × 0.23	灰色土		
2140	S10	円形	0.32 × 0.27 × 0.27	灰黄褐色土	土	
2141	S10	楕円形	0.23 × 0.16 × 0.11	灰黄褐色土		
2142	S10	〔楕円形〕	0.27 ×〔0.18〕× 0.28	褐灰色土	土	SP2143 に切られる
2143	S10	〔楕円形〕	0.50 × 0.41 × 0.17	灰色土	土	SP2142 を切る
2144	S10	楕円形	0.35 × 0.27 × 0.18	灰色土		
2145	S10	円形	0.19 × 0.13 × 0.11	灰黄褐色土		
2146	S10	楕円形	0.31 × 0.29 × 0.19	灰色土		SD201 を切る
2147	S10	〔円形〕	—	灰色土		検出のみ
2148	S10・11	〔円形〕	0.39 ×〔0.39〕× 0.29	褐灰色土		
2149	S10・11	〔円形〕	0.26 ×〔0.24〕× 0.14	灰色土	土・瓦	
2150	T10	円形	0.18 × 0.14 × 0.18	灰色土	土	
2151	P11	—	＜ 0.34 ＞× 0.19：深さ	灰色土		西壁内
2152	P10・11	円形	0.24 × 0.20 × 0.19	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
2153	Q11	円形	0.27 × 0.26 × 0.24	褐灰色土	瓦	
2154	Q11	円形	0.21 × 0.20 × 0.26	灰色土	土・瓦	
2155	R11	〔円形〕	—	灰色土		検出のみ
2156	R11	楕円形	0.20 × 0.15 × 0.06	褐灰色土	土	

柱穴一覧 （6）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2157	R11	円形	0.36 × 0.30 × 0.16	灰色土	土	SP2190 を切る
2158	R11	〔円形〕	0.36 ×〔0.21〕× 0.23	灰色土	土	
2159	S11	〔円形〕	0.26 ×〔0.26〕× 0.13	褐灰色土		SP2160 に切られる
2160	S11	〔円形〕	0.26 ×〔0.26〕× 0.13	褐灰色土	土	SP2159 を切る
2161	S11	円形	0.44 × 0.42 × 0.15	灰黄褐色土	土	
2162	S・T11	円形	0.38 × 0.35 × 0.09	灰黄褐色土	石	
2163	S8	―	＜ 0.50 ＞× 0.15：深さ	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		北壁内
2164	S8	―	＜ 0.25 ＞× 0.07：深さ	褐灰色土		北壁内
2165	S11	―	＜ 0.20 ＞× 0.08：深さ	褐灰色土		南壁内
2166	S11	―	＜ 0.33 ＞× 0.08：深さ	褐灰色土		南壁内
2167	S11	―	＜ 0.32 ＞× 0.10：深さ	褐灰色土		南壁内
2168	R11	―	＜ 0.35 ＞× 0.15：深さ	褐灰色土		南壁内
2169	R11	―	＜ 0.25 ＞× 0.08：深さ	褐灰色土		南壁内
2170	Q11	―	＜ 0.40 ＞× 0.07：深さ	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		南壁内
2171	Q11	―	＜ 0.68 ＞× 0.08：深さ	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		南壁内
2172	R8	円形	0.12 × 0.13 × 0.29	灰色土	土	
2173	Q8	円形	0.18 × 0.14 × 0.13	灰色土	土	
2174	S11	〔円形〕	0.39 ×（0.14）× 0.12	褐灰色土		
2175	P8	円形	0.26 × 0.24 × 0.12	褐灰色土	土	
2176	P8	円形	0.36 × 0.34 × 0.10	褐灰色土		
2177	R8	円形	0.26 × 0.25 × 0.08	褐灰色土		
2178	R8	円形	0.25 × 0.24 × 0.05	灰色土		
2179	P10	円形	0.20 × 0.19 × 0.12	灰色土	土	SE202 を切る
2180	R9	楕円形	0.16 × 0.12 × 0.05	灰色土		
2181	R9	楕円形	0.29 × 0.19 × 0.12	灰色土		
2182	R・S9	楕円形	0.19 × 0.15 × 0.10	灰色土		
2183	P10	楕円形	0.48 × 0.35 × 0.26	青灰色土に褐灰色土と灰色土が混入	土・須	
2184	Q11	楕円形	0.25 × 0.20 × 0.14	灰色土		
2185	Q11	円形	0.20 × 0.17 × 0.05	灰色土		
2186	Q9・10	不整楕円形	0.28 × 0.20 × 0.07	灰色土	土	
2187	Q10	円形	0.18 × 0.15 × 0.12	灰色土	土	
2188	R10	不整円形	0.18 × 0.18 × 0.08	褐灰色土		

柱穴一覧 （7）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
2189	S11	円形	0.18 × 0.14 × 0.12	灰色土		
2190	R11	円形	0.58 × 0.48 × 0.20	褐灰色土		SP2157 に切られる
2191	P11	円形	0.26 × 0.05 × 0.09	褐灰色土	土	
2192	P10	不整楕円形	0.45 × 0.28 × 0.23	灰色土		
2193	R8	円形	0.28 × 0.27 × 0.17	灰黄褐色土		
2194	R・S9	楕円形	0.57 × 0.48 × 0.24	灰色土		
2195	S11	円形	0.16 × 0.13 × 0.14	灰黄褐色土		
2196	Q10	円形	0.24 × 0.21 × 0.23	褐灰色土	土	SE201 を切る
2197	R9	円形	0.10 ×〔0.10〕× 0.07	灰色土		SP2082 に切られる
2198	R9	円形	0.11 × 0.09 × 0.09	褐灰色土	土	
2199	Q8	楕円形	0.18 × 0.11 × 0.06	褐灰色土		
2200	P9	不整円形	0.22 × 0.15 × 0.06	灰色土	土	
2201	S9	〔円形〕	0.42 ×（0.12）× 0.11	灰色土		SK206 に切られる
2202	R8	楕円形	0.27 × 0.19 × 0.16	灰色土	土	
2203	R9	隅丸長方形	0.28 × 0.19 × 0.16	灰色土	土	
2204	Q11	楕円形	0.22 × 0.15 × 0.06	灰色土		
2205	P9	円形	0.21 × 0.20	灰色土		
2206	Q9	円形	0.33 × 0.32 × 0.12	灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		SK202 を切る
2207	P10	不整円形	0.14 × 0.13 × 0.04	灰色土		
2208	P10	不整楕円形	0.19 × 0.15 × 0.06	灰色土		
2209	R10	円形	0.07 × 0.06 × 0.04	灰色土		
5001	F10	〔楕円形〕	〔0.45〕× 0.29 × 0.21	褐灰色土		SP5002・5086 を切る
5002	F10	〔楕円形〕	〔0.55〕× 0.42 × 0.03	灰黄褐色土		SP5001・5086 に切られる
5003	F11	〔円形〕	0.19 ×〔0.19〕× 0.18	褐灰色土		
5004	F10	円形	0.47 × 0.40 × 0.29	灰黄褐色土	瓦	SP5005 を切る
5005	F10	不整楕円形	0.41 × 0.35 × 0.23	灰黄褐色土	土	SP5004 に切られる
5006	F10	円形	0.23 × 0.23 × 0.18	灰黄褐色土		
5007	G10	円形	0.77 × 0.68 × 0.12	褐灰色土		
5008	F10	円形	0.32 × 0.25 × 0.12	褐灰色土	土	SD501 を切る
5009	G10	円形	0.71 × 0.39 × 0.42	褐灰色土		
5010	F9	〔円形〕	0.24 ×〔0.21〕× 0.07	褐灰色土		SP5015 に切られる
5011	F9	楕円形	0.72 × 0.58 × 0.33	灰色土	須	

柱穴一覧 （8）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
5012	F9	円形	0.53 × 0.50 × 0.14	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入	土	
5013	F9	円形	0.55 × 0.49 × 0.21	褐灰色土		
5014	F9	円形	0.38 × 0.31	褐灰色土		
5015	F9	円形	0.41 × 0.34 × 0.10	褐灰色土	土	SP5010 を切る
5016	H8	楕円形	0.80 × 0.33 × 0.02	褐灰色土		SD502 を切る
5017	F9	円形	0.26 × 0.24 × 0.08	褐灰色土		
5018	F9	〔楕円形〕	〔0.24〕 × 0.14 × 0.03	褐灰色土		SP5019 に切られる
5019	F・G9	〔楕円形〕	0.41 ×〔0.30〕× 0.07	褐灰色土	土	SP5018 を切る
5020	H9	円形	0.36 × 0.35 × 0.19	褐灰色土	瓦	SD502 を切る
5021	G8	円形	0.40 × 0.35 × 0.10	灰色土		
5022	H10・11	〔円形〕	0.42 ×〔0.40〕× 0.19	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		SK502 に切られる
5023	I8	円形	0.42 × 0.36 × 0.16	褐灰色土		SK503 を切る
5024	I9	円形	0.49 × 0.47 × 0.07	褐灰色土		
5025	H8	円形	0.36 × 0.34 × 0.18	褐灰色土	土	
5026	H8	円形	0.25 × 0.23 × 0.09	褐灰色土		SD502 を切る
5027	H9	円形	0.56 × 0.52 × 0.12	褐灰色土	土	
5028	H8	〔円形〕	0.36 × 0.32 × 0.07	褐灰色土		SP5029 に切られる
5029	H8	円形	0.40 × 0.36 × 0.08	褐灰色土		SP5028・5030 を切る
5030	H8	〔不整楕円形〕	0.48 × 0.23 × 0.06	褐灰色土	土	SP5029 に切られる
5031	H8	円形	0.53 × 0.42 × 0.22	褐灰色土	土	
5032	H10	〔円形〕	—	褐灰色土		検出のみ
5033	H8	円形	0.18 × 0.16 × 0.08	褐灰色土		
5034	I9	不整楕円形	0.54 × 0.19 × 0.05	褐灰色土		
5035	I9	不整楕円形	0.30 × 0.14 × 0.04	褐灰色土		
5036	I9	楕円形	0.56 × 0.39 × 0.10	褐灰色土	骨	
5037	H9	円形	0.48 × 0.48 × 0.18	灰黄褐色土	土	
5038	H8	〔円形〕	〔0.22〕 × 0.20 × 0.05	褐灰色土	土	SP5039 を切る
5039	H・I8	〔円形〕	0.16 ×〔0.15〕× 0.03	褐灰色土		SP5038 に切られる
5040	I8	円形	0.51 × 0.41 × 0.23	褐灰色土	土・須	鋤址を切る
5041	I9	不整円形	0.75 × 0.51 × 0.06	灰色土	土	
5042	欠　番					
5043	J9	楕円形	0.47 × 0.30 × 0.11	灰色土		

柱穴一覧 （9）

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
5044	欠　番					
5045	J9	円形	0.38 × 0.35 × 0.14	灰色土	土	
5046	J8・9	円形	0.27 × 0.27 × 0.11	褐灰色土	土	
5047	J8・9	円形	0.28 × 0.25 × 0.11	褐灰色土		
5048	I8	円形	0.66 × 0.64 × 0.17	褐灰色土		
5049	I8	円形	0.49 × 0.38 × 0.06	にぶい黄色土に褐灰色土がブロック状に混入		
5050	I・J8	円形	0.43 × 0.33 × 0.04	褐灰色土		
5051	I・J8	〔楕円形〕	0.27 ×〔0.14〕× 0.12	褐灰色土	土	SP5056 に切られる
5052	I8	〔楕円形〕	0.41 ×〔0.20〕× 0.04	褐灰色土		
5053	I8	〔円形〕	0.32 ×〔0.25〕× 0.10	褐灰色土	土	
5054	I8	円形	0.39 × 0.30 × 0.17	褐灰色土	土	
5055	I8	円形	0.23 × 0.22 × 0.16	褐灰色土		
5056	I・J8	円形	0.56 × 0.49 × 0.16	褐灰色土	土	SP5051・5057 を切る
5057	J8	〔楕円形〕	〔0.86〕× 0.50 × 0.11	褐灰色土		SP5056 に切られる
5058	I8	不整円形	0.45 × 0.35 × 0.07	褐灰色土	土・須	鋤址を切る
5059	I8・9	円形	0.19 × 0.19 × 0.12	褐灰色土		
5060	I9	円形	0.30 × 0.27 × 0.18	褐灰色土	土	SP5061 を切る
5061	I9	〔円形〕	0.38 × 0.35 × 0.20	褐灰色土	土	SP5062 を切る SP5060 に切られる
5062	I9	〔円形〕	0.26 ×〔0.25〕× 0.17	褐灰色土		SP5061 に切られる
5063	I8	円形	0.23 × 0.19 × 0.12	にぶい黄色土に褐灰色土がブロック状に混入	石	
5064	J9	円形	0.21 × 0.20 × 0.11	灰色土		SP5065 を切る
5065	J9	〔楕円形〕	〔0.15〕× 0.07 × 0.02	灰色土		SP5064 に切られる
5066	J9	〔楕円形〕	―	褐灰色土		検出のみ
5067	I9	楕円形	0.69 × 0.41 × 0.07	灰色土		
5068	I8	円形	0.50 × 0.38 × 0.08	青灰色土に褐灰色土と灰色土が混入		
5069	I8	円形	0.09 × 0.07 × 0.11	褐灰色土		
5070	I8	楕円形	0.10 × 0.05 × 0.09	褐灰色土		
5071	I9	円形	0.26 × 0.24 × 0.10	褐灰色土		
5072	I9	円形	0.15 × 0.15 × 0.05	褐灰色土		
5073	I9	楕円形	0.53 × 0.35 × 0.06	褐灰色土	石	
5074	I10	円形	0.24 × 0.23 × 0.06	褐灰色土		
5075	I10・11	円形	0.67 × 0.67 × 0.15	褐灰色土	土・須	

柱穴一覧 (10)

柱穴（ＳＰ）	地　区	平 面 形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
5076	J10	円形	0.39 × 0.32 × 0.07	褐灰色土		
5077	I9	〔円形〕	—	褐灰色土		検出のみ
5078	J9	〔円形〕	—	褐灰色土		検出のみ
5079	F9	円形	0.52 × 0.46 × 0.17	灰色土		
5080	F9	円形	0.56 × 0.56 × 0.17	褐灰色土に、にぶい黄色土がブロック状に混入		
5081	G9	楕円形	0.58 × 0.41 × 0.33	褐灰色土	須・陶	
5082	F10	楕円形	0.46 × 0.27 × 0.17	褐灰色土		
5083	G9	円形	0.32 × 0.32 × 0.16	褐灰色土		
5084	G9	円形	0.30 × 0.27 × 0.10	灰黄褐色土		
5085	G9	隅丸長方形	0.65 × 0.45 × 0.16	褐灰色土		
5086	F10	〔楕円形〕	〔0.45〕×〔0.35〕× 0.11	褐灰色土		SP5002 を切る SP5001 に切られる
5087	G・H9・10	円形	0.45 × 0.44 × 0.03	灰色土	土	
5088	H9・10	円形	0.55 × 0.50 × 0.10	褐灰色土	土・須	
5089	H10	隅丸長方形	0.46 × 0.27 × 0.08	褐灰色土		
5090	H10	楕円形	0.32 × 0.22 × 0.11	褐灰色土		
5091	H10	楕円形	0.42 × 0.29 × 0.13	褐灰色土		
5092	H9	円形	0.30 × 0.23 × 0.10	褐灰色土		
5093	I10	円形	0.42 × 0.39 × 0.18	褐灰色土	土	
5094	I10	円形	0.57 × 0.55 × 0.40	褐灰色土	土	
5095	I10	長方形	0.64 × 0.39 × 0.32	褐灰色土	陶	
5096	I10	円形	0.54 × 0.48 × 0.17	褐灰色土	土	
5097	I10	円形	0.56 × 0.48 × 0.14	褐灰色土		
5098	H10	楕円形	0.14 × 0.09 × 0.13	灰色土		

表８　１区水田層出土遺物観察表　土製品 (1)

番号	器種	法量（㎝）	形 態・施 文	調　整		色調（外面） （内面）	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	土釜	口径　(23.2) 残高　1.7	口唇部に丸味のある断面三角形状の粘土紐を貼付。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		3
2	土釜	口径　(25.4) 残高　1.9	口唇部に断面三角形状の粘土紐を貼付。小片。	ヨコナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1 ～ 2) ◎		3
3	土釜	残高　4.5	断面円形。土釜の脚部片。	ナデ	ナデ	褐色	石・長(1 ～ 2) ◎		3
4	坏	底径　(7.0) 残高　0.9	底部片。平底。底部調整は摩滅の為、不明。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
5	椀	底径　(8.0) 残高　1.0	断面方形状の高台を貼付。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1 ～ 2) ◎		3

1区水田層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
6	甕	口径（15.2） 残高 4.5	内湾口縁。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。1/5の残存。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ→ナデ	㊀ヨコナデ ㊁工具によるナデ	灰褐色 灰褐色	石・長（1～2） 金 ◎		3

表9　1区トレンチ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
7	坏	口径（12.4） 残高 0.8	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
8	坏	口径（11.0） 残高 1.5	口縁端部は尖り気味に丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1） ◎		
9	坏	底径（6.0） 残高 1.5	底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		3
10	坏	底径（7.3） 残高 0.7	小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ◎		

表10　2区水田1埋土出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
11	坏	口径（13.0） 残高 2.9	体部は直立し、口縁端部は先細りする。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
12	坏	口径（9.4） 残高 2.6	小型品。体部は外傾し、口縁部は直立する。小片。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
13	坏	底径（7.6） 残高 1.2	底部片。底部の切り離しは不明。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		
14	坏	残高 0.6	底部外面に方形状の線刻あり。小片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		18
15	コネ鉢	口径（24.8） 残高 4.3	口縁部は上下方に拡張する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		18
16	片口鉢	残高 3.7	口縁部は上方に拡張し、片口である。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		18
17	土釜	口径（18.9） 残高 2.4	口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	密 ◎		
18	土釜	口径（28.4） 残高 3.7	口縁部片。口縁端部は面取りする。瓦質土器。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 灰色	石（1） ◎		18
19	土釜	残高 1.2	断面三角形の鍔を貼付ける。小片。瓦質土器。	ヨコナデ	ナデ	黒色 灰色	密 ◎		
20	土釜	残高 8.6	土釜の脚部片。瓦質土器。	ナデ	ナデ	暗灰色	密 ◎		
21	甕	残高 2.8	須恵器。口縁部の小片で、口縁端部はナデ凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
22	甕	残高 2.6	亀山焼。外面に格子目叩き、内面は円弧叩き後ナデを施す。小片。	格子目叩き	叩き→ナデ	黒色 黒色	密 ◎		18
23	甕	残高 4.9	亀山焼。外面に格子目叩き、内面はミガキを施す。小片。	格子目叩き	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		18
24	碗	口径（15.4） 残高 1.4	白磁碗。口縁部は短く外反する。胎土は白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		

２区水田１埋土出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
25	碗	残高 2.6	白磁碗。体部の小片。胎土は白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		
26	碗	底径 6.1 残高 2.8	白磁碗。削り出し高台で、内面見込みに圏線が巡る。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		18
27	皿	底径 (6.0) 残高 0.9	白磁皿。底部片で、胎土は灰白色をなし、透明釉が掛けられる。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		

表 11　２区第７層（灰色砂）出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
28	坏	底径 (7.8) 残高 1.2	底部小片。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎		
29	坏	底径 (9.6) 残高 1.1	底部小片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
30	土釜	口径 (26.2) 残高 1.9	口縁部小片。口縁端部は面取りされる。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石（1） ◎	煤付着	
31	土釜	残高 5.1	土釜の脚部片。瓦質土器。	ナデ	—	暗灰色	石・長（1） ◎		
32	土釜	残高 3.6	土釜の脚部片。	ナデ	—	褐色	石・長（1） ◎		

表 12　２区水田２埋土出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
33	土釜	口径 (25.0) 残高 2.2	口縁部の小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～2) ◎	煤付着	18
34	土釜	残高 1.5	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石（1） ◎	煤付着	18
35	土釜	残高 5.6	土釜の脚部片。	ナデ	—	褐色	石・長（1） ◎		18
36	土釜	残高 6.4	土釜の脚部片。	ナデ	—	褐色	石・長(1～2) ◎		18
37	土釜	残高 5.3	土釜の脚部片。	ナデ	—	褐色	石・長（1） 金 ◎	黒斑	
38	コネ鉢	口径 (21.0) 残高 1.8	口縁部は上方に拡張する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
39	土鍋	残高 2.2	口縁部の小片。口縁端部はナデ凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石（1） ◎	煤付着	
40	土鍋	口径 (41.6) 残高 3.5	口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
41	甕	口径 (30.1) 残高 9.2	常滑焼。口縁部は外反し、胴部外面に平行叩きを施す。1/5 の残存。	平行叩き	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		18
42	甕	残高 7.9	亀山焼。外面に格子目叩き、内面に円弧叩き後ナデを施す。小片。	格子目叩き	円弧叩き →ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長（1） ◎		18
43	皿	口径 (9.2) 底径 (7.3) 器高 0.8	瓦器皿。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
44	椀	底径 (4.7) 残高 0.6	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。小片。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表 13　2 区水田 2 足跡出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
45	坏	底径 (7.3) 残高 1.0	底部片。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
46	坏	底径 (6.2) 残高 1.2	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		
47	土鍋	残高 1.7	口縁部の小片。口縁端部はナデ凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石（1） ◎	煤付着	
48	甕	残高 6.1	亀山焼。外面に格子目叩きを施す。小片。	格子目叩き	ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
49	土釜	残高 6.0	土釜の脚部片。	ナデ	—	灰白色	石・長(1 ～ 2) ◎		

表 14　2 区畦畔 201 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
50	コネ鉢	口径 (33.4) 残高 3.3	口縁部は上下方に拡張する。1/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		18
51	擂鉢	残高 3.4	口縁部は上方に拡張する。小片。東播系須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 15　SD201 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
52	坏	口径 (12.2) 残高 2.0	体部中位に稜あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
53	坏	底径 (9.8) 残高 1.5	1/4 の残存。底部の切り離しは不明。	マメツ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1 ～ 2) ◎		
54	椀	底径 5.9 残高 4.2	円盤高台状の底部。底部外面に粗目の回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		19
55	椀	残高 1.4	底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		
56	皿	口径 (7.4) 底径 (5.4) 器高 1.3	底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
57	皿	口径 (8.0) 底径 (5.7) 器高 1.3	体部は内湾し、底部の切り離しは不明。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎	黒斑	
58	椀	口径 (14.0) 残高 2.8	和泉型瓦器椀。体部中位に稜あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰色 暗灰色	密 ◎		19
59	椀	底径 (4.9) 残高 0.8	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。1/4 の残存。	ヨコナデ	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		19
60	土釜	口径 (32.2) 残高 4.4	瓦質土器。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長（1） ◎		19
61	碗	口径 (16.4) 残高 3.0	白磁碗。玉縁状口縁。小片。胎土は白色で、透明釉が掛けられる。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		19
62	碗	残高 4.1	青磁碗。体部内面に片彫輪花文あり。胎土は灰色で、濃緑色の釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰色 灰色	密 ◎		19
63	壺	残高 3.9	胴部片。褐釉陶器。	施釉	施釉	灰色 灰色	密 ◎		

表 16　掘立 201 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
64	坏	口径 (14.2) 底径 (5.8) 器高 3.6	やや突出する底部。体部内面中位に煤が付着。口縁部は被熱の為、褐色に変色。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2034 煤付着	19
65	椀	口径 (15.4) 残高 3.3	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎	SP2044	
66	椀	底径 (6.4) 残高 1.8	底部片。1/3 の残存。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2034	
67	皿	口径 (9.7) 底径 (7.0) 器高 1.3	体部は内湾し、底部は僅かに突出する。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2041	
68	鉢	口径 (7.6) 残高 1.9	小型品。小片。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2044	19
69	椀	口径 (15.0) 残高 4.3	和泉型瓦器椀。体部上位に稜あり。1/3 の残存。	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP2032	19
70	椀	口径 (14.6) 残高 2.2	和泉型瓦器椀。小片。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎	SP2041	
71	碗	口径 (17.6) 残高 3.0	白磁碗。玉縁状口縁。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2044	19
72	甕	残高 6.8	瓦質土器。小片。	平行叩き	ナデ（指頭痕）	灰色 灰色	密 ◎	SP2038	19

表 17　掘立 202 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
73	坏	口径 (15.4) 残高 3.5	体部は直立気味に立ち上がる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎	SP2051	
74	坏	口径 (15.8) 残高 3.3	体部は外傾する。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 赤色土粒 ◎	SP2005	
75	坏	底径 (7.9) 残高 1.3	小片。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2051	
76	椀	口径 (13.6) 残高 2.1	小片。口縁部は短く外反する。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色 褐色	密 ◎	SP2002	
77	皿	口径 (7.9) 底径 (5.8) 器高 1.3	口縁部は短く外傾し、器壁は厚い。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石（1） ◎	SP2027	
78	椀	口径 (14.4) 残高 2.3	楠葉型瓦器椀。口縁部内面に沈線状の凹みあり。小片。	マメツ	ヘラミガキ	灰色 灰色	密 ◎	SP2051	
79	坏	底径 (9.0) 残高 2.6	底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/3 の残存。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP2013	
80	壺	残高 4.3	底体部片。須恵器。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP2027	
81	碗	残高 2.2	白磁碗。体部下位に沈線 1 条あり。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2002	

表 18　SK201 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
82	坏	口径 14.8 底径 8.3 器高 4.2	口縁部は僅かに外反し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		20

SK201 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
83	坏	口径 13.9 底径 7.8 器高 4.3	口縁部は僅かに外反し、底部外面に回転ヘラ切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
84	坏	口径 (14.1) 底径 (8.1) 器高 4.3	体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
85	坏	口径 14.3 底径 5.8 器高 2.8	ほぼ完形品。体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1) 赤色土粒 ◎		20
86	椀	口径 13.8 底径 6.8 器高 5.1	円盤高台状の底部。体部は内湾し、口縁部は外反する。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊡指頭痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		20
87	椀	口径 (16.6) 残高 3.3	体部は内湾し、口縁部は短く外反する。小片。	㊐ヨコナデ ㊢ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		
88	椀	口径 (15.0) 残高 3.1	体部は内湾し、口縁部は短く外反する。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		
89	椀	口径 (15.3) 残高 5.7	黒色土器。内黒で、体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	石・長(1～2) ◎		20
90	皿	口径 9.2 底径 6.9 器高 1.7	ほぼ完形品。体部は直立気味に立ち上がり、底部外面に回転ヘラ切り痕とスノコ痕あり。	マメツ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1～2) ◎		20
91	皿	口径 8.6 底径 6.2 器高 2.0	完存品。体部は直立気味に立ち上がり、底部外面に回転ヘラ切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1～2) ◎		20
92	皿	口径 8.9 底径 6.9 器高 1.6	体部は直立し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。4/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1) 赤色土粒 ◎		20
93	皿	口径 9.2 底径 6.8 器高 1.7	ほぼ完形品。体部は直立し、底部外面に回転ヘラ切り痕とスノコ痕あり。器壁は厚い。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石 (1) ◎		20
94	皿	口径 (8.6) 底径 (7.0) 器高 1.9	体部は内湾し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。器壁は厚い。3/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		20
95	皿	口径 (9.1) 底径 4.8 器高 1.6	底部はやや突出し、体部は内湾する。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。3/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 赤色土粒 ◎		20
96	皿	口径 8.7 底径 4.9 器高 1.6	底部はやや突出し、体部は内湾する。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
97	皿	口径 (8.3) 底径 5.5 器高 1.5	ほぼ完形品。体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) 赤色土粒 ◎		20
98	鍋	口径 (39.6) 残高 13.3	内湾口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	㊐ヨコナデ ㊢ハケ	㊐ヨコナデ ㊢ナデ	褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	20

表 19　SK204 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
99	坏	口径 13.7 底径 7.3 器高 3.4	完存品。体部は内湾し、底部はやや突出する。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 赤色土粒 ◎		21
100	坏	口径 (14.0) 底径 7.4 器高 3.4	体部は内湾し、底部はやや突出する。底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 赤色土粒 ◎		
101	坏	口径 14.1 底径 5.6 器高 3.7	体部は内湾し、底部はやや突出する。底部外面に粗目の回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		21
102	椀	口径 (16.8) 残高 3.7	体部は内湾し、口縁部下位に不明瞭な稜あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) 金 ◎		

SK204 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
103	椀	底径 (6.2) 残高 2.0	低い断面三角形の高台あり。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石（1～3） ◎		
104	皿	口径 9.1 底径 7.6 器高 1.8	完存品。体部は内湾し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。器壁は厚い。	ヨコナデ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	密 ◎		21
105	皿	口径 9.0 底径 7.1 器高 1.7	体部は内湾し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。3/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
106	皿	口径 (8.4) 底径 (6.6) 器高 1.4	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1） ◎		
107	皿	口径 9.0 底径 5.4 器高 1.8	体部は内湾し、底部は突出する。底部外面に回転糸切り痕あり。4/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1） 赤色土粒 ◎		21
108	皿	口径 9.5 底径 5.4 器高 1.9	体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。底部は突出。底部外面に回転糸切り痕あり。4/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
109	皿	口径 (9.6) 底径 4.7 器高 1.9	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
110	皿	口径 (9.6) 底径 (6.8) 器高 1.4	小片。回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長（1） ◎		
111	皿	口径 6.2 底径 5.0 器高 2.5	ほぼ完形品。耳皿状で、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石（1） 赤色土粒 ◎		21
112	椀	口径 (16.1) 底径 6.4 器高 6.4	黒色土器。内黒椀で、口縁部は僅かに外反し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ ㊊ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ ㊊ヘラミガキ	灰白色 黒色	密 ◎		21
113	椀	口径 (15.1) 底径 6.6 器高 6.6	黒色土器。内黒椀で、底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ ㊊ヘラミガキ	灰白色 黒色	石・長（1） ◎		21
114	椀	口径 (12.8) 残高 2.5	黒色土器。内黒椀。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	密 ◎		
115	椀	口径 (16.8) 残高 4.3	黒色土器。内黒椀。小片。	㊐ヨコナデ ㊍ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	密 ◎		21
116	椀	底径 (6.6) 残高 1.2	黒色土器。内黒椀で、底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	石・長（1） ◎		21
117	甕	口径 (33.6) 残高 6.2	「く」の字状口縁。外面にタタキ痕あり。小片。	㊐ヨコナデ ㊍タタキ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1） ◎	黒斑	
118	鍋	口径 (36.6) 残高 19.6	土師器。外反口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/6 の残存。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1） ◎	黒斑	22

表 20　SK204 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
119	不明	一部残存	鉄	4.6	1.7	0.5	4.940		22
120	不明	一部残存	鉄	2.3	1.2	0.5	1.658		22

表 21　SK202 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
121	坏	口径 (14.8) 底径 (8.4) 器高 3.7	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。焼成は硬質。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石（1～2） ◎		22
122	坏	口径 (14.7) 底径 (7.0) 器高 3.8	体部は内湾し、口縁端部は「コ」字状をなす。底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		

SK202 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
123	坏	底径 6.4 残高 2.0	底部完形品。外面に回転糸切り痕あり。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石（1） 赤色土粒 ◎		
124	皿	口径 8.0 底径 5.0 器高 1.6	底部中央に径 0.6cm大の孔あり。器形の歪みは顕著で、底部外面に回転糸切り痕あり。器壁は薄い。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		22
125	皿	口径 (8.7) 底径 (6.8) 器高 1.4	体部は直立気味に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。器壁は薄い。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長（1） ◎		
126	皿	口径 (7.8) 残高 1.4	「て」の字状口縁。外面に指頭痕あり。1/6 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長（1） ◎		22
127	皿	口径 (10.8) 底径 (8.6) 器高 0.9	「て」の字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		22
128	碗	残高 2.5	緑釉陶器。土師質で、薄緑色の釉薬が部分的に残存。小片。	ハクリ	ハクリ	浅黄色 浅黄色	密 ◎		22
129	碗	口径 (16.1) 残高 3.7	白磁碗。小さな玉縁状口縁。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		22

表 22　SK209 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
130	坏	口径 (14.4) 底径 (7.2) 器高 3.5	底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。硬質。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石（1 ～ 2） ◎		22
131	坏	口径 (13.8) 残高 2.3	口縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
132	坏	口径 (15.7) 残高 2.8	口縁部小片。口縁下外面に不明瞭な稜あり。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
133	坏	口径 (11.0) 残高 2.7	口縁部小片。口縁下外面に不明瞭な稜あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長(1 ～ 2) ◎		
134	皿	口径 (8.6) 底径 (6.7) 器高 1.4	底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 赤色土粒 ◎		22
135	甕	残高 3.4	胴部片。須恵器。	平行叩き	円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎		

表 23　SK203 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
136	椀	口径 (15.9) 残高 2.3	黒色土器。内黒椀。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	密 ◎		
137	椀	底径 (6.8) 残高 4.3	黒色土器。内黒椀で、断面三角形の高台を貼り付ける。1/4 の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	石・長(1 ～ 2) ◎		23

表 24　SK205 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
138	皿	口径 9.2 底径 6.5 器高 1.4	ほぼ完形品。体部は内湾し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。器壁は厚い。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1） 金 ◎		23
139	皿	口径 8.7 底径 6.8 器高 2.0	ほぼ完形品。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1 ～ 2) ◎		23
140	皿	底径 6.4 残高 0.9	底部片。外面に回転ヘラ切り痕あり。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	密 ◎		

表 25　SK206 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
141	坏	底径 (7.2) 残高 1.4	小片。底部の切り離しは不明。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		
142	椀	底径 (5.8) 残高 2.0	1/4 の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表 26　SK207 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
143	椀	口径 (16.0) 底径 (6.6) 器高 6.3	体部は内湾し、口縁部は短く外反する。円盤高台状の底部。1/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
144	椀	口径 (14.9) 底径 6.6 器高 6.3	体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。底部外面に粗目の回転糸切り痕あり。復元完形品。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		23
145	椀	口径 (15.4) 残高 5.1	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
146	椀	底径 6.3 残高 3.4	低めの三角形高台を貼付け。底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形品。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 赤色土粒 ◎		23
147	椀	底径 6.5 残高 2.2	やや太めの高台を貼付け。底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形品。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		23
148	皿	口径 8.9 底径 6.0 器高 1.5	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。ほぼ完形品。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		23
149	皿	口径 (7.8) 底径 (6.0) 器高 1.2	口縁部は直立し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石（1） ◎		23
150	皿	底径 5.8 残高 0.9	底部片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
151	皿	口径 (10.8) 残高 1.2	「て」の字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		

表 27　SK208 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
152	坏	口径 (15.4) 底径 7.8 器高 4.6	体部は内湾し、底部は僅かに突出する。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1 ～ 5) ◎		24
153	皿	口径 8.6 底径 5.6 器高 1.8	丸味のある底部。底部外面には回転ヘラ切り痕あり。ほぼ完形品。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石（1） 金、赤色土粒 ◎		24
154	皿	口径 8.6 底径 4.1 器高 1.9	丸味のある底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。ほぼ完形品。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		24
155	皿	口径 8.5 底径 5.4 器高 1.5	平底。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） 金 ◎		24
156	皿	口径 9.6 底径 6.3 器高 2.0	平底。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。口縁部を一部欠損。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長（1） 金、赤色土粒 ◎		24
157	椀	口径 (16.7) 底径 (6.8) 器高 5.7	黒色土器。内黒椀で、口縁部は僅かに外反し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	石（1） 赤色土粒 ◎		24
158	壺	残高 7.0	胴部片。1/4 の残存。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		24
159	壺	底径 (8.2) 残高 2.2	底部片。1/6 の残存。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		24

表 28　SE201 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
160	坏	口径 (14.5) 残高 2.9	口縁部の小片。体部中位に稜あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		
161	坏	底径 7.2 残高 3.4	体部外面に粘土紐巻き上げ痕が残る。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		24
162	坏	底径 (7.0) 残高 1.1	僅かに突出する底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長（1） ◎		
163	坏	底径 (5.8) 残高 1.1	僅かに突出する底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 赤色土粒 ◎		
164	坏	底径 (6.6) 残高 1.1	僅かに突出する底部。底部の切り離しは不明。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
165	坏	底径 (8.8) 残高 1.2	僅かに突出する底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長（1） ◎		24
166	椀	口径 (14.3) 残高 2.7	口縁部の小片。口縁部は短く外反する。硬質。	ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		
167	椀	底径 (7.1) 残高 1.1	円盤高台状の底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
168	椀	底径 (6.4) 残高 1.5	円盤高台状の底部。底部の切り離しは不明。小片。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		24
169	椀	底径 6.7 残高 2.6	底部の完形品。底部外面に回転糸切り痕あり。硬質。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		25
170	椀	底径 (7.3) 残高 2.1	底部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 褐灰色	密 ◎		
171	椀	底径 (6.7) 残高 1.8	底部片。1/4 の残存。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 褐灰色	密 ◎		
172	皿	口径 (8.2) 底径 (5.6) 器高 1.3	底部外面に回転ヘラ切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
173	皿	口径 (8.2) 底径 (5.8) 器高 0.9	底部外面に回転ヘラ切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 赤色土粒 ◎		
174	皿	口径 (8.8) 底径 (4.0) 器高 1.4	「て」の字状口縁。1/2 の残存。	ヨコナデ （指頭痕）	ナデ （指頭痕）	淡橙色 淡橙色	石・長（1） ◎		25
175	椀	口径 (14.8) 残高 3.6	楠葉型瓦器椀。口縁部内面に 1 条の沈線が巡る。小片。	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	灰色 暗灰色	密 ◎		25
176	椀	口径 (15.1) 残高 3.2	楠葉型瓦器椀。口縁部内面に 1 条の沈線あり。小片。	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	灰色 灰色	密 ◎		25
177	椀	口径 (16.5) 残高 3.6	楠葉型瓦器椀。口縁部内面に 1 条の沈線が巡る。1/6 の残存。	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎		25
178	椀	口径 (15.0) 残高 2.0	和泉型瓦器椀。小片。	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊏ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎		
179	椀	底径 6.0 残高 1.6	瓦器椀。底部完形品。底部内面に平行線状の暗文あり。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎		25
180	椀	底径 (5.1) 残高 1.5	瓦器椀。底部内面に弧状の暗文あり。1/3 の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰色 灰色	密 ◎		
181	椀	残高 1.2	瓦器椀。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	密 ◎	煤付着	

SE201 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
182	坏	底径 (7.2) 残高 3.0	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
183	坏	底径 (16.3) 残高 1.5	円盤高台状の底部。底部の切り離しは不明。須恵器。	マメツ	マメツ	灰色 灰色	密 ◎		

表 29　SE201 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
184	鉄斧	1/2	鉄	5.3	4.7	1.4	50.093		25

表 30　SE202 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
185	坏	口径 (14.2) 底径 (8.3) 器高 3.5	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 赤色土粒 ◎		
186	坏	口径 (15.0) 残高 3.4	体部は内湾し、口縁下外面に沈線状の凹みあり。小片。	㊐ヨコナデ ㊥ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
187	椀	口径 (17.6) 残高 2.7	口縁部小片。硬質。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
188	椀	底径 (5.6) 残高 1.6	円盤高台状の底部。底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1 ～ 2） ◎		
189	椀	底径 (6.7) 残高 2.0	1/2 の残存。底部外面に回転糸切り痕あり。硬質。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎		
190	椀	底径 (6.8) 残高 1.8	1/2 の残存。底部に径 0.9cm大の孔あり。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		25
191	皿	口径 (9.2) 残高 1.0	「て」の字状口縁。口縁部内面に沈線状の凹みあり。小片。	ナデ	ナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		
192	皿	口径 (10.5) 残高 2.0	「て」の字状口縁。	ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
193	椀	底径 7.2 残高 2.0	黒色土器。内黒椀で、底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形品。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 黒色	石・長（1 ～ 2） ◎		25
194	椀	底径 (5.7) 残高 2.2	黒色土器。内黒椀で、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒色	石・長（1 ～ 3） ◎		
195	椀	口径 (15.2) 残高 2.8	楠葉型瓦器椀。口縁部内面に沈線状の凹みあり。小片。	㊐ヨコナデ ㊥ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎		26
196	椀	底径 5.0 残高 1.5	瓦器椀。底部内面に平行線状の暗文あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰色 暗灰色	密 ◎		26
197	高坏	残高 4.2	脚部片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1） 赤色土粒 ◎		
198	鍋	口径 (40.4) 残高 3.6	口縁部の小片。口縁端部は面取りされる。	ハケ（4 本 /cm）	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長（1 ～ 2） ◎		
199	鍋	残高 3.7	頸胴部の小片。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長（1） 金 ◎		
200	壺	残高 7.4	十瓶焼。胴部片。外面に線刻あり。1/5 の残存。	回転ナデ	回転ナデ （指頭痕）	灰色 灰色	密 ◎		26

表 31　２区柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
201	坏	口径 (13.6) 残高 3.5	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎	SP2042	
202	椀	口径 (17.3) 残高 4.9	小片。硬質。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊥ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2004	
203	椀	底径 (7.0) 残高 1.5	円盤高台状の底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2053	
204	椀	底径 (7.7) 残高 1.6	円盤高台状の底部。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。2/3 の残存。	ヨコナデ	マメツ	褐色 褐色	長（1） ◎	SP2004	
205	椀	底径 (6.6) 残高 1.6	円盤高台状の底部。底部の切り離しは不明。1/2 の残存。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2157	
206	椀	底径 (6.0) 残高 1.5	2/3 の残存。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎	SP2039	
207	椀	底径 (6.0) 残高 1.9	黒色土器。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい橙色 黒色	石・長（1） ◎	SP2017	
208	皿	口径 (9.3) 底径 (7.2) 器高 1.4	底部外面に回転糸切り痕あり。器壁は薄い。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎	SP2042	
209	皿	口径 (9.2) 底径 (5.2) 器高 1.7	「て」の字状口縁。1/3 の残存。	マメツ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎	SP2064	26
210	椀	口径 (16.0) 残高 1.0	瓦器椀。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	黒色 黒色	密 ◎	SP2017	
211	甕	口径 (25.0) 残高 2.5	内湾口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1 ～ 3) ◎	SP2088	
212	高坏	残高 4.5	柱部片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎	SP2140	26
213	土鍋	口径 (31.6) 残高 2.4	口縁部の小片。口縁端部は面取りし、口頸部内面に明瞭な稜あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1 ～ 2) ◎	SP2064 黒斑	
214	コネ鉢	口径 (27.6) 残高 4.0	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚し、口縁端面はナデ凹む。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP2053	26

表 32　２区包含層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
215	坏	底径 (6.1) 残高 1.2	底部片。底部の切り離しは不明。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石（1） ◎		
216	皿	口径 9.6 底径 7.2 器高 1.3	ほぼ完形品。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石（1） 赤色土粒 ◎		
217	椀	底径 6.4 残高 3.0	黒色土器。底部外面に回転糸切り痕と「×」印の線刻あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 黒色	密 ◎		26
218	椀	底径 6.6 残高 2.2	黒色土器。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 黒色	密 ◎		
219	椀	底径 (10.2) 残高 1.6	黒色土器。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 黒色	石（1） ◎		
220	椀	底径 (5.6) 残高 3.1	黒色土器。托上椀。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 黒色	密 ◎		26
221	椀	底径 (6.5) 残高 2.2	瓦器椀。1/5 の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		

２区包含層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
222	甕	口径 (21.5) 残高 5.4	内湾口縁。小片。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ(6本/cm)	㊐ヨコナデ ㊐ハケ(4本/cm)	灰褐色 灰褐色	石・長(1～4) ◎		26
223	土釜	口径 (24.0) 残高 3.5	口縁部片。口縁端部は面取りする。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
224	坏	口径 (17.8) 残高 3.8	須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
225	坏	底径 (12.9) 残高 1.5	須恵器。高台は体底部境界に「ハ」の字に付く。1/5 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
226	壺	残高 3.1	脚付壺。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
227	甕	残高 5.2	頸部片。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
228	鉢	口径 (45.4) 残高 5.0	口縁部片。口縁端部は面取りする。瓦質土器。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		26
229	壺	残高 2.4	肩部片。褐釉陶器。	施釉	施釉	灰色 灰色	密 ◎		
230	壺	残高 5.4	胴部片。褐釉陶器。	施釉	施釉	灰色 灰色	密 ◎		27
231	碗	底径 (9.8) 残高 1.8	灰釉陶器。蛇ノ目高台。胎土は灰白色で、薄褐色の釉が掛けられる。須恵質。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		27
232	平瓦	残長 1.8	小片。	マメツ	布目痕	白色 白色	密 ◎		

表 33　２区包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
233	砥石	ほぼ完形	砂岩	17.9	7.5	8.2	1333.960	破損品 砥面：2 面	27
234	砥石	破片	砂岩	5.9	4.3	5.9	207.100	砥面：2 面	27
235	砥石	破片	砂岩	4.4	3.2	4.3	64.985	砥面：1 面	
236	不明品	完形	砂岩	5.0	6.0	0.9	41.624		27

表 34　２区地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
237	椀	底径 (7.0) 残高 1.6	円盤高台状の底部。底部の切り離しは不明。	マメツ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石（1～2） ◎		27
238	坏	底径 9.3 残高 1.7	底部外面に「×」印の記号あり。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		27
239	碗	口径 (16.8) 残高 4.4	白磁碗。玉縁状口縁。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		
240	碗	底径 (3.8) 残高 1.0	白磁碗。削り出し高台。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられる。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		
241	皿	口径 (4.2) 残高 1.0	白磁紅皿。1/2 の残存。胎土は白色で、透明釉が掛けられる。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		27

表 35　4 区水田層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
242	坏	口径（15.4） 残高 2.6	内湾口縁。口縁端部は尖り気味に仕上げる。1/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		
243	坏	底径（7.0） 残高 1.1	底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
244	坏	底径（5.9） 残高 0.9	底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄色 浅黄色	石（1 ～ 3） ◎		
245	坏	底径（5.4） 残高 1.8	底部外面に回転糸切り痕あり。1/5 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） 金 ◎		
246	皿	口径（8.0） 底径（5.5） 器高 1.4	口縁部はやや外反し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
247	皿	口径（6.8） 底径（5.0） 器高 1.1	体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。1/4 の残存。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
248	土釜	残高 13.1	断面円形。土釜の脚部片。	ナデ	—	灰褐色	石・長(1 ～ 5) ◎		34
249	土釜	残高 3.3	脚部小片。	ナデ	—	浅黄橙色	石・長(1 ～ 2) ◎		
250	椀	口径（15.2） 残高 1.4	和泉型瓦器椀。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		34
251	鉢	口径（15.4） 残高 2.2	口縁部は上方に肥厚。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
252	擂鉢	口径（29.8） 残高 3.6	口縁部は上下方に肥厚。小片。東播系須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	34
253	擂鉢	残高 5.8	体部片。1/8 の残存。東播系須恵器。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
254	擂鉢	底径（10.0） 残高 1.2	底部外面に孔あり（焼成後穿孔）。1/5 の残存。東播系須恵器。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		34
255	擂鉢	残高 4.9	体部内面に条線 6 条を看取。小片。	ハケ（8 本 /cm）	ナデ	褐色 暗褐色	密 ◎		34

表 36　5 区水田層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
256	土鍋	口径（37.0） 残高 4.3	口縁部は短く外傾し、口縁端部は内傾する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 暗褐色	石・長(1 ～ 2) ◎	煤付着	37
257	擂鉢	口径（40.0） 残高 2.1	口縁部は上内方に肥厚。小片。東播系須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
258	擂鉢	口径（32.4） 残高 4.9	口縁部は上内方に肥厚。1/6 の残存。東播系須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		37
259	擂鉢	底径（9.3） 残高 3.4	底部片。1/4 の残存。底部外面に回転糸切り痕あり。東播系須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
260	卸皿	底径（10.8） 残高 1.7	内面に格子目状の沈線あり。1/3 の残存。古瀬戸。	回転ナデ	施釉	灰色 灰色	密 ◎		37
261	坏蓋	つまみ径 1.9 残高 1.0	つまみ中央部は僅かに突出する。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
262	碗	口径（14.8） 残高 3.9	青磁碗。体部中位に圏線 1 条が巡る。小片。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	灰色 ◎		

5 区水田層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
263	碗	残高 2.3	白磁碗。小片。内外面に透明釉が掛けられている。	施釉	施釉	灰白色 灰褐色	灰黄色 ◎		
264	坏	底径 (8.0) 残高 2.3	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1 ～ 3) ◎		

表 37　SD501 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
265	椀	底径 (6.6) 残高 1.3	円盤高台状の底部。1/2 の残存。底部外面に回転糸切り痕あり。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		
266	椀	底径 (5.7) 残高 1.5	断面三角形状の高台を貼付。小片。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
267	椀	底径 (6.0) 残高 1.7	断面三角形状の高台を貼付。1/4 の残存。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。黒色土器。	ヨコナデ	ミガキ	灰褐色 黒色	密 赤色土粒 ◎		
268	皿	口径 (9.1) 底径 (5.9) 器高 1.6	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
269	椀	口径 (16.6) 残高 2.6	楠葉型瓦器椀。口縁内面に沈線 1 条が巡る。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		37
270	碗	底径 (9.3) 残高 2.0	灰釉陶器。蛇ノ目状高台。須恵質で薄褐色の釉薬が掛けられている。1/4 の残存。	回転ナデ	施釉	灰色 灰色	密 ◎		37
271	高坏	底径 (9.7) 残高 2.3	高坏の脚部。脚柱部に回転カキメ調整あり。須恵器小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		

表 38　SD502 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
272	椀	底径 (6.8) 残高 1.2	瓦器椀。断面台形状の高台を貼付。内面に平行線状の暗文あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
273	高坏	残高 3.7	須恵器高坏の脚部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 39　SK503 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
274	皿	口径 (7.4) 残高 1.0	土師器。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1） ◎		

表 40　SK503 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
275	砥石	小片	砂岩	6.4	1.8	0.9	53.440	破損品	

表 41　5 区柱穴出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
276	坏蓋	つまみ径 2.7 残高 1.5	中央部が突出するつまみ。天井部は笠形をなす。1/4 の残存。須恵器。	㋐回転ナデ ㋑回転ヘラケズリ ㋒回転ナデ	㋑ナデ ㋒回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5011	37
277	坏	底径 (12.2) 残高 1.1	やや太めの高台。1/6 の残存。須恵器。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP5022	

５区柱穴出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
278	坏	底径 (9.3) 残高 1.0	高台端部は内傾。1/6 の残存。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5011	
279	坏身	たちあがり径 (13.7) 残高 2.4	たちあがりは内傾し、端部は尖る。赤焼け土器。1/6 の残存。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎	SP5095	37
280	甕	残高 4.1	体部片。体部上位に沈線１条が巡る。1/5 の残存。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5022	37
281	甕	残高 8.7	頸部片。沈線２条と波状文あり。1/10 の残存。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5081	38
282	碗	口径 (11.8) 残高 2.6	白磁碗。口縁部は短く外反し、内外面に透明釉が掛けられている。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	灰白色 ◎	SP5081	38
283	坏	底径 (7.4) 残高 1.8	底部小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ◎	SP5022	

表 42　５区柱穴出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
284	砥石	小片	砂岩	4.2	4.5	3.5	82.148	SP5063	38
285	砥石	2/3	砂岩	7.6	3.7	4.0	137.935	SP5022	

表 43　５区包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
286	土鍋	口径 (41.2) 残高 4.3	口縁中位は膨らみをもち、口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 褐色	石・長（1～2） 金 ◎	第10層 煤付着	38
287	椀	底径 5.5 残高 2.3	円盤高台状の厚みのある底部。底部の切り離しは不明。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎	第10層	38
288	碗	底径 (7.7) 残高 2.4	緑釉陶器。円盤高台状の底部。体部外面と底部に施釉。1/4 の残存。須恵質。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第10層	38
289	土釜	口径 (29.5) 残高 3.4	口唇部は丸く、丸味のある断面三角形の粘土紐を貼付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長（1） ◎	トレンチ 煤付着	38
290	椀	底径 (5.8) 残高 2.0	底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎	トレンチ	38
291	皿	口径 (8.9) 底径 (5.6) 器高 1.6	1/2 の残存。底部の切り離しは摩滅の為、不明。	㊐ヨコナデ ㊡マメツ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 赤色土粒 ◎	トレンチ	38

表 44　５区地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
292	椀	底径 (4.4) 残高 1.1	瓦器椀。断面方形状の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		38
293	土釜	残高 5.5	土釜の脚部片。断面円形。	ナデ	—	褐色	石・長（1～2） ◎		
294	碗	底径 (4.2) 残高 1.8	肥前系陶器。1/2 の残存。断面台形状の削り出し高台。	ヘラケズリ	施釉	黄褐色 緑灰色	密 ◎		38

第４章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東垣生八反地遺跡（松山市東垣生町所在）６次調査から出土した生材、炭化材、種実等種類の同定を行い、用材に関する情報を得る。また、生材と炭化材について、放射性炭素年代測定を実施する。

１．試料

樹種同定試料は、掘立 202（№.1）、井戸 SE201（№.2、№.3）、井戸 SE201（№.4）、土坑 SK202（№.5）の５点である。特に№.5 は炭化している。微細物分析用試料は、土坑 SK202（№.6）の１点である。放射性炭素年代測定試料は、樹種同定試料の№.1 と№.5 を用いる。

２．分析方法

（１）樹種同定

炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。生材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、光学顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（２）微細物分析

試料を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5㎜の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5㎜の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体の他、主に 2㎜以上の炭化材などの遺物をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体は重量を一覧表に併記する。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

（３）放射性炭素年代測定

試料の表面に付着した泥などの不純物をできるだけ取り除いた後、塩酸（HCl）により炭酸塩等

酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA：Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1㎜の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C－AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX－Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA－C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA－C1）の測定も行う。δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

３．結果

（１）樹種同定

結果を表 45 に示す。生材 4 点は、全て針葉樹のスギに同定された。炭化材は、広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。なお、№2、№3 はあて材、炭化材は小径木（3 年分）である。以下、各分類群の形態的特徴等を示す。

表 45　樹種同定結果

番号	出土地点	樹種	備考
No.1	堀立 202	スギ	柱材
No.2	井戸 SE201	スギ（あて材）	杭
No.3	井戸 SE201	スギ（あて材）	杭
No.4	井戸 SE201	スギ	板材
No.5	土坑 SK202	コナラ亜属コナラ節	炭化材

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 個が多い。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高程度のものと複合放射組織とがある。

（２）微細物分析

結果を表 46 に示す。試料 1.3kg を洗い出した結果、種実遺体 5 個、炭化材 45.3g（最大 4.5cm）、炭化材主体 14.1g、砂礫主体 89.8g が検出された。種実遺体は、炭化した栽培植物のイネの籾の破片 2 個、オオムギの可能性があるイネ科の穎果 1 個と、炭化していない草本のタガラシの果実 2 個に同定された。以下、各分類群の形態的特徴を記す。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

籾（内外穎）は炭化しており黒色。完形ならば長さ 6 ～ 7.5㎜、幅 3 ～ 4㎜、厚さ 2 ～ 3㎜程度の偏

平な長楕円体。基部に大きさ1㎜程度の斜切状円柱形の果実序柄（小穂軸）と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。

表46　微細物分析・種実同定結果

分類群	部位・状態・粒径			No.6 SK202	備考
草本種実					
イネ	籾（基部）	破片	炭化	2	
イネ科（オオムギ？）	穎果	完形未満	炭化	1	残存長 3.39, 幅 2.37, 厚さ 1.82㎜
タガラシ	果実	完形		2	
炭化材				45.16	最大径（㎜）
	>4㎜			34.28	乾重（g）
	4−2㎜			11.01	乾重（g）
炭化材主体	2−1㎜			9.13	乾重（g）
	1−0.5㎜			4.93	乾重（g）
砂礫主体	>4㎜			8.49	乾重（g）
	4−2㎜			20.63	乾重（g）
	2−1㎜			26.60	乾重（g）
	1−0.5㎜			34.07	乾重（g）
分析量				1327	湿重（g）

果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土籾は基部の小穂軸で、残存長0.8㎜を測る。

・イネ科（Gramineae）

穎果は炭化しており黒色。残存長3.39㎜、幅2.37㎜、厚さ1.82㎜のやや偏平な紡錘状長楕円体、両端は尖るがいずれも欠損する。腹面正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は基部正中線上にある胚の痕跡がある。表面は粗面で微細な縦筋がある。栽培植物のオオムギ（*Hordeum valgare* L.）に似る。

・タガラシ（*Ranunculus sceleratus* L.）　キンポウゲ科キンポウゲ属

果実が検出された。長さ1.1㎜、幅0.9㎜、厚さ0.5㎜のやや偏平な広楕円体。果皮表面は粗面。中心部は淡黄褐色でやや凹み、横皺模様がある。縁は黄白色を呈す海綿状で水に浮きやすい。

（3）放射性炭素年代測定

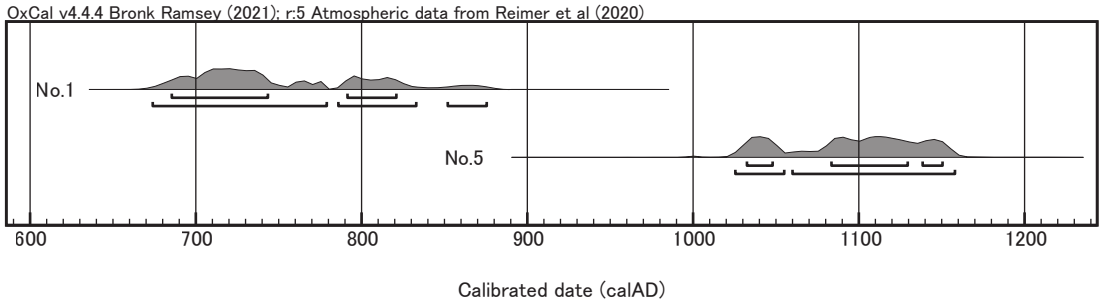
結果を表47、第64図に示す。炭化材は定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラファイトは十分得られている。同位体補正を行った値は、№1が1250 ± 25BP、№5が965 ± 25BPである。

表47　放射性炭素年代測定結果

試料	性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率 %		
№1	木材 スギ	AAA（1M）	1250 ± 25（1252 ± 25）	−25.33 ± 0.47	σ	cal AD 685 − cal AD 743	1265 − 1207 calBP	51.9	YU−15034	pal−13873
						cal AD 791 − cal AD 821	1159 − 1130 calBP	16.4		
					2σ	cal AD 674 − cal AD 779	1277 − 1172 calBP	68.0		
						cal AD 786 − cal AD 833	1165 − 1118 calBP	22.8		
						cal AD 852 − cal AD 875	1099 − 1075 calBP	4.6		
№5	炭化材 コナラ節	AAA（1M）	965 ± 25（964 ± 25）	−27.48 ± 0.39	σ	cal AD 1032 − cal AD 1048	918 − 903 calBP	14.9	YU−15035	pal−13874
						cal AD 1083 − cal AD 1129	867 − 821 calBP	43.2		
						cal AD 1138 − cal AD 1150	812 − 800 calBP	10.2		
					2σ	cal AD 1025 − cal AD 1055	925 − 896 calBP	22.2		
						cal AD 1060 − cal AD 1158	891 − 793 calBP	73.2		

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5）暦年の計算には、OxCal v4.4を使用。
6）暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは、IntCal20を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。2 σ の値は、№1 が calAD674 ～ 875、№5 が calAD1025 ～ 1158 である。



第 64 図　暦年較正結果

4．考察

樹種同定の結果、掘立 202 の柱材（№1）、井戸 SE201 の杭（№2、№3）、板材（№4）は、常緑針葉樹のスギに同定された。スギは、水湿に強く、加工が容易で、太く真っ直ぐな木材が得やすい。このため、井戸など水回りでは、スギがヒノキとともに多く使われる。この傾向は出土木製品用材データベース（伊東・山田（編）,2012）の結果からもわかっている。なお、杭の№2、№3 はあて材である。あて材とは斜面地など、重力が偏った場合で生育した木材で、通常の木材よりも応力に弱いとされる。これらは杭であることから、構造上重要ではない部位に使われたと考えられる。なお、掘立 202 の柱材（№1）の年代測定結果は 7 ～ 9 世紀を示し、出土遺物より推定される鎌倉時代前期（12 世紀から 13 世紀前半）よりも古い。スギは長寿な樹種であるため、樹心に近い部分を年代測定すると伐採年代よりも古くなることが知られていることから（古木効果）、年代観に関しては、調査所見等も考慮しながら検討する必要がある。

一方、土坑 SK202 の炭化材（№5）は、落葉広葉樹のコナラ亜属コナラ節に同定された。微細物分析でも多くの炭化材が検出されたが、これらを概査した結果もコナラ節である。コナラ節は、コナラなどを含む典型的な陽樹で、人里近くに二次林を構成するため、容易に入手可能であったとみられる。また、いずれも細い枝で炭化していることから、燃料材等に使われたと考えられる。

発掘調査所見によれば、SK202 は長径 2.25m、短径 1.95m、深さ 34cmの楕円形土坑で、土坑中位付近には厚さ 5cm程度の炭化物が土坑全体に堆積、基底面には扁平な石が全面に敷き詰められ、時期は出土遺物より平安時代後期～鎌倉時代前期（12 世紀前半頃）とされる。今回、年代測定の結果は 12 世紀前後を示し、発掘調査所見と調和的である。また、炭化物を対象とした微細物分析の結果、コナラ節主体の多くの炭化材の他に、栽培植物で穀類のイネと、オオムギの可能性があるイネ科の炭化種実が確認された。籾が確認されたイネは、近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、

当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。また、共伴する多くの炭化材とともに敷き詰められた稲藁に由来する可能性も考えられる。今後、炭化物包含土壌を対象に灰像分析を実施し、イネの葉部や茎部に形成される植物珪酸体の有無を確認することが望まれる。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、草本で湿生植物のタガラシが確認された。調査区周辺の湿地に生育していたと考えられる。

【引用文献】

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三 ,1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑（2010 年改訂版）. 東北大学出版会 ,678p.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0–55 cal kBP）. Radiocarbon, 62,1-33..

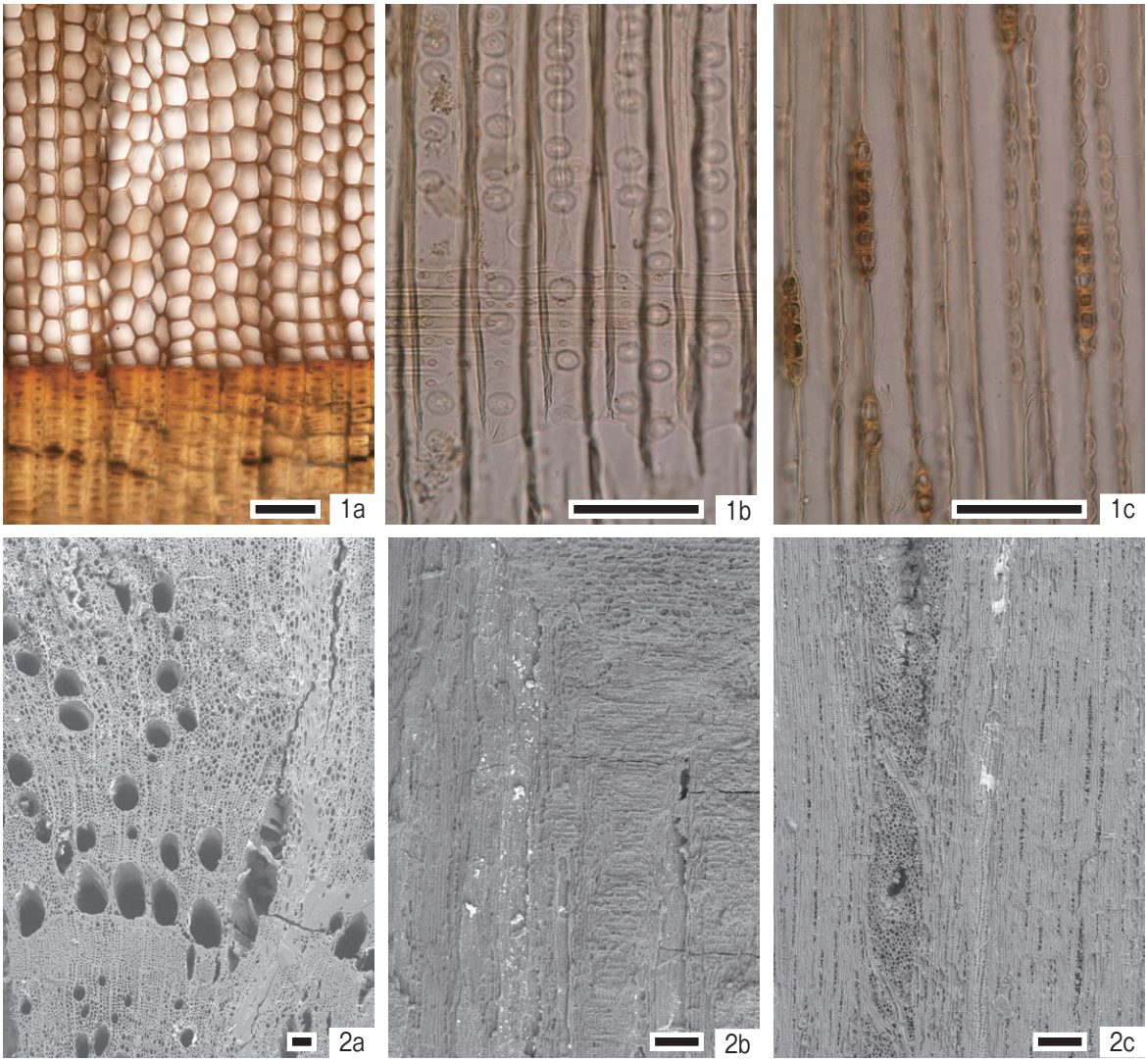
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

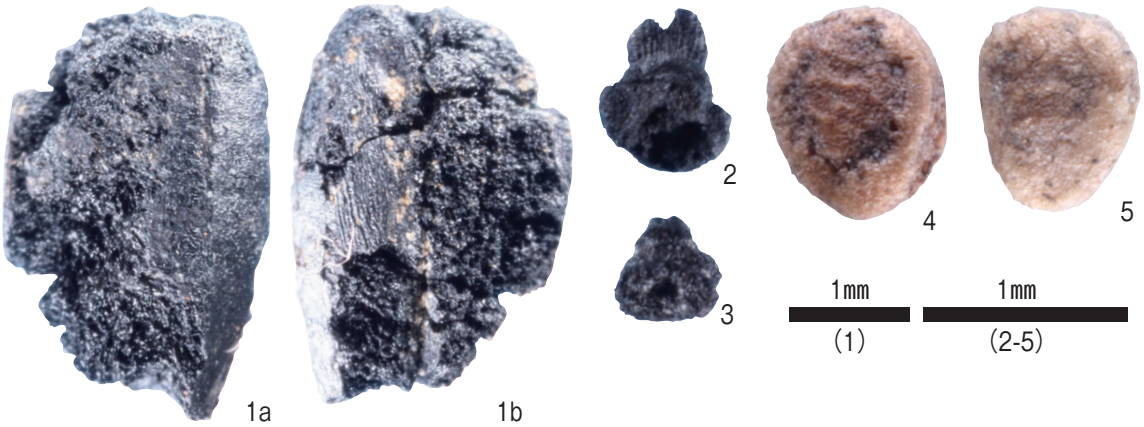
鈴木庸夫･高橋　冬･安延尚文 ,2018, 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる 734 種　増補改訂－ . ネイチャーウォッチングガイドブック , 誠文堂新光社 ,303p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. スギ（No.1）
2. コナラ亜属コナラ節（No.5）

a：木口　b：柾目　c：板目
スケールは100μm



1. イネ科（オオムギ？）穎果（土坑 SK202）
2. イネ 籾（基部）（土坑 SK202）
3. イネ 籾（基部）（土坑 SK202）
4. タガラシ 果実（土坑 SK202）
5. タガラシ 果実（土坑 SK202）

第 65 図　東垣生八反地遺跡 6 次調査出土の木材・種実

第５章　調査の成果と課題

東垣生八反地遺跡６次調査は、松山市による（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査である。調査では室町時代以降の水田址や平安時代後期から鎌倉時代の集落址のほか、古墳時代から室町時代までの遺物を発見した。ここでは、遺跡の構造や変遷、及び出土品について、まとめを行う。

１．水田址の調査

調査では、すべての地区にて水田耕作に伴う畦畔や溝、鋤址、足跡を確認した。検出した水田址は第８層の灰色粘質土が水田土壌である。なお、水田址は現地表下約 80㎝の地点、海抜標高 3.2 ～ 3.3 ｍが水田上面となる。検出した遺構は畦畔 14 条、鋤址 22 条、溝３条、足跡 58,173 ケである。なお、足跡は人と牛とがあり、内訳は人が 41,870 ケ、牛は 16,303 ケである。

検出した遺構には、幅が３ｍを超える規模の大きな畦畔が含まれており、ここでは、それらを「大畦畔」、それ以外を「小畦畔」と呼称して掲載する（第 66 図）。

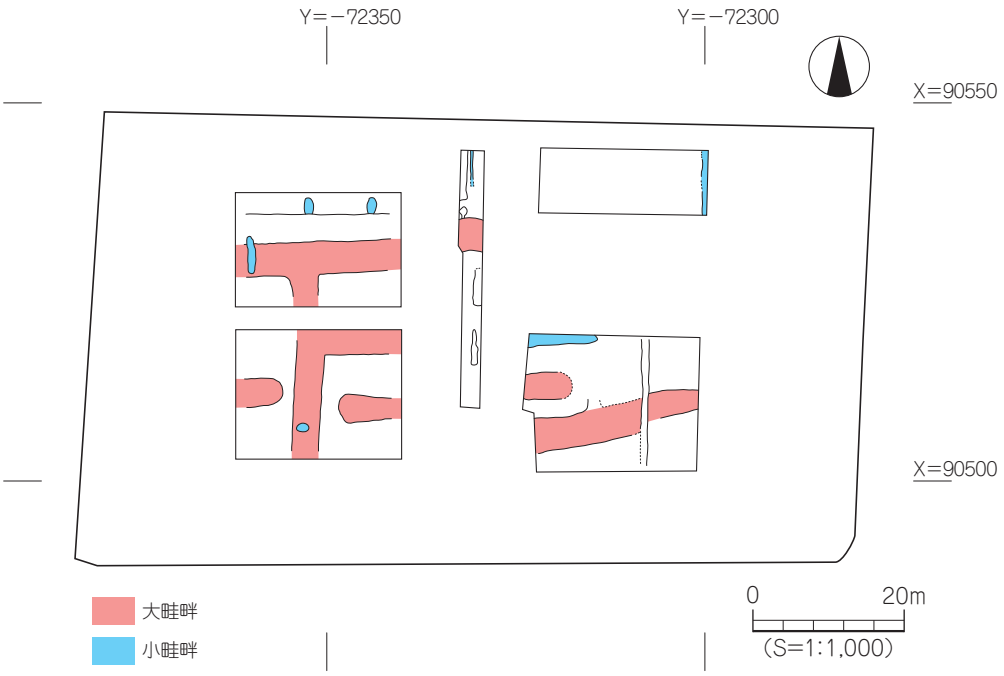
まず、大畦畔は１区を除く地区で検出されている。大畦畔は灰色砂質土や褐色砂質土、灰色微砂を用いて第８層上面に構築されている。検出幅は 1.8 ～ 4.1 ｍであり、水田面より６～ 20㎝の高さをもつ。形状は２区や４区、５区の状況から、真北方向より僅かに西に方位を振った東西及び南北方向を指向している。とりわけ、４区と５区は近接しており、両地区で検出した南北方向の畦畔は同一のものと判断される。おそらく、碁盤の目のような形状で畦畔は作られているが、部分的には２区や５区のように途切れる箇所をもつ。大畦畔は水田を区画するためだけではなく、人や牛などが往来するための道路として利用されたものと考えられる。

調査では水田区画全体を検出したわけではないが、検出状況から東西及び南北方向に長い長方形状をなし、その規模は幅 10 ｍ以上、長さ 20 ｍ以上、区画面積 200㎡以上と推測される。今回の調査により、少なくとも室町時代以降、調査地や周辺地域には大畦畔を伴った農村集落の存在が明らかになり、これにより当時の集落様相や水田構造の一端が解明されたことは貴重な成果といえよう。

２．集落址の調査

２区と５区からは、集落に関連する遺構や遺物を確認した。２区では掘立柱建物址や土坑、井戸址、柱穴、５区からは溝や土坑、柱穴等を検出した。これらの遺構は平安時代後期から鎌倉時代前期、11 世紀から 13 世紀に存在したものと考えられる。外環状線関連の調査でも同時期の遺構は検出されているが、それらの多くは概ね鎌倉時代、13 世紀代のものであり、本調査検出の遺構は、それより古い時期のものとなる。

ここでは、２区で検出した遺構の変遷を概観する。検出した遺構のうち、７基の土坑からは平安時代後期、11 世紀から 12 世紀初頭の土器が出土している。このことから、調査地や近隣地域において該期の集落が存在している可能性は極めて高いと考えられる。出土品や出土状況から、土坑の性格は遺物の廃棄もしくは埋納を目的としたものと推測される。



第 66 図　畦畔検出状況図

次に井戸址であるが、井戸は土坑とは異なり一定の期間存続しており、出土品をみると時期幅が認められる。最も古い時期の遺物は土坑出土品と同時期であり、新しい時期は 13 世紀代である。このことから、土坑が作られた期間には井戸が併存していたものと考えられる。

2 基の井戸址のうち、SE201 からは井戸枠として利用されたと思われる木杭や板材が出土した（図版 28　B ～ E）。調査地周辺では余戸中ノ孝遺跡 4 次調査や東垣生八反地遺跡 2 次・4 次調査でも井戸址が検出されているが、これらの井戸は曲物が井戸枠として利用されており、SE201 は井戸を廃棄する際に、本来、使用していた曲物を取り除き、別の井戸に再利用した可能性がある。なお、井戸の周囲には直径 10 ～ 20cmの比較的規模の小さな柱穴が点在しており、本来、これらが井戸の上屋を構成する柱穴になる可能性がある。

その後、調査地内には 2 基の土坑（SK202・209）と掘立柱建物 2 棟が出現する。まず、建物址であるが、出土品の分析により僅かに掘立 201 が掘立 202 に先行する。概ね、鎌倉時代前期、12 世紀後半から 13 世紀前半には建物が存在したものと推測される。

注目される遺構は、前述した土坑 SK202・209 である。両者は他の土坑とは異なり、明確な用途をもった施設と考えられる。出土品をみると他の土坑より後出する時期のものであり、12 世紀代の構築と考えられる。両者の重複関係は明確でなく、SK202 に SK209 が付設された可能性がある。SK202 は東西方向に長い楕円形状の土坑で、土坑基底面には扁平な礫が長軸方向に対して整然と敷かれている。ただし、土坑西側は礫が弧状に配置され、その中心部は直径 25cm程度の空洞となっている。さらに、礫の上面からは厚さ 7 ～ 8cm程度の炭化物が検出されている。このような土坑の検出事例はなく、用途や性格等については今後の課題となる。

3．出土品の分析

本調査では検出した遺構内や第10層及び水田土壌等から、古墳時代後期（6世紀）から室町時代までの遺物が出土している。5区検出の柱穴からは最も古い時期である古墳時代後期、6世紀前半から7世紀前半頃の須恵器（坏身・高坏・甕）のほかに奈良時代の須恵器（坏蓋・坏）が出土し、その他の遺構や第10層中からは平安時代から鎌倉時代（10～13世紀）の土師器や須恵器、黒色土器、瓦器のほかに施釉陶器や陶磁器、鉄器、木器、動物遺存体（動物歯）等が出土している。

ここでは、2区で検出した土坑出土品を対象として、分析を試みる。2区からは、9基の土坑を検出した。このうち、平安時代後期に時期比定される土坑は7基である。土坑内からは完形品を含む土器類が数多く出土しており、底部調整に着目し、器種毎に分析を試みる。分析の対象は本稿掲載の土師器46点、黒色土器9点である。

1）土師器　坏

土師器の坏は、完形品6点（復元品を含む）と破片2点の併せて8点を対象とする。内訳はSK201：4点、SK204：3点、SK208：1点である。

形　　態：体部は直立または内湾気味に立ち上がり、底部の形態は①平底（4点）、②0.5～1.0㎜程度の突出部をもつ平底（4点）の2種類がある。

底部①：SK201（82～85）

底部②：SK204（99～101）、SK208（152）

法　　量：全体では口径13.7～15.4cm、器高2.8～4.6cmであり、底部形態では底部①は口径13.9～14.8cm、器高2.8～4.3cm、底部②は口径13.7～15.4cm、器高3.4～4.6cmとなり、底部②より底部①が口径の縮小化がみられる。なお、SK201（85）は口径14.3cm、器高2.8cmであり、出土品の中では器高の低い坏である。

底部調整：底部①の切り離しは回転ヘラ切り技法によるものが3点〔SK201（82～84）〕、回転糸切り技法が1点〔SK201(85)〕である。底部②の切り離しは回転ヘラ切り技法1点〔SK208(152)〕、その他はすべて回転糸切り技法によるものである。なお、底部①は回転ヘラ切り後に丁寧なナデを施している。

色　　調：内外面共に、黄橙色または橙色をなす。

2）土師器　椀

土師器の椀は、完形品1点を含む11点を対象とする。内訳はSK201：3点、SK204：2点、SK206：1点、SK207：5点である。このうち、底部調整の確認できた椀は7点である。

形　　態：体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部の形態は①円盤状の高台をもつもの（2点）、②輪状の高台を貼り付けるもの（5点）の2種類がある。

底部①：SK201（86）、SK207（143）

底部②：SK204（103）、SK206（142）、SK207（144･146･147）

法　　量：口径13.8～16.8cm、高台径5.8～6.8cm、器高5.1～6.3cmである。底部形態をみると、底部①のSK201（86）は完形品で、口径13.8cm、底径6.8cm、器高5.1cm、SK207（143）は口径16.0cm、底径6.6cm、器高6.3cmであり、SK207出土品の法量がSK201出土品にくらべて大きいことがわかる。また、底部②のうちSK207（144）は復元完形品で、口径14.9cm、底径6.6cm、器高6.3cmである。

底部調整：底部①のうち、SK201（86）の切り離しは回転ヘラ切り技法〔SK207（143）は小片の為、不明〕、底部②の切り離しは、4点〔SK204（103）、SK207（144・146・147）〕が回転糸切り技法によるものである〔SK206（142）は不明〕。

色　　調：灰白色、にぶい橙色、にぶい褐色の3種類があるが、灰白色の椀は7点あり、焼成は良好で胎土も精緻なものばかりである。

3）土師器　皿

土師器の皿は、完形品10点を含む27点を掲載しているが、ここでは底部調整の確認できる23点を対象とする。内訳はSK201：8点、SK204：6点、SK205：3点、SK207：2点、SK208：4点である。

形　　態：口縁部は直立または内湾気味に立ち上がり、底部形態は①平底（12点）、②1㎜程度の突出部をもつ平底（5点）、③中央部が僅かに膨らみをもつ丸味底（6点）の3種類がある。

底部①：SK201（90～93・97）、SK204（111）、SK205（138・140）、SK207（148・149）、SK208（155・156）〔計12点〕

底部②：SK201（95・96）、SK204（107～109）〔計5点〕

底部③：SK201（94）、SK204（104・105）、SK205（139）、SK208（153・154）〔計6点〕

法　　量：全体では、口径7.8～9.6㎝、器高1.2～2.0㎝である。底部形態をみると、底部①は口径7.8～9.6㎝、器高1.4～2.0㎝、底部②は口径8.7～9.6㎝、器高1.6～1.9㎝、底部③は口径8.6～9.1㎝、器高1.7～2.0㎝となり、底部②の口径が全体では大きいことがわかる。なお、底部③には器壁が5㎜程度の厚いものがみられる。

底部調整：底部②の切り離しは回転糸切り技法、底部③は回転ヘラ切り技法のみである。底部①には両者がみられ、SK205とSK208出土品は、すべて回転ヘラ切り技法であるが、SK201とSK204、SK207出土品には両者が混在する。SK201にはヘラ切り技法4点（90～93）と糸切り技法1点（97）があり、SK204はヘラ切り技法2点（104・105）と糸切り技法4点（107～109・111）、SK207はヘラ切り技法1点（149）と糸切り技法1点（148）である。なお、全体では回転ヘラ切り技法15点、糸切り技法8点となる。

色　　調：黄褐色や橙色が多くみられるが、赤褐色（156）や灰白色（139）、褐色（138・140）の皿がある。なお、SK202からは「ての字」口縁の皿2点（126・127）が出土している。

4）黒色土器　椀

黒色土器の椀は、復元完形品1点を含む9点が出土した。内訳はSK201：1点（89）、SK203：2点（136・137）、SK204：5点（112～116）、SK208：1点（157）である。このうち、底部調整の確認できた椀は4点である。

形　　態：体部は、やや丸味を帯び、口縁部は短く外反する。底部には丸みのある断面三角形状の高台が貼り付けられているが、高台が消失し、接合部分の跡が残るものが3点ある（112・116・157）。なお、器表面の仕上げは内外面共にヘラミガキを施しているが、SK208出土品（157）の底部内面にはタテ及びヨコ方向に施した暗文風のヘラミガキが顕著に残る。

法　　量：口径12.8～16.8㎝、高台径6.4～6.8㎝、器高5.7～6.6㎝である。このうち、SK208（157）は高台を欠損しているが、口縁部から底部までの完形品で、口径16.7㎝、器高5.7㎝である。

底部調整：底部の切り離しは、SK208（157）が回転ヘラ切り技法、SK204（112・113・116）は回転糸切り技法によるものである。

色　　調：出土品のすべてが、灰白色をなす。

5）まとめ

土坑出土品のうち、土師器の底部調整は対象遺物36点中、回転ヘラ切り技法20点（坏：4点、椀：1点、皿：15点）、回転糸切り技法16点（坏：4点、椀：4点、皿：8点）である。土坑別ではSK208出土品には坏と皿があり、すべて回転ヘラ切り技法である。また、数は少ないがSK205出土品（皿）も同様の技法である。一方、SK207出土品には椀と皿とがあり、皿1点以外は、すべて回転糸切り技法である。なお、SK201とSK204には両者が同等数、混在する。

黒色土器は4基の土坑から出土したが、SK208出土品は回転ヘラ切り技法、SK204出土品はすべて回転糸切り技法である。なお、SK208出土品は土師器、黒色土器共に回転ヘラ切り技法であり、7基の土坑では最も古い段階の土坑と考えられる。次に、SK201とSK204はヘラと糸が混在し、両者は黒色土器を伴っている。さらに、SK207には回転糸切り技法のみの土師器椀がみられ、黒色土器はみられない。これらのことから、SK208→SK201・SK204→SK207の順で変遷することが想定される。形態や底部調整等から7基の土坑は平安時代後期、11世紀から12世紀初頭頃の構築と考えられる。現在、松山平野での11世紀代における土器編年は確立されておらず、詳細は不明な点が多い。今回の分析では底部の切り離しがヘラ切り技法から糸切り技法に変化する過程と、それに伴う土器様相の一端が明らかになった。今後、該期の土器編年を研究するうえで、今回の分析結果が活用されることを期待する。

4．施釉陶器・陶磁器・瓦器

本調査では施釉陶器や陶磁器、瓦器が出土した。ここでは、これらについて要約する。

1）施釉陶器（巻頭図版3）

調査では、4点の施釉陶器が出土した。いずれも碗の破片であるが、出土地点は2区検出の土坑SK202と5区検出の溝SD501、及び第10層中である。まず、緑釉陶器はSK202（128）と5区第10層中（288）の2点が出土した。128は体部の小片で土師質で、外面には薄緑色の釉薬が掛けられている。また、288は底部片で須恵質である。円盤高台状の底部をもち、外面に薄緑色の釉薬が掛けられている。形態や胎土の特徴より京都産、10世紀代の製品と考えられる。次に、灰釉陶器は溝SD501（270）と2区第10層中（231）の2点が出土した。両者は須恵質で、蛇ノ目状の高台をもち、内面及び高台外側部分に灰褐色の釉薬が掛けられている。形態の特徴より、猿投窯のK－14窯期（9世紀中頃）の製品と考えられる。

2）陶磁器

調査では、国産陶磁器と輸入陶磁器が出土した。国産陶磁器には亀山焼や常滑焼のほかに古瀬戸、十瓶焼がある。亀山焼は4点（22・23・42・48）、常滑焼は1点（41）あり、これらは全て2区検出の水田層から出土しており、室町時代の所産である。また、5区の水田層からは松山市内でも出土事例の極めて少ない古瀬戸の『おろし皿』（260）が出土している（巻頭図版4）。須恵質で硬く、内側には碁盤の目のような線刻が施されている。本調査出土のおろし皿は、形態や調整等の特徴より室町時代に製作されたものと考えられる。このほか、2区の井戸SE202からは十瓶焼（香川県）の壺の胴部片（200）が出土している。

輸入陶磁器は白磁13点（碗：11点、皿：2点）と青磁2点（碗）が出土しているが、すべて破片である。

水田層からは白磁碗 4 点（24 ～ 26・263）と白磁皿 1 点（27）、集落遺構からは掘立 201：1 点（71）、掘立 202：1 点（81）、SD201：1 点（61）、SK202：1 点（129）、SP5086：1 点（282）の計 5 点が出土した。また、地点不明品ではあるが、2 区より白磁碗 2 点（239・240）、白磁皿 1 点（241）の出土がある。なお、241 は紅皿（1/2 の残存）である。また、青磁は体部片で 5 区の水田層より 1 点（262）、2 区検出の溝 SD201 より 1 点（62）が出土している。

3）瓦　器

松山市内における古代から中世の遺跡からは、瓦器（椀・皿）が出土する事例が多い。瓦器は関西地方を中心に製作され、日本各地に流通しているが、市内の遺跡では大阪府南部、和泉地方で製作された「和泉型瓦器椀」が圧倒的に多く、少数ではあるが大阪府北部、枚方市近隣の楠葉地方で製作された「楠葉型瓦器椀」が含まれている。本調査では、2 区と 5 区で楠葉型瓦器椀 6 点が出土した。いずれも口縁部の破片であり、内訳は掘立 202：1 点（78）、SE201：3 点（175 ～ 177）、SE202： 1 点（195）、SD501：1 点（269）である。形態の特徴より、11 ～ 12 世紀の製品である。なお、調査で出土した和泉型と思われる破片は 4 点〔掘立 201:2 点（69･70）、SD201: 1 点（58）、SE201: 1 点（178）〕であり、楠葉型の占める割合が高いことがわかる。このことは、当地と楠葉地域が何らかの関係性をもつ可能性が高いと考えられる。

5．自然科学分析の結果

調査では建物の柱材や井戸枠として利用された杭や板材など、比較的多くの木製品が出土した。これらは自然科学的な分析（樹種同定）を行うことにより、使用木材が判明し、そのことにより当時の植生や古環境の復元が可能となる。

2 区検出の掘立 202 からは、当時使用された柱材の一部が遺存しており、年代測定や樹種同定を専門業者に委託した。年代測定結果は 7 ～ 9 世紀を示し、木材はスギであることが判明した。発掘調査の結果では掘立 202 は鎌倉時代前期と考えられることから、実年代の認定は課題の残る結果となった。

また、井戸址から出土した木杭と板材は樹種同定を行った結果、スギであることが判明している。このほか、2 区検出の土坑 SK202 には炭化物層の堆積がみられた。炭化物の全容を解明するため、それに含まれる微細物分析を専門業者に委託した。結果は種実遺体と炭化材とが検出された。種実遺体は炭化したイネ籾片 2 個とオオムギの可能性をもつイネ科の穎果 1 個、炭化していないタガラシの果実 2 個である。なお、炭化材は広葉樹のコナラ亜属コナラ節に同定され、時期は 12 世紀前後との判定であった。

今回の調査では、調査地や周辺地域における室町時代以降の水田区画や規模等を解明することができ、これまで不明であった水田様相の一端が明らかになった。現在、調査地や周辺地域には水田が存在しているが、調査で検出した水田址の形状や方向性は現在の水田と酷似しており、室町時代の水田区画が現在まで踏襲されたものと考えられる。また、集落址については、これまでの調査成果とは異なり、平安時代後期（11 世紀代）における集落の存在が確実となった。集落の性格は定かではないが、今後、垣生や南吉田、余戸地区内の調査が進めば、集落の範囲や様相及び変遷が明らかとなろう。また、自然科学分析の結果次第ではあるが、同地区における弥生時代から中世までの古地形や古環境を解明する重要な手掛かりを得ることができたと考えている。

写真図版

図版1

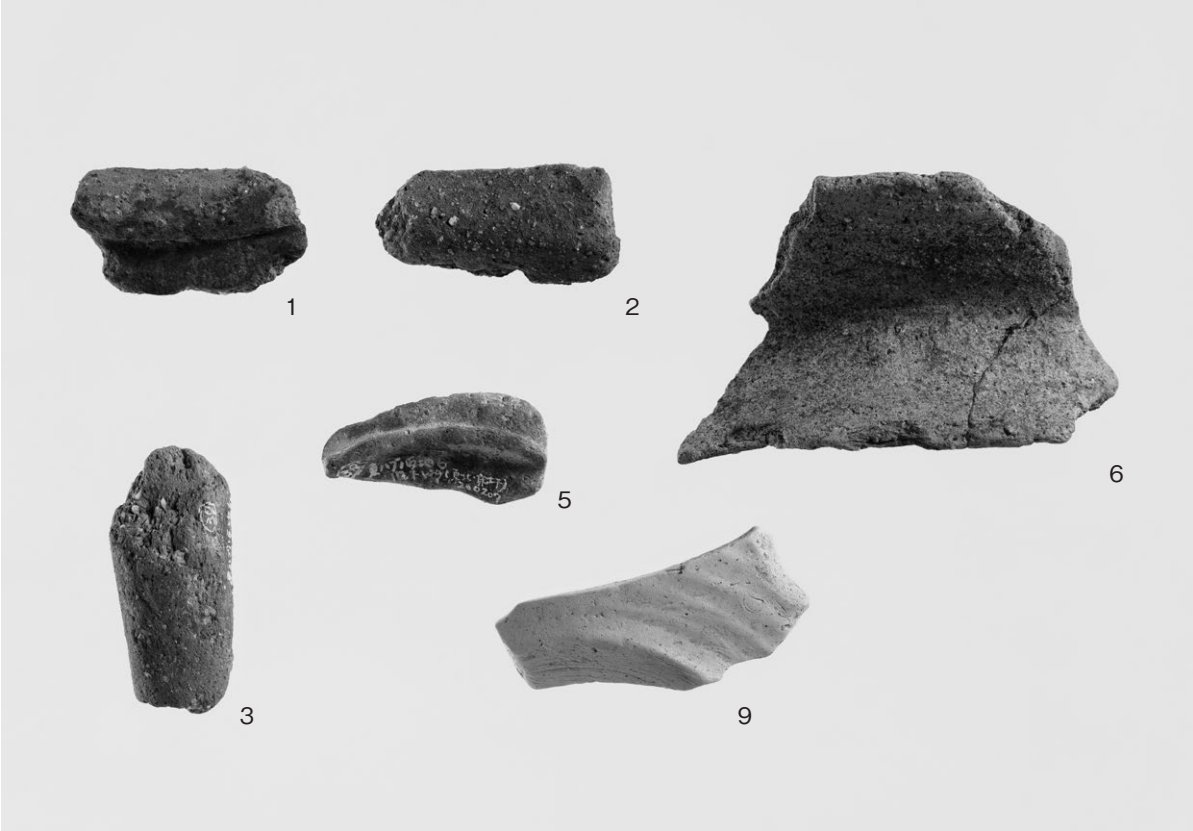
１．１区水田址検出状況①（西より）

図版２

１．１区水田址検出状況②（南西より）

２．１区北壁土層（南より）

１．１区畦畔 101 検出状況（北西より）



２．１区出土遺物（水田層：１～３・５・６、トレンチ：９）

図版４

１．２区水田址検出状況①（北東より）

２．２区水田址検出状況②（東より）

図版５

１．２区水田１検出状況（南より）

２．２区東壁土層（西より）

図版６

１．２区畦畔 201、水田２検出状況（西より）

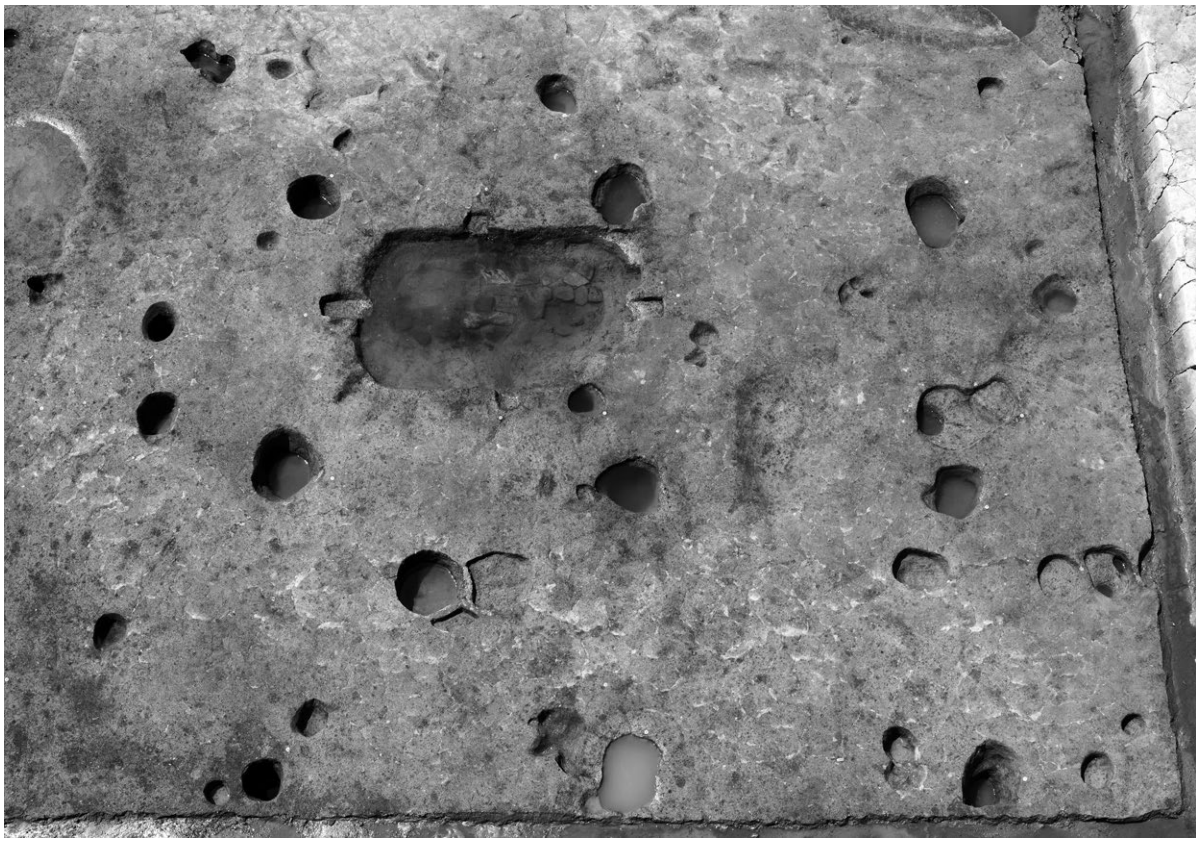
２．２区畦畔 203 検出状況（南西より）

１．２区集落址検出状況（西より）

２．２区集落址完掘状況（北より）

図版8

１．２区 SD201 検出状況（北西より）



２．２区掘立 202 完掘状況（北より）

１．２区掘立 202（SP2051）柱材検出状況（南より）

２．２区 SK201・204 遺物出土状況（南より）

図版10

１．２区 SK201・204 完掘状況（南より）

２．２区 SK202・209 検出状況（南より）

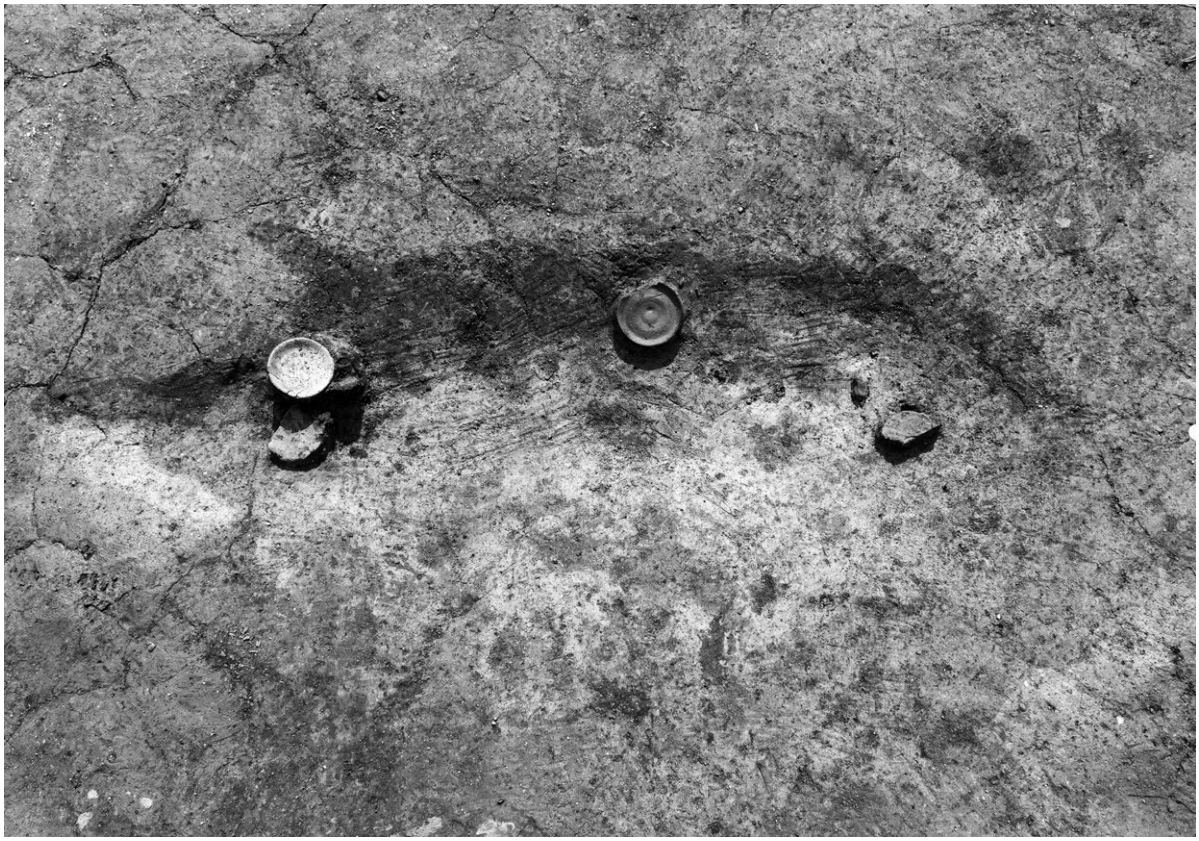
１．２区 SK202・209 断面（東より）

２．２区 SK202 敷石検出状況①（東より）

図版12

１．２区 SK202 敷石検出状況②（北より）

２．２区 SK203 検出状況（南より）

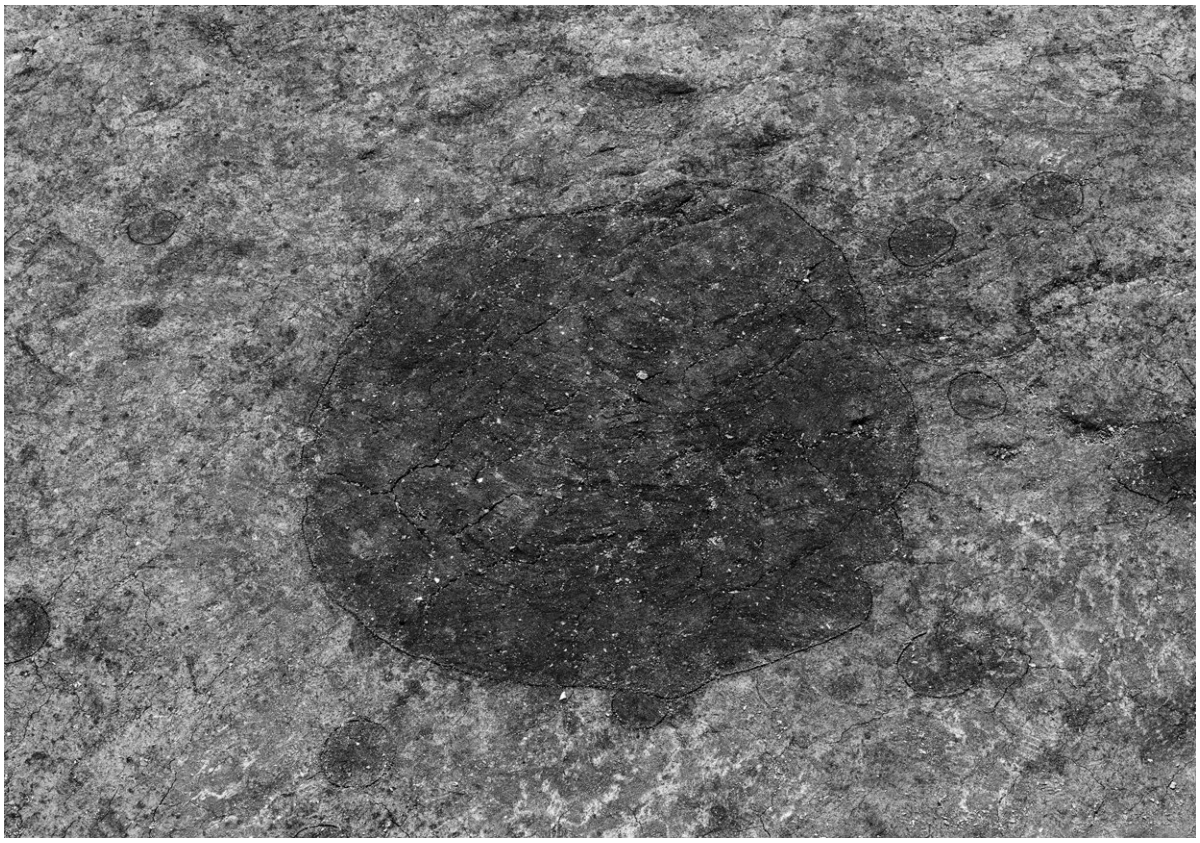


１．２区 SK205 遺物出土状況（西より）

２．２区 SK207 遺物出土状況（西より）

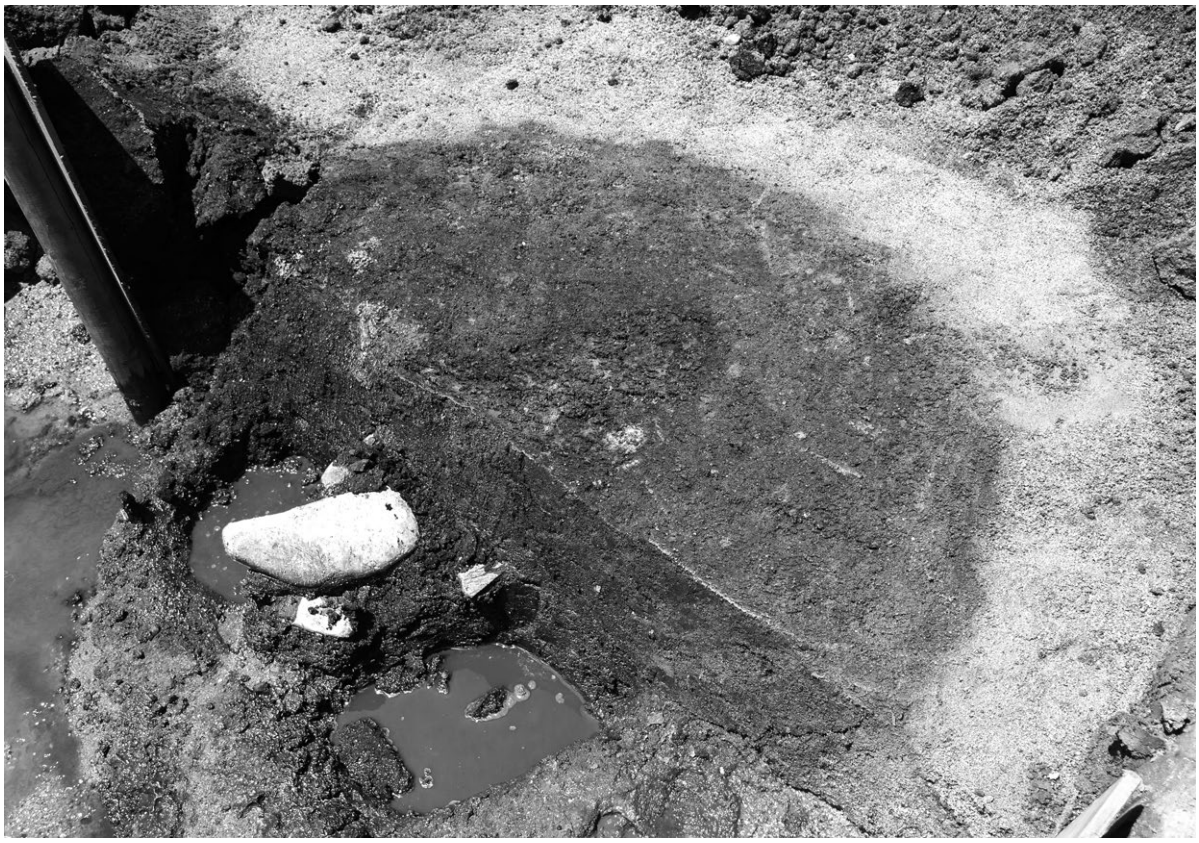
図版14

１．２区 SK208 遺物出土状況（南より）



２．２区 SE201 検出状況（西より）

１．２区 SE201 断面（東より）

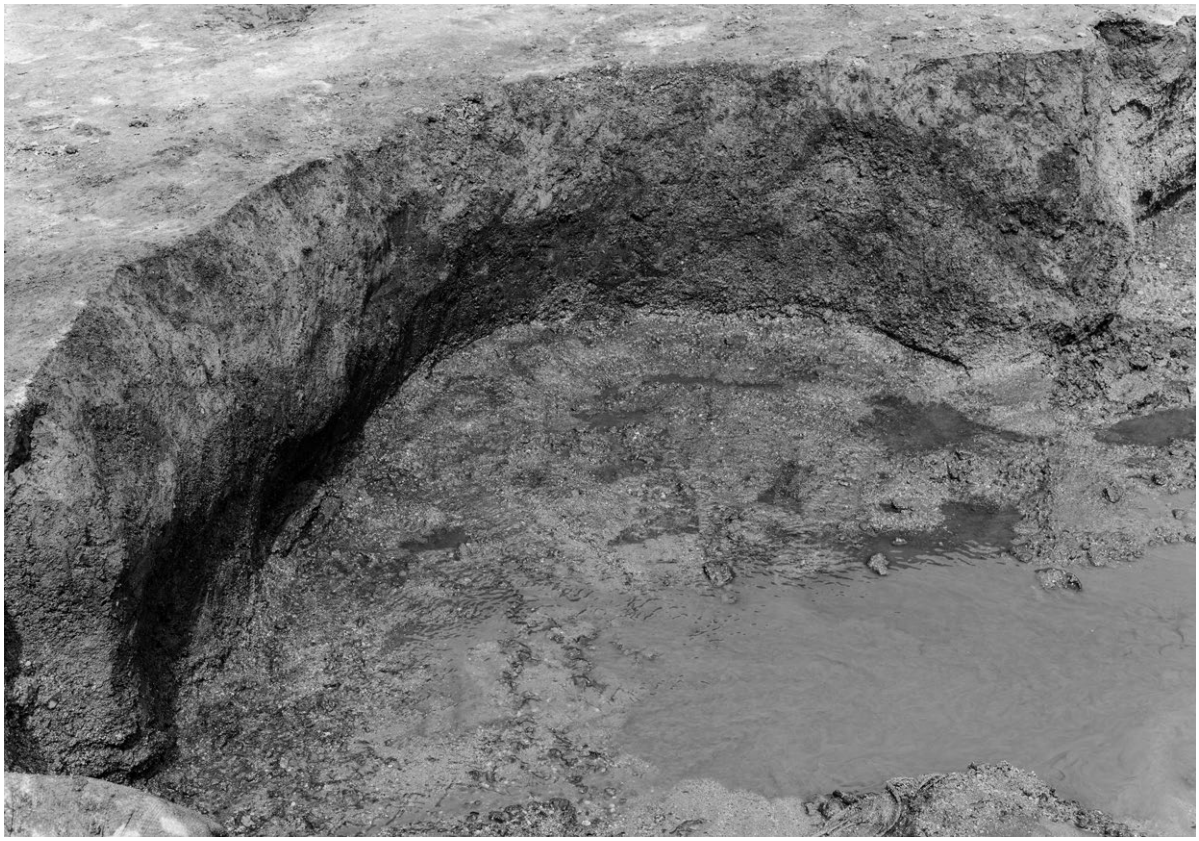


２．２区 SE201 半截状況（北東より）

図版16

１．２区 SE201 掘り方検出状況（南東より）

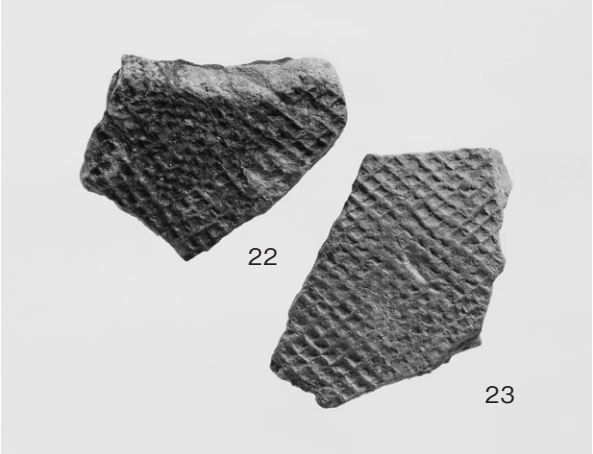
２．２区 SE201 杭・板材出土状況（西より）



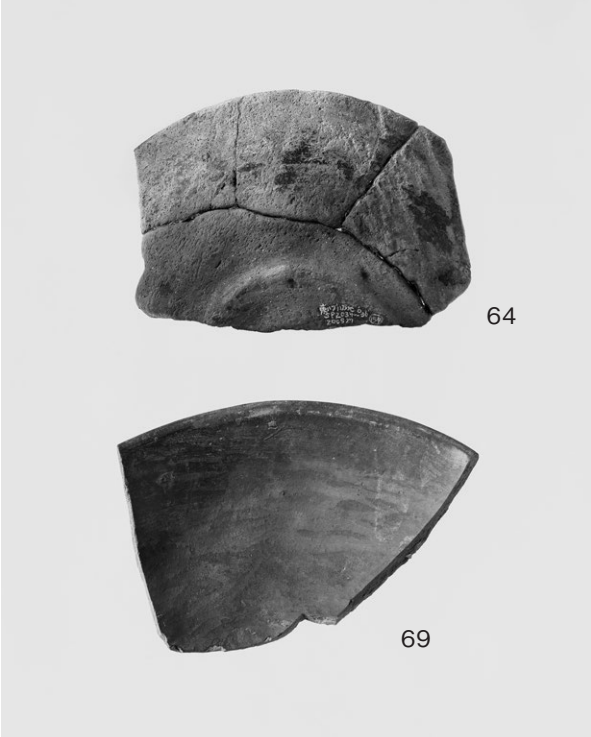
１．２区 SE202 完掘状況（西より）

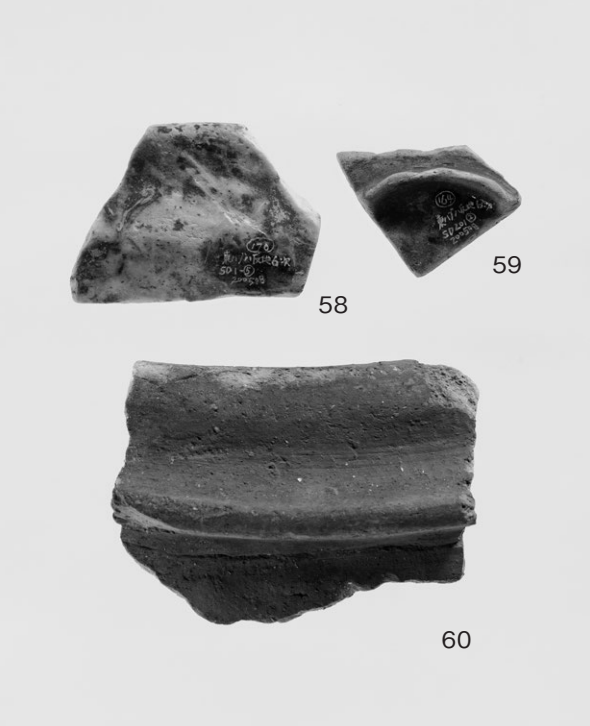
２．２区 SE202 断面（北西より）

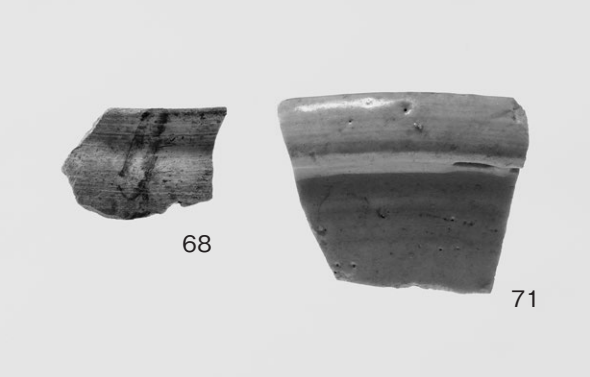
図版18



１．２区出土遺物（水田１埋土：14 ～ 16・18・22・23・26、水田２埋土：33 ～ 36・41・42、畦畔 201：50）

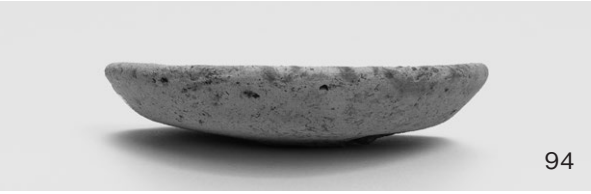




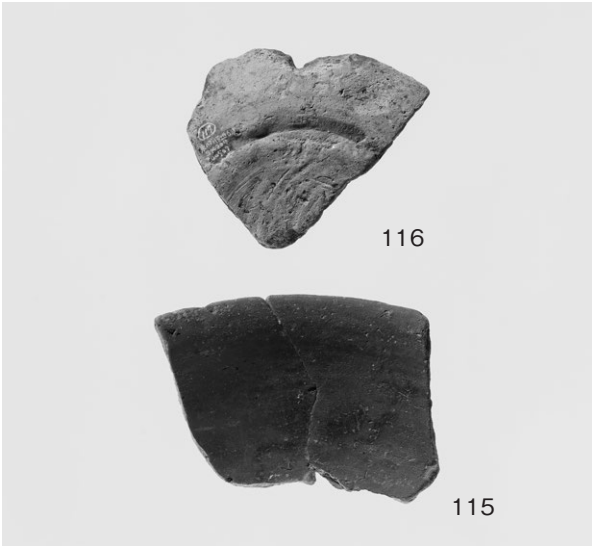


１．２区出土遺物（SD201：54・58 ～ 62、掘立 201：64・68・69・71・72）

図版20

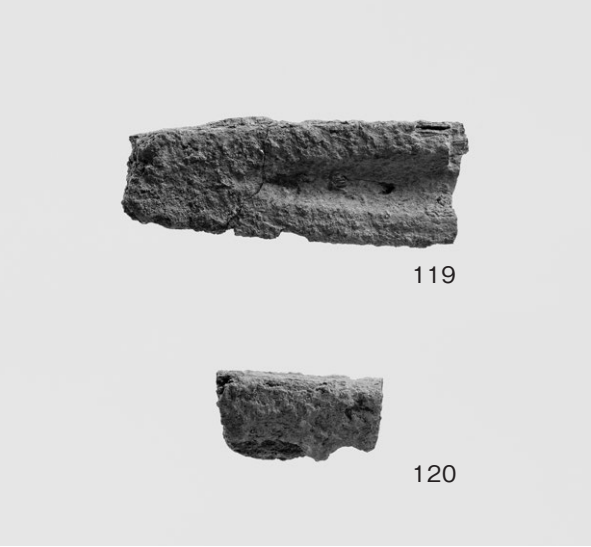


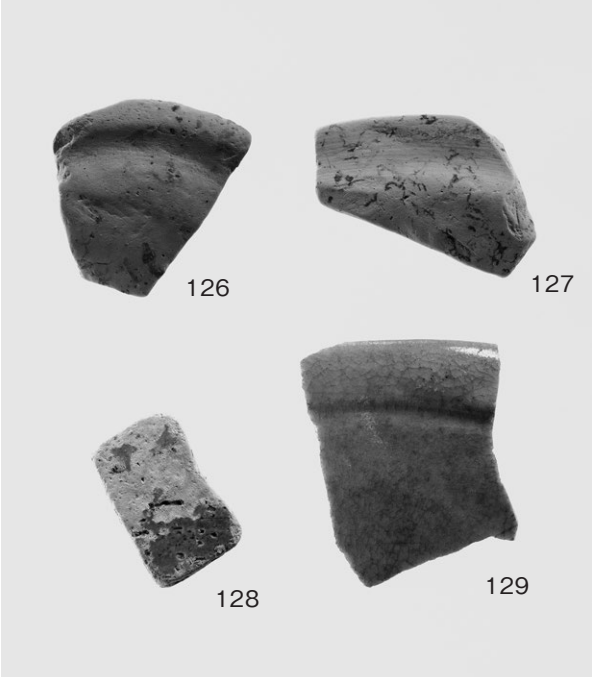
１．SK201 出土遺物

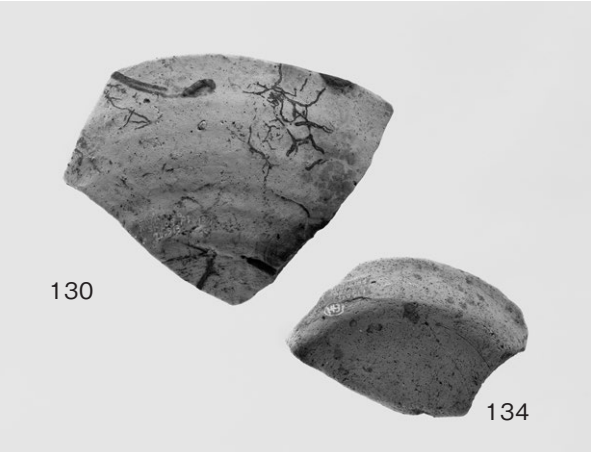


1．SK204 出土遺物①

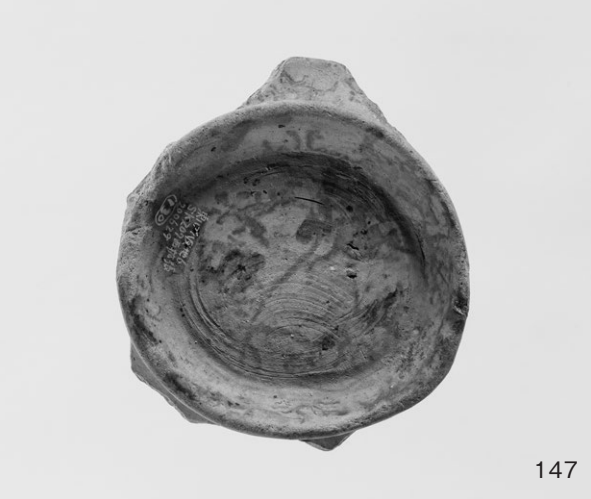
図版22





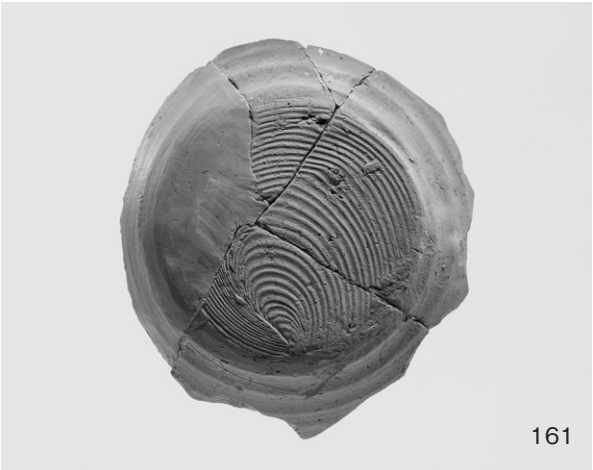


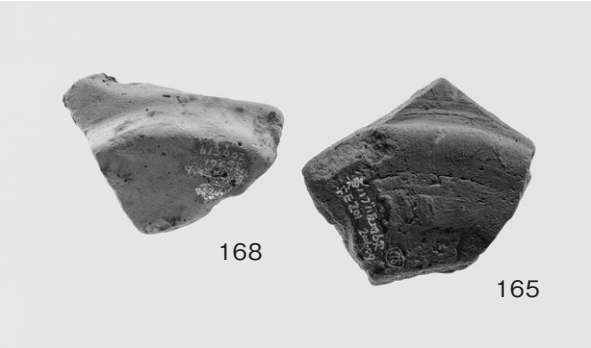
１．２区出土遺物（SK204②：118～120、SK202：121・124・126～129、SK209：130・134）



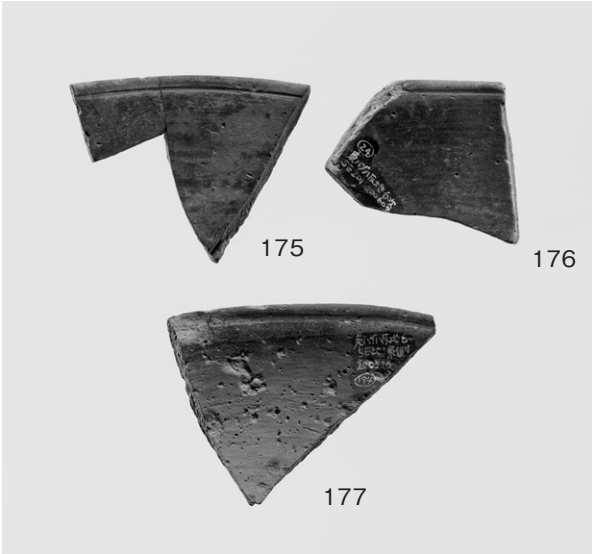
１．２区出土遺物（SK203：137、SK205：138・139、SK207：144・146～149）

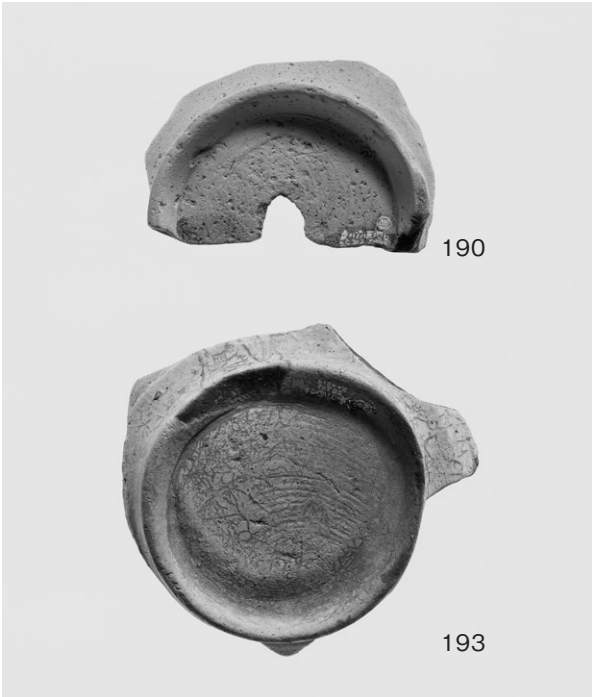
図版24





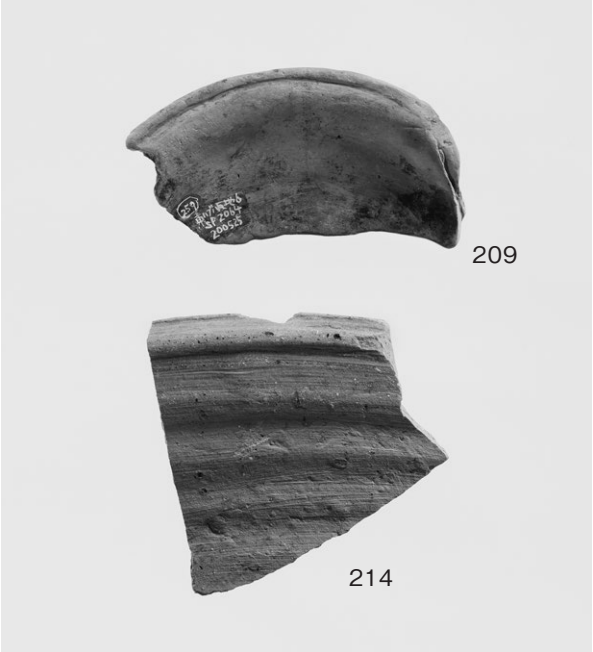
１．２区出土遺物（SK208：152 ～ 159、SE201 ①：161・165・168）

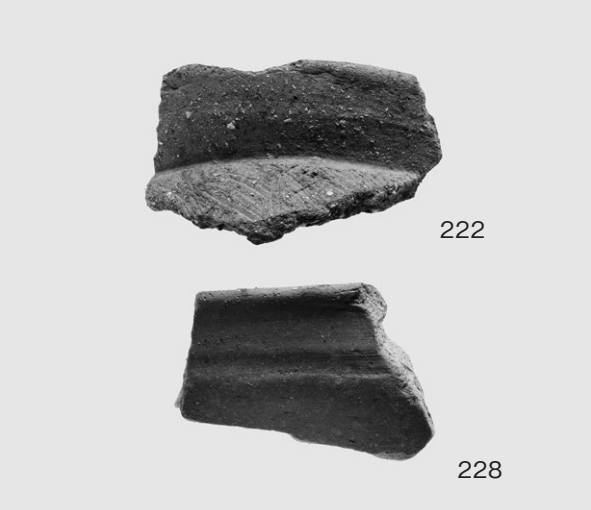




１．２区出土遺物（SE201 ②：169・174 ～ 177・179・184、SE202 ①：190・193）

図版26





１．２区出土遺物（SE202②：195・196・200、SP2064：209、SP2140：212、SP2053：214、包含層①：217・220・222・228）

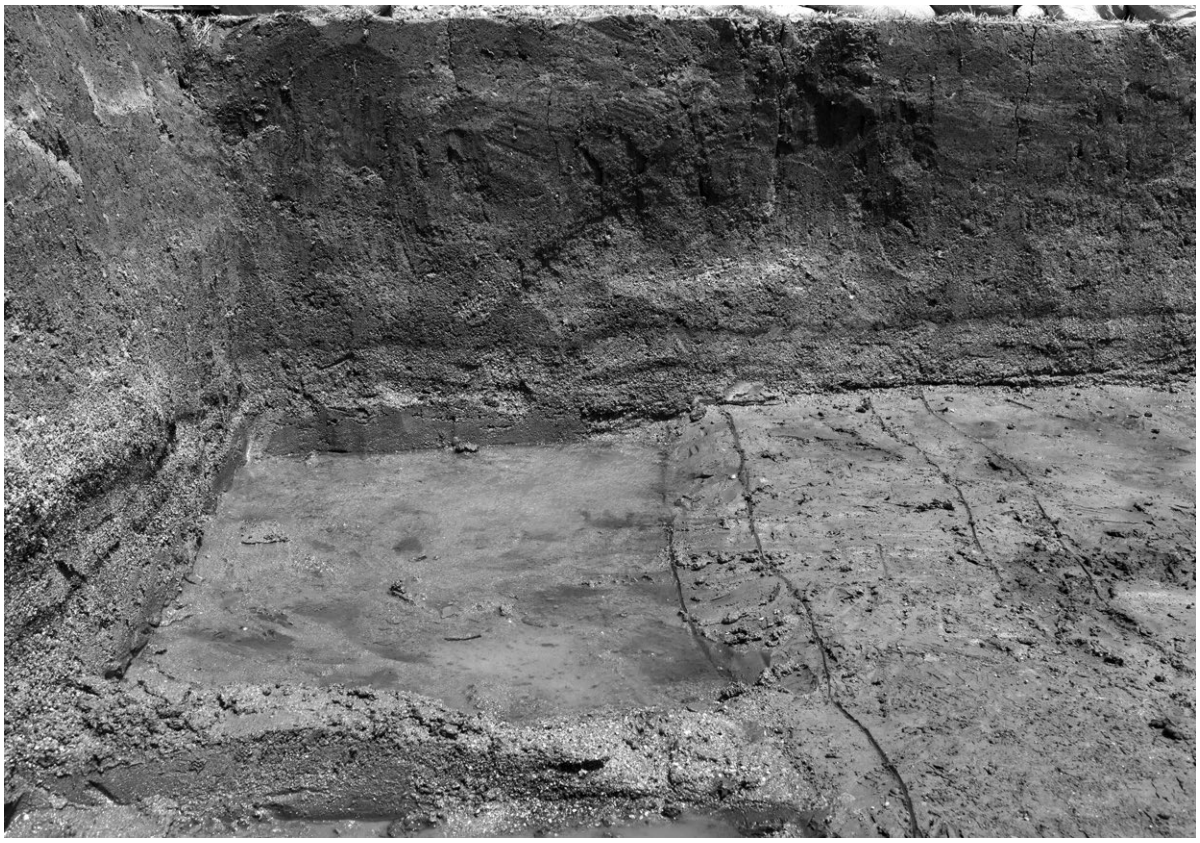
１．２区出土遺物（包含層②：230・231・233・234・236、地点不明：237・238・241）

図版28

1．出土遺物（掘立 202 SP2051：A、SE201：B ～ E）

１．３区水田址検出状況（北より）

１．３区畦畔 301 検出状況（南東より）



２．３区畦畔 302、SD301 検出状況（南より）

１．４・５区水田址検出状況（南東より）

２．４区畦畔 401 検出状況（東より）

１．４区畦畔 402 検出状況（北より）

２．４区畦畔 403 検出状況（北東より）

１．４区北壁土層（南東より）

２．４区作業風景（南西より）

図版34

１．４区水田層出土遺物

２．５区水田址検出状況（北東より）

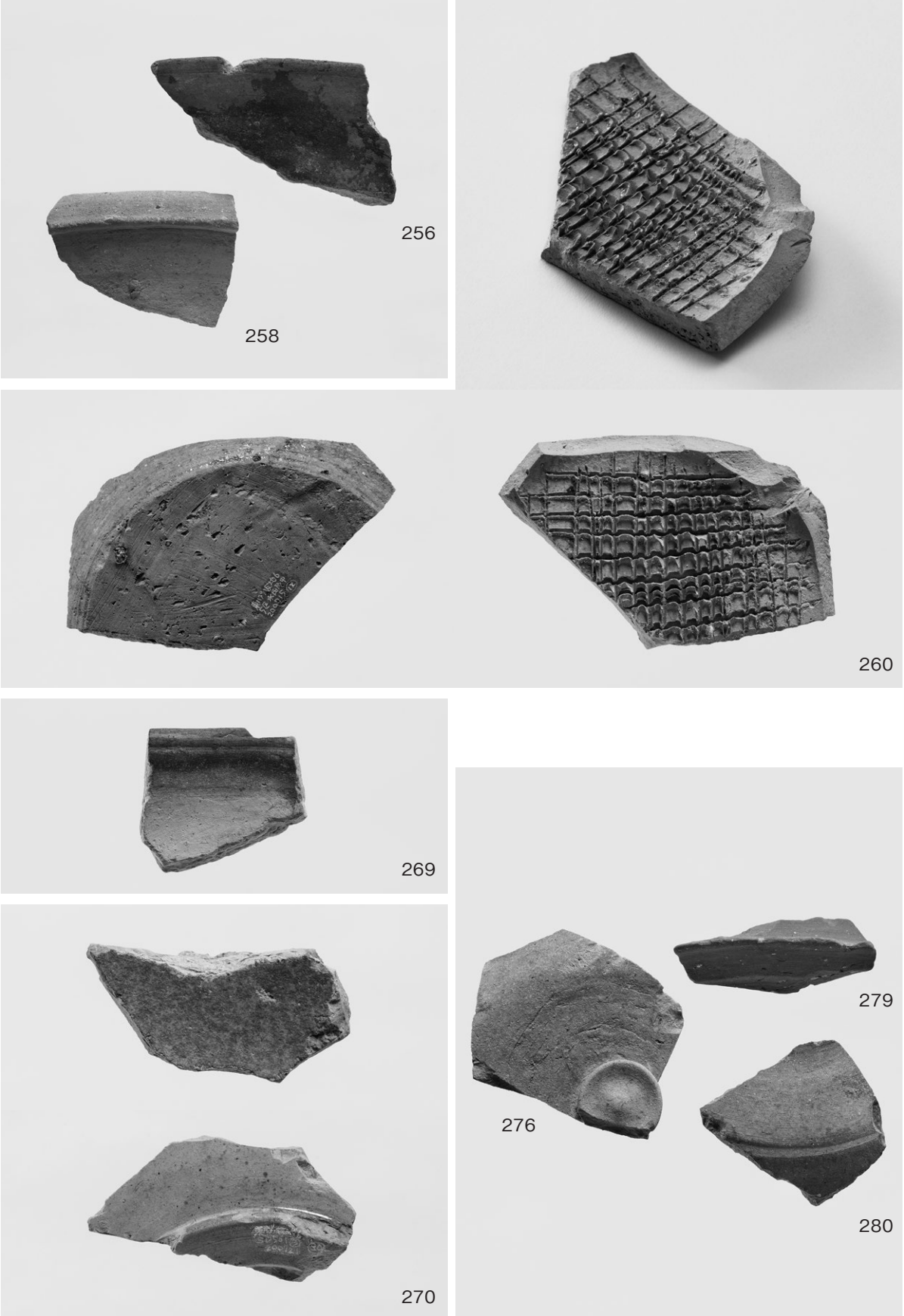
１．５区畦畔 501 検出状況（南東より）

２．５区西壁土層（北東より）

図版36

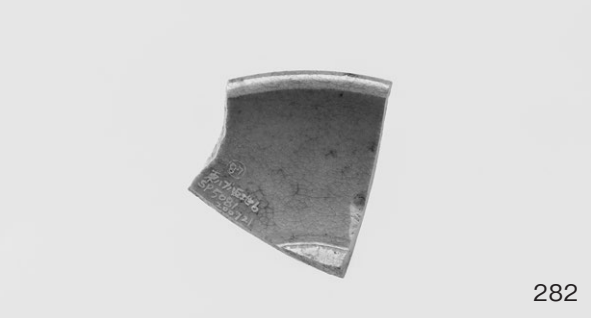
１．５区集落址検出状況（東より）

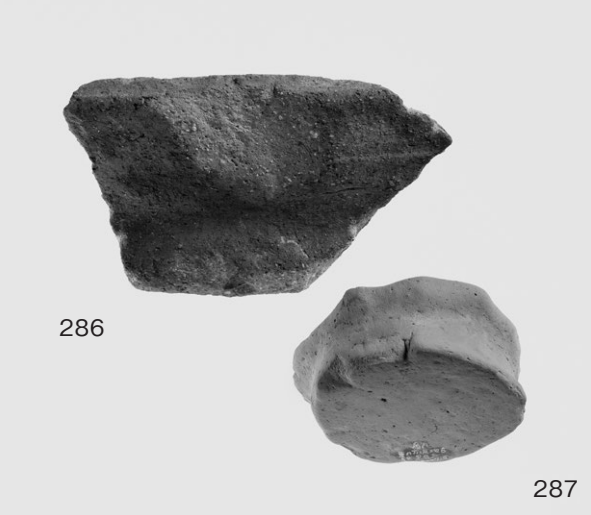
２．５区集落址完掘状況（東より）

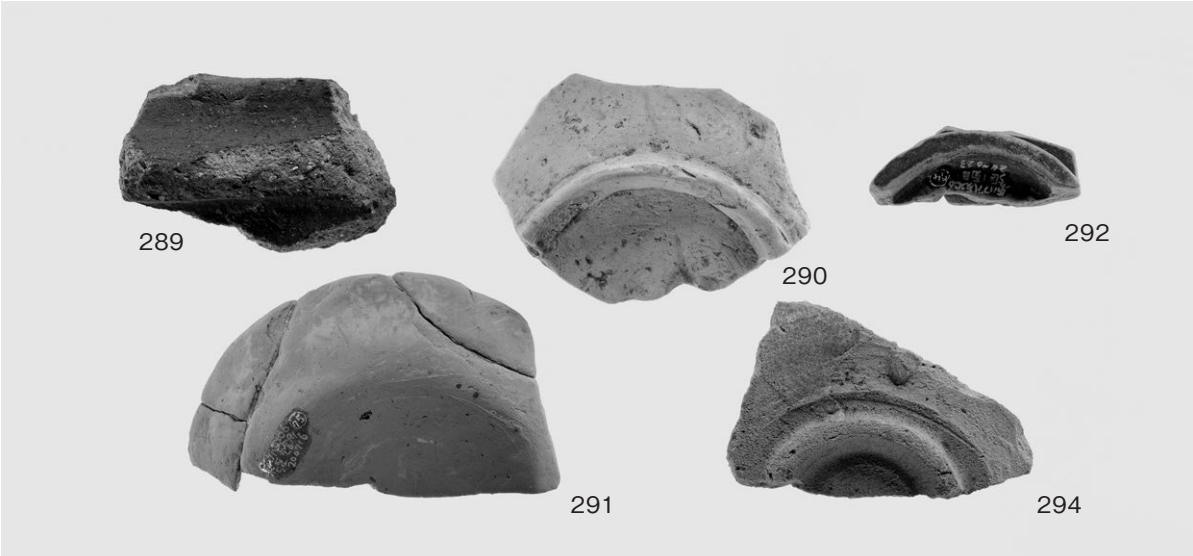


１．５区出土遺物（水田址：256・258・260、SD501：269・270、SP5011：276、SP5095：279、SP5022：280）

図版38







１．５区出土遺物（SP5081：281・282、SP5063：284、包含層：286 ～ 288、トレンチ：289 ～ 291、地点不明：292・294）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひがしはぶはったんじいせき
書名	東垣生八反地遺跡－６次調査－
副書名	（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 204 集
編著者名	水本　完児・宮内　慎一
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒 791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦 2022（令和４）年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ひがしはぶはったんじいせき 東垣生八反地遺跡 ６次調査	まつやましひがしはぶちょう 松山市東垣生町	38201	660	33° 48′ 49″	132° 43′ 7″	20200203 ～ 20200807	2,088	学校給食共同調理場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東垣生八反地遺跡 ６次調査	集落 水田	古代・中世	掘立、溝、土坑、井戸址、柱穴、畦畔、鋤址、足跡	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、陶磁器、鉄器、木器、動物遺存体	室町時代以降の水田区画や規模を解明

要　約

東垣生八反地遺跡６次調査からは、水田址と集落址を確認した。水田址からは畦畔や鋤址、足跡を検出し、水田層中からは土師器や陶磁器（亀山焼・常滑焼・古瀬戸・白磁・青磁）などの破片が出土した。出土遺物より、水田の構築時期は 13 ～ 14 世紀代、概ね室町時代以降と考えられる。検出した畦畔には規模の異なる大小２種類があり、とりわけ幅３ｍを超える大型の畦畔は周辺で実施した水田調査からは見つかっていない。大型畦畔の検出は水田形状や規模等、当時の水田様相を解明するうえで貴重な成果といえる。

一方、集落址では掘立柱建物址や溝、土坑、井戸址、柱穴を確認した。建物址は 13 世紀代、鎌倉時代の構築と考えられ、建物柱穴内には当時、使用された柱材の一部が遺存していた。検出した土坑のうち、７基の土坑からは平安時代後期、11 ～ 12 世紀初頭に時期比定される完形品を含む良好な土器類が出土した。土坑出土品の底部調整をみると、回転ヘラ切り技法から回転糸切り技法へ移行する状況の一端が明らかとなり、これら出土品は今後、該期の土器様相を解明する重要な資料である。また、これらの土坑より後出する時期（12 世紀代）では、基底面に敷石が施され、その上面に厚さ 10㎝程度の炭化物層が堆積する土坑１基を検出した。他の土坑とは明らかに異なり、何らかの施設と考えられるが松山市内では類例がなく、用途や性格は不明である。このほか、井戸址からは井戸枠に使用されたと思われる木杭や板材が出土した。なお、井戸址からは 11 ～ 13 世紀代の遺物が出土しており、建物や土坑、井戸は一定期間、同時併存していたものと考えられる。

出土品には古墳時代後期から奈良時代に使用された土師器や須恵器のほかに、遺構や包含層などから緑釉陶器や灰釉陶器の破片が数点出土している。また、楠葉型の瓦器椀の破片が建物や井戸址から出土しているが、松山市内の古代・中世遺跡では圧倒的に和泉型が多く、本調査では楠葉型の占める割合が高いことが注目される。

今回の調査により、松山市西部地域、余戸・垣生地区の平安時代から室町時代、概ね 11 ～ 14 世紀代の集落様相や変遷の一部が明らかになった。同地区内では古代や中世以外にも弥生時代や古墳時代の集落址が発見されており、今後、資料の増加により地区内における集落変遷や構造の解明が急務となろう。

松山市文化財調査報告書　第204集

（仮称）新垣生学校給食共同調理場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東垣生八反地遺跡

－6次調査－

令和4年2月28日　発行

編集・発行　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

印刷　セキ株式会社
〒790－8686　松山市湊町七丁目7番地1
TEL（089）945－0111